

大審院判事長谷川喬著述

# 改正 破產法正義

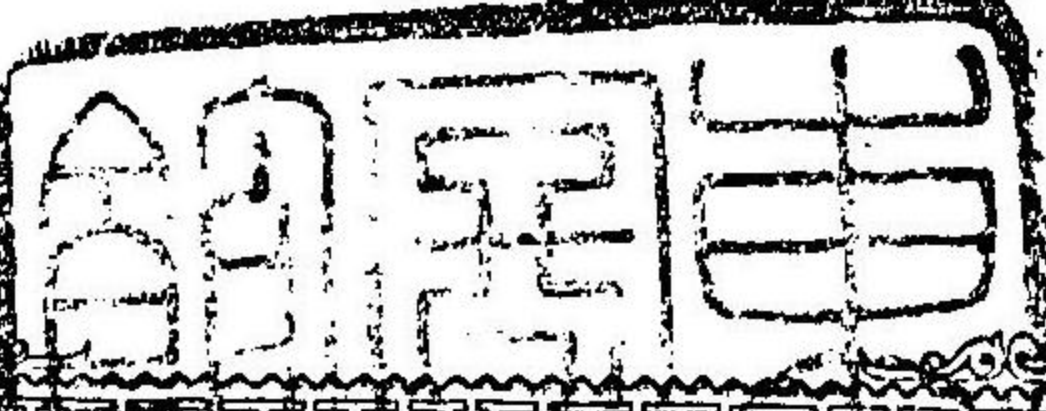
全

特別認可  
私立明治法律學校講法會內

新法註釋會出版

- 2 - 2/7

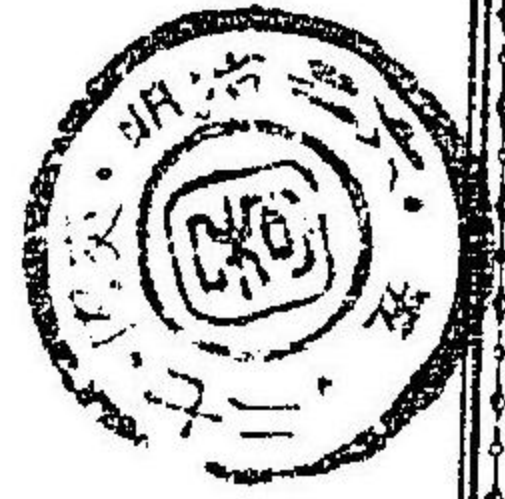
11931/1887



大審院判事長谷川喬著述

# 改正 破産法正義

全



特別認可  
私立明治法律學校講法會內

新法註釋會出版

## 自叙

手形法及ヒ破産法ニ付テハ余カ曩ニ著述セシ商法正義中既ニ之カ註  
解ヲ加フルモノアリト雖モ抑モ商法正義ハ則チ商法全部ニ涉リタル  
註解ナルヲ以テ既ニ前部ニ於テ註解ヲ加ヘ若クハ其引續ニ依リ了解  
シ易キモノニ對シテハ其後部ニ於テ故サラニ之ヲ省畧セシモノアリ  
故ニ今此一部分ノ實施ニ際シ單ニ其點ニ係ル研究ヲ遂クントスル者  
ニ在テハ前著未タ必スシモ完全ナルヲ期セス加之他ノ部分ノ實施ニ  
至ラサルカ爲メ此部分ニ於テモ往々解釋ヲ異ニセサル可ラサルモノ  
アリ例ヘハ商法第三條ニ商事トハ商人又ハ其他ノ人ノ爲シタルニ拘  
ハラズ總テノ商取引其他本法ニ規定シタル事項ヲ謂フトアルヲ以テ  
手形法及ヒ破産法ニ謂フ所ノ商事トハ右ノ定義ニ依リ判斷ヲ爲ス可  
キモノナリト雖モ該條ノ未タ實施セラレサル今日ニ在テハ別ニ相當

ノ解釋ヲ下サ、ルヲ得サルカ如シ夫レ商事上ノ負債ニ付テハ嚴格ナル破産法ノ制裁アルニ拘ハラズ民事上ノ負債ニ付テハ普通民事訴訟法ノ規定ニ從フニ過キス凡ソ此ノ如キ相違ヲ生スルハ全ク「商事」ナル定義ノ如何ニ因リテ定マルモノナルヲ以テ之カ區別ヲ論定スルカ如キハ商法一部分ノ施行ニ依リ新ニ生シタル問題ノ一ニ屬スルモノナリ其他此一部分ニ付許多ノ修正ヲ加ヘラントタル今日ニ於テハ到底新ナル註解ノ必要ナキヲ得ス是余カ更ニ此書ヲ著シ以テ萬一ノ裨益ヲ慮リタル所以ナリ

明治二十六年四月一日

長谷川 喬

目 録

緒 論

商事會社總則 自第七十六條

○會社ト財産共有トノ差違

第一節 合名會社

第一款 會社ノ設立 自第八十二條

第二款 會社契約ノ變更 自第八十三條

第三款 社員間ノ權利義務 自第八十五條

第四款 第三者ニ對スル社員ノ權利義務 自第九十八條

第五款 社員ノ退社 自第二百二十五條

第六款 會社ノ解散 自第二百三十五條

目 録

丁 數

一

四

三七

四一

四一

七八

八二

一四一

一七六

一九八

一

第二節 合資會社 自第百五十三條

○合資會社ノ差金會社ノ差異

第三節 株式會社

第一款 總則 自第百五十四條

第二款 會社ノ發起及ヒ設立 自第百五十七條

第三款 會社ノ社名及ヒ株主名簿 自第百七十四條

第四款 株式 自第百八十五條

第五款 取締役及ヒ監査役 自第百九十五條

第六款 株主總會 自第百九十八條

第七款 定款ノ變更 自第百一十五條

第八款 株金ノ拂込 自第百一十二條

第九款 會社ノ義務 自第百二十六條

二

二三二

二八二

二八六

二九八

三三五

三三八

三七三

四〇九

四二三

四四〇

四五〇

第十款 會社ノ檢查 自第百二十七條

第十一款 取締役及ヒ監査役ニ對スル訴訟 自第百二十九條

第十二款 會社ノ解散 自第百三十九條

第十三款 會社ノ清算 自第百四十五條

第四節 罰則 自第百六十四條

第五節 共算商業組合 自第百七十五條

○共算商業組合ノ商事會社ノ差異

○各種共算商業組合ノ差異

○第一 當座組合ト共分組合トノ差異

○第二 當座組合ト匿名組合トノ差異

○第三 共分組合ト匿名組合トノ差異

目錄

三

六二四

六二二

六二〇

六一〇

六一〇

五八〇

五六四

五三三

四九三

四八五

四六九



破産ニハ二箇ノ種類アリ第一ハ通常破産ニシテ第二ハ有罪破産ナリ  
而シテ有罪破産中亦二種ノ別アリ一テ過怠破産トナシ二テ詐偽破産ト  
ナス又別ニ支拂猶豫ナルモノアリ是亦本編ニ規定スル所ニシテ既ニ  
支拂ヲ停止スト雖モ債主ノ承諾ヲ得テ一時破産ノ處分ヲ猶豫ス可キ  
場合ニ係ルモノナリ

債破産處分ハ通常民事上ニ於ケル負債ノ處分即チ民事訴訟法ニ謂フ  
所ノ強制執行ノ處分ニ比スレハ其結果極メテ嚴酷ナルモノアリ是蓋  
商事ノ性質上ヨリ生スルモノニテ當然免ル、ヲ得サル所ナリ夫レ商  
事上ノ取引ハ成ル可ク廣大ナルヲ要ス然ルニ一箇人ノ資本ハ概シテ  
少額ナルヲ以テ自ラ此目的ヲ達スルニ便ナラス故ニ此目的ヲ達セン  
トセハ必スヤ他人ノ資本ヲ流用セサル可ラス而シテ他人ノ資本ヲ流  
用セントセハ專ラ相互ノ信用ヲ固クスルヨリ善キハナシ然ラハ則チ

信用ナルモノハ商事上最モ必要ニシテ且最モ有益ナルモノナレハ常  
ニ之ヲ維持スルノ方法ナキヲ得ス是特ニ破産法ヲ設クルノ止ム可カ  
ラサル所以ナリ

## 第一章 破産宣告

第九百七十八條 商ヲ爲スニ當リ支拂ヲ停止スル者ハ自己若クハ債權  
者ノ申立ニ因リ又ハ職權ニ依リ裁判所ノ決定ヲ以テ破産者トシテ宣  
告セララル但此決定ニ對シテハ即時抗告爲スコトヲ得  
前項ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得

〔義解〕 余ハ商法正義ニ於テ商ヲ爲ストハ第三條ニ記載スル如ク總テ  
ノ商取引其他本法ニ規定シタル事項ヲ行フヲ謂ヒ而シテ商取引トハ第  
四條及ヒ第五條ニ記載シタル行爲ナル旨ヲ辯セリ抑、此解釋タル商法  
全部施行ノ日ニ在テハ何人ト雖モ疑ハサル所ナル可シト雖モ今ヤ右  
數條ノ規定ハ現ニ施行セラレサルカ故ニ當然之ニ憑倚スルヲ得スシ

(第九百七十八條) 破産宣告

テ唯、應ニ世俗ノ慣例ニ從フヘキモノト解セサルヲ得ス然レモ此慣例  
 タル固ヨリ確固タル標準ナキヲ以テ之ヲ定ムルノ困難ハ本法實施ト  
 共ニ忽チ生スルヲ免レサル所ナル可シ  
 支拂ヲ停止ストハ支拂ヲ中止スルト同一義ニシテ必スシモ資産ノ缺  
 乏シタル爲メ到底支拂ヲ爲スコトヲ得サル場合ノミヲ謂フニ非ス故  
 ニ假令巨萬ノ富ヲ有スト雖モ若シ之ヲ利用スルコトヲ得サルカ爲メ  
 一時ノ支拂ニ差支ヲ生シタルトキモ亦是レ支拂ヲ停止シタルモノニ  
 シテ從テ本條ノ制裁ヲ受ケサルヲ得サルモノナリ例ヘハ一商人アリ  
 他ヨリ賣掛代金ノ催促ヲ受ケルニ當リ假令廣大ナル不動産ヲ有シ若  
 クハ他人ニ對スル數多ノ債權ヲ有スト雖モ一時之ヲ利用スルコトヲ  
 得スシテ現ニ其賣掛代金ノ請求ニ應スルコト能ハサルニ於テハ即チ  
 支拂ヲ停止シタルモノトスルカ如シ

又支拂停止トハ債務者カ債權者ヨリ現ニ催促ヲ受ケ而シテ之ヲ支拂  
 ハサル場合ニ限ルモノニ非ス事實上支拂停止ヲ證明スルニ足ル可キ  
 行爲例ヘハ債務者カ閉店シ或ハ潛匿シ或ハ竊ニ財産ヲ轉匿シタル等  
 ノコトアルトキハ未タ債務者ニ面接シテ催促セサル場合ト雖モ亦固  
 ヲリ之ヲ支拂停止ト看做ス可キモノナリ此他如何ナル場合ヲ以テ支  
 拂停止ノ事實アリトスルカハ特リ裁判所ノ判定ニ任セサルヲ得サル  
 モノトス但英法(英國破産法第一條)ノ如キハ破産ノ行爲ト看做ス可キ場合ヲ列  
 舉シ右ニ例示シタル場合ノ如キハ皆明ニ之ヲ其中ニ掲ケリ  
 夫レ英法及ヒ獨法ノ如キハ破産法ヲ以テ普通法トナシ之ヲ一般人民  
 ニ適用ス可キモノトナシ又佛法其他佛法主義ヲ模倣セル諸國ニ在テ  
 ハ之ヲ商法ノ一部トナシ單ニ商人ニノミ適用ス可キモノトナセリ然  
 レモ本法ニ於テハ「商ヲ爲スニ當リ支拂ヲ停止スル者」トアルヲ以テ英



獨ノ法律ト相異ナルノミナラス之ヲ佛法ニ比スルモ亦其趣ヲ同フセ  
 ス則チ一般人民ト雖モ若シ其負フ所ノ債務ニシテ苟モ商事上ヨリ生  
 シタルモノナルニ於テハ則チ本條ニ從テ破産ノ處分ヲ受ク可ク之  
 ニ反シ假令商人ト雖モ其負債カ民事上ヨリ生シタルモノナルニ於テ  
 ハ則チ民事訴訟法ニ從ヒ單ニ強制執行ノ處分ヲ受クルニ過キサルナ  
 リ然レモ商人カ強制執行ヲ受クル場合ニ在テハ商事上ノ負債ニ付テ  
 モ必然之ヲ支拂フコトヲ得サル可キヲ以テ則チ實際ニ於テハ支拂ヲ  
 停止シタル商人ハ到底破産處分ヲ免ル、コトヲ得サル可キナリ  
 本條ニ謂フ所ノ裁判所トハ債務者ノ住所ヲ管轄スル地方裁判所ヲ謂  
 フ則チ裁判所構成法第二十八條ニ地方裁判所ハ破産事件ニ付一般ノ  
 裁判權ヲ有ストアル是ナリ故ニ凡ソ破産事件ハ他ノ訴訟事件ノ如ク  
 金高ノ多寡ニ依リ管轄裁判所ヲ區別セス假令請求金額カ百圓以下ナ

ルトキト雖モ總テ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルモノナリ  
 裁判所カ破産宣告ヲ爲スニハ三個ノ原由ヨリ起ルコトハ亦是本條ノ  
 明示スル所ニシテ則チ第一ハ債務者自己ノ申立第二ハ債權者ノ申立  
 第三ハ裁判所ノ職權ナリトス而シテ第一ノ申立ハ次條ニ從ヒ支拂停  
 止ヲ爲シタルヨリ五日內ニ之ヲ爲サ、ルヲ得ス第二ノ申立ハ債權者  
 中ノ一名又ハ數名ヨリ之ヲ爲ステ得ヘク第三ハ裁判所カ檢事若クハ  
 其他ヨリ支拂停止ノ事實ヲ知リタル時ニ在ルナリ但第三ノ場合ハ例  
 ヘハ多數ノ債權者ハ遠方ニ在リ債務者ノ情況如何ヲ聞知スルヲ得サ  
 ル場合ニ在テ債務者カ少數債權者ト共謀シ多數債權者ニ損害ヲ加フ  
 可キ恐アルカ又ハ有罪破産ノ訴ヲ起ス可キ情況アルカノ如キ主トシ  
 テ公安ニ關スル情況アルトキニ限り實行セラルヘキモノナリ即チ裁  
 判所カ職權ヲ以テ破産ヲ宣告スルハ宜ク公安ニ關スル場合ニ限ルヘ

ク若シ夫レ債務者債權者ノ間ニ和解スヘキ傾向アル場合ニ於テ裁判所カ自ラ之ニ干渉シ以テ債務者一般ノ利益ヲ害スルカ如キハ最モ爲スヲ欲セサル所ナリ(「ボアステール」氏商法講義第九百號)破産ノ決定ヲ爲スニ付テハ通常債務者ヲ訊問ス可ク殊ニ債權者ノ申立ニ依ル場合ニ於テハ之ヲシテ支拂停止ノ事實ヲ證明セシム可キ者トス何トナシハ債務者カ其債權者ニ對シテ支拂ヲ爲サ、リシハ或ハ相當ノ理由アルニ因ルヤモ亦知ル可ラサレハナリ例ヘハ債權者カ支拂期日前ニ支拂ヲ求メ又ハ偽造手形ヲ以テ之カ支拂ヲ求ムルカ如キ場合ニ在テハ債權者タル者ノ之カ支拂ヲ爲サ、レハトテ決シテ破産宣告ヲ受ク可キ者ニ非サルカ如シ然レモ債務者ヲ呼出スニ付テハ其間多少ノ時日ヲ要スルカ故ニ之カ爲メ或ハ財産ヲ藏匿シ又ハ自ラ逃亡スルノ恐アリテ破産決定ヲ爲ス

ニ付キ急速ヲ要スル場合又ハ債務者ノ所在不分明ナルカ爲メ之ヲ出スコトヲ得サル場合ノ如キハ必スシモ口頭辯論ヲ爲スコトナクシテ直チニ破産決定ヲ宣告スルコトヲ得ヘキモノトス是本條第二項ノ規定スル所ナリ即時抗告トハ上訴ノ一方法ニシテ一階上級ナル裁判所ニ向テ覆審ヲ求ムルヲ謂フ而シテ此手續ニ付テハ商法施行條例第二十四條ニ於テ其一斑ヲ定メ同第二十五條ニ於テ其他ノ手續ハ民事訴訟法第三編第三章(抗告)ノ規定ニ準ス可キ旨ヲ示セリ故ニ本條ノ場合ニ在テ口頭辯論ヲ爲シタルキハ決定ノ言渡ヲ受ケタル日ノ翌日又口頭辯論ヲ爲サ、リシキハ決定書ノ送達アリタル日ノ翌日ヨリ七日内ニ該決定ヲ受ケタル者ヨリ抗告狀ヲ原裁判所ニ差出シ原裁判所ニ於テ其抗告ヲ理由アリトスルキハ自ラ其不服ノ點ヲ更正シ否ヲサルキハ該抗告狀ニ

意見書ヲ添へ之ヲ所轄控訴院ニ廻送シ以テ同院ノ覆審ヲ待ツ可キモノトス但此抗告アリタルト雖モ原裁判所ハ其決定ヲシテ假ニ執行セシムルコトヲ得ルハ第九百八十一條ノ明許スル所ナリ  
終ニ臨ミ尙ホ一言スヘキモノアリ本條ニ於テハ支拂ヲ停止スル者トアレモ未タ全ク停止セザル場合ニ於テモ尙ホ債權者ヨリ破産ノ宣告ヲ求ムルコトヲ得ヘキ場合アリ是則チ第六百九十五條ニ於テ規定スル所ニシテ同條ニ於テハ保險會社カ將來ノ義務ヲ履行スルコト能ハスト豫知ス可キ取引ノ實況ニ至リタルトキハ其會社カ未タ支拂ヲ停止セスト雖モ被保險者ハ破産宣告ヲ求ムル申立ヲ爲スコトヲ得トアリ抑此ノ如キ例外アル所以ノモノハ保險契約ノ性質タル蓋大ニ他ノ契約ニ異ナルモノアルニ因ルナリ

(論說)本條第二項ノ規定タルヤ既ニ例示セシ如ク事實上口頭辯論ヲ爲

サシムルヲ得サルカ又ハ之ヲ爲サシムル爲メ却テ弊害ヲ生ス可キ恐アルカノ如キ何レモ已ムヲ得サル場合ニ於テ之ヲ適用ス可キモノト解セサルヲ得ス何ントナレハ當事者ノ辯論ヲ聽クコトナクシテ直ニ裁判ヲ與フルハ事ノ變例ニ屬スルモノナルヲ以テナリ民事訴訟法中亦本條第二項ト同一ナル規定アリ即チ單ニ口頭辯論ヲ經スシテ云々スルヲ得トアルノミニシテ特ニ口頭辯論ヲ要セサル場合ヲ舉示セサルカ爲メ實際上或ハ之カ適用ヲ誤リ往々良民ヲ陷害スルノ虞ナシトセス例ヘハ民事訴訟法第四百七十一條ニ假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得トアリ而シテ其適用ノ結果ニ至テハ吾人ノ大ニ聞クヲ欲セサル所アルノ類ナリ論者或ハ其責ヲ訴訟法ニ歸スル者アリ若シ夫レ訴訟法ニシテ其責ヲ負ハサル可ラサル歟本條第二項亦是ト同一ノ責ヲ負ハサル可ラサルニ至ラン嗚呼法律

ハ罪ナシ世ノ職ニ執法ニ在ル者宜ク眼ヲ法律ノ精神ニ注キ既ニ民事訴訟法ノ被フリタル汚名ヲ以テ更ニ之ヲ本法ニ及ホサ、ルヲ期セヨ近頃感スル所アリ依テ爰ニ一言ヲ付ス

第九百七十九條 支拂停止ハ其停止ヲ爲シタル本人ヨリ又會社ニ在テハ業務擔當ノ任アル社員又ハ取締役又ハ清算人ヨリ支拂停止ノ日ヲ算入シテ五日内ニ其營業所又ハ住所ノ裁判所ニ書面ヲ以テ又ハ口述ヲ調査ニ筆記セシメテ之ヲ届出ツ可シ此届出ニハ支拂停止ノ事由ヲ明示シ及ヒ貸借對照表並ニ商業帳簿ヲ添フルコトヲ要ス

貸借對照表ニハ左ノ諸件ヲ包含ス

- 第一 總テノ動産、不動産其他債權ノ列舉及ヒ價格
- 第二 總テノ債務
- 第三 利益及ヒ損失ノ概要
- 第四 毎月ノ一身上ノ費用及ヒ家事費用ノ支出額

〔義解〕 本條ハ支拂ヲ停止シタル者ノ爲ス可キ義務ヲ規定シタルモノニシテ第一ハ支拂停止ノ届出ヲ爲ス可キ者ノ誰タルヤヲ定メ第二ハ其届出ヲ受クヘキ裁判所第三ハ其届出ヲ爲ス可キ期日第四ハ其届出

ヲ爲ス可キ方法ヲ定メタルモノナリ

第一 支拂停止ノ届出ヲ爲ス可キ義務者 普通人ニ在テハ其支拂停止ヲ爲シタル本人カ自ラ届出ヲ爲サ、ル可ラス何トナレハ本條ニハ停止ヲ爲シタル者ヨリト謂ハスシテ停止ヲ爲シタル本人ヨリトアレハナリ抑、此ノ如ク本人ヨリ届出ヲ爲サシムルコトヲ必要トスル所以ノモノハ此届出ニ依リ直チニ財産管理ノ權利ヲ失フニ至ル可キ重大ノ事項ナルヲ以テナリ但病氣其他已ムコトヲ得サル場合ニ在テハ委任狀ヲ有スル代人ヲシテ其理由ヲ證明セシメ以テ其届出ヲ爲サシムルコトヲ得ルハ蓋論ヲ俟タサル可シ

又會社ニ在テハ各會社ノ種類ニ依リテ其届出ヲ爲ス可キ義務者ヲ異ニスルモノトス則チ合名會社ニ在テハ總社員ヲ稱シテ業務擔當ノ任アル社員ト云ヒ合資會社ニ在テハ社員六人以下ナルト

キハ業務擔當社員ヲ定ム可ク七人以上ナルトキハ一人又ハ數人ノ取締役ヲ置ク可シトアリ(第四百條)而シテ株式會社ニ在テハ常ニ三人ヨリ少カラサル取締役ヲ置ク可キ(第五百八條)者ナルヲ以テ合名會社及ヒ六人以下ノ合資會社ノ場合ニ在テハ届出ヲ爲ス可キ義務アル者ハ所謂業務擔當ノ任アル社員ニシテ而シテ七人以上ノ社員アル合資會社及ヒ總テノ株式會社ノ場合ニ在テハ届出ヲ爲ス可キ義務アル者ハ則チ取締役ナリトス而シテ此義務者ノ數名ハ皆自ラ之カ届出ニ爲サ、ルヲ得サルモノナリ

又第二百五十三條ニ會社ノ清算中ニ現在ノ會社財産ヲ以テ會社ノ總債權者ニ完済シ能ハサルコト分明ナルニ至リタルトキハ清算人ヨリ破産手續ノ開始ヲ爲シ云々トアリ本條ノ所謂清算人トハ則チ此ノ如キ場合ニ於ケル清算人ヲ謂フナリ

本條及ヒ其以下ニ謂フ所ノ會社トハ實ニ商事會社ニノミ止マラス當然民事會社ヲモ包含スルモノト解セサルヲ得ス何トナレハ舊法ニハ商事會社トアリタルヲ新法ニ於テ「商事」ノ二字ヲ削除シ單ニ會社ト稱スルニ至リタルハナリ而シテ其改定ノ理由ヲ按スルニ抑、民事會社ナル者ハ常ニ商業ヲ營ムコトナキハ勿論ナリト雖モ時ニ或ハ商ヲ爲スコトナキヲ保セス而シテ商ヲ爲シタルヨリ生シタル債務ニ付テハ破産者トシテ宣告セラル、テ免レサルハ恰モ非商人ニシテ商ヲ爲シタル場合ニ異ナルコトナシト云フニ在ルナリ但其改定ノ當否ニ付テハ他日更ニ之ヲ論述スル所アル可シ

第二 届出ヲ受ク可キ裁判所 本條ニ依レハ營業所又ハ住所ノ裁判所トアリテ營業所ノ裁判所ニ於テスルモ住所ノ裁判所ニ於テスルモ届出人ノ自由ナルカ如シト雖モ若シ特別ニ營業所ヲ有ス

ル場合ニ在テハ則チ營業所ノ裁判所ヲササルヲ得サルモノトス  
 何トナレハ商事上ノ取引先ハ何レモ營業所ト密着ノ關係ヲ有ス  
 ルヲ以テ例ヘハ廣告其他ノ點ニ付テモ各關係人ハ常ニ其營業所  
 ノ所在地ニ注目ス可キモノナレハナリ又右ノ理由ヨリシテ更ニ  
 一箇ノ問題ヲ決スルコトヲ得ヘシ則チ別段營業所ヲ有セサル商  
 人カ支拂停止ノ後直チニ住所ヲ轉シタルトキハ其管轄裁判所ハ  
 舊住所ニ依ル可キヤ又ハ新住所ニ依ル可キヤノ點是ナリ此場合  
 ニ於テハ所謂各關係人ノ注目スル地タル舊住所ノ裁判所ヲ以テ  
 其管轄トス可キモノナリ

第三 届出ヲ爲ス可キ期日 此期日ニ付キ注意ス可キハ「停止シタ  
 ル日ヲ算入シテ」ノ一句是ナリ夫レ商事契約ノ總則ニ於テ「日ヲ以  
 テ定メタル期間ノ計算ニ付テハ結約ノ日ハ之ヲ算入セス」(第三百  
 九條)

トアリテ凡ソ普通ニ期日ヲ起算スルニ付テハ總テ右ノ規定ニ從  
 フ可キモノナルカ故ニ本條ニ於テ特ニ此ノ如キ明文ヲ設ク以テ  
 普通ノ場合ニ異ナル旨ヲ示セリ

第四 届出ヲ爲ス可キ方法 支拂停止ノ届出ヲ爲スニ付テハ普通  
 ノ訴訟ニ於ケルカ如キ別段方式ニ從フタル訴狀ヲ作り又ハ印紙  
 ヲ貼用スルコトヲ要セス唯其支拂停止ノ事由ヲ明記シタル書面  
 ヲ以テスルカ又ハ其事由ヲ口述シ裁判所ノ書記ヲシテ之ヲ筆記  
 セシムルカノ一ニ從フヲ以テ足レリトスルナリ但何レノ場合ニ  
 於テモ貸借對照表并ニ商業帳簿ハ之ヲ差出サ、ルヲ得サルモノ  
 トス

支拂停止ノ事由トハ例ヘハ自己ニ對スル負債者カ破産シタルカ  
 爲メ其負債ヲ取立ツルコトヲ得ス又ハ自ラ火災ニ罹リタルカ爲

メ全財産ヲ燒失セリ又ハ定期米取引上ヨリ非常ノ損失ヲ受ケタ  
リト謂フノ類ナリ

商業帳簿トハ第三十一條ニ於テ規定スル所ノ帳簿ヲ謂フ故ニ非  
商人カ支拂ヲ停止シタル場合ニ在テハ該帳簿ヲ差出ス義務ナキ  
ハ勿論第三十一條等ノ規定ニシテ特リ會社ニノミ適用セラル可  
キ今日ニ在テハ一般商人ト雖モ必スシモ該規定ニ從フタル帳簿  
ヲ差出スノ義務アルナキナリ又貸借對照表トハ則チ自己ノ貸方  
借方ノ對照表ニシテ本條第一號乃至第四號ニ列記シタル事項ヲ  
掲載シタルモノヲ謂フナリ

貸借對照表ヲ差出サシムルノ必要ハ第一破産ノ原由ヲ檢出スル  
ニ便利ナルコト之ヲ詳言セハ破産ハ破産者カ受ケタル不幸ノ結  
果ナルヤ否ヤ又ハ有罪破産ノ性質ヲ包含スル所ノ過失若クハ詐

欺ノ點ナキヤ否ヤヲ識別スルノ用アリ例ヘハ一身上ノ費用若ク  
ハ家事費用ノ額カ其分限ニ過クルトキハ則チ過怠破産ノ所爲ア  
ルコトヲ發見スルヲ得ルカ如シ(第五十一條第一號)第二ハ債權者ノ何人  
タルカヲ知ラシメ且其招集ヲ容易ナラシムルコト第三ハ債權ノ  
調査ヲ容易ナラシメ及ヒ破産財團ノ管理ニ付テ管財人ニ注意ヲ  
與フルコト足ルコト是ナリ

利益及ヒ損失ノ概要ヲ記スルニ當リ何年間若クハ何年度ノ部分  
ニ涉ル可キカハ本條ニ於テ之ヲ明示セスト雖モ佛國及ヒ白國ノ  
例ニ依レハ少クモ之ヲ既往十年間ニ及ホス可キモノトセリ是レ  
商人ハ十年間商業帳簿ヲ貯存スルノ義務アルニ因ルナリ(第三十  
四條)然レモ或ル論者ハ之ヲ開業以來ノ損益ニ遡及セサルヲ得サルモ  
ノトナシ其理由ハ正整ナル商人ハ假令十年ヲ過クルト雖モ敢テ

(第九百八十條) 破産宣告

二〇

商業帳簿ヲ毀壞ス可キモノニ非ストスルニ在リ白國ノ學士シヌ  
アール氏之ヲ駁シテ曰ク狀況ノ許ス限ハ十年以上ニ遡及スルヲ  
得ヘシト雖モ必スシモ之ヲ破産者ノ義務トスルヲ得スト是蓋其  
當ヲ得タルモノト謂フ可シ

本條ノ規定ニ從ヒ届出ヲ爲サ、ル債務者カ被フル可キ制裁ハ第千五  
十一條第五號ニ於テ之ヲ規定ス則チ此場合ニ於テハ債務者ハ管ニ過  
怠破産ノ刑ニ處セラル、ノミナラス尙ホ第千三十八條ノ規定ニ從ヒ  
協諧契約ヲ提供スルヲ得サルモノナリ

第九百八十條 破産決定書ニハ左ノ諸件ヲ包含ス

- 第一 支拂停止ノ日時但此日時ハ後日裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得
- 第二 破産主任官及ヒ一人又ハ二人以上ノ破産管財人ノ選定
- 第三 破産財團ノ保全ニ必要ナル處分ニ付テノ命令

第四 破産者ノ債務者又ハ財團ニ屬スル物ノ占有者ニ對スル拂渡差押ノ命令

第五 破産者ノ總債權者ニ對シ其請求權ヲ短クトモ三個月長クトモ六個月ノ期間ニ破産主任官ニ届出ツ可キ旨ノ催告

第六 調査會ノ期日及ヒ債權者集會ノ期日ノ指定

第七 破産宣告ノ日時

破産決定書ハ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

〔字解〕 破産財團トハ正確ニ之ヲ論スルトキハ破産者ノ貸方借方即チ破産者ノ債權ト債務トノ合同シタルモノ、名稱ナリ然レド之ヲ破産者ノ財産ニシテ各債權者ニ分配ス可キモノナリト解釋スルモ實際上敢テ差支アルコトナキナリ

〔義解〕 第九百七十八條ニ於テハ破産ハ裁判所ノ決定ヲ以テ宣告ス可キ旨ヲ掲ケリ故ニ本條ニ於テハ先ツ其決定書ニ掲ク可キ事項ヲ列舉シ次ニ其決定書ヲ檢事ニ送致スヘキ旨ヲ定メタルモノナリ

(第九百八十條) 破産宣告

二一



支拂停止ノ日時ヲ定ムルノ要ハ破産者カ其日時後又ハ其日時前三十日ノ間ニ在リテ爲シタル或ル行爲ハ法律上ノ推測ニ依リ當然無効トナリ又ハ異議ヲ述フルコトヲ得可キ場合アルニ因ルナリ(第九百九十九條)而シテ舊法ニ於テハ支拂停止ノ時期トアリテ唯其日ノミニ止リ必シモ時刻ヲ掲クルヲ要セザリシト雖モ今ヤ之ヲ修正シテ日時トナシタルカ故ニ時刻ノ事タル亦以テ一箇ノ要件トナルニ至レリ

支拂停止ノ日時ヲ定ムルハ極テ困難ナルモノニシテ佛國其他ノ法律ニ於テハ此日時ハ破産決定ノ日ニ於テ假ニ之ヲ定メ置キ後ニ至リ更ニ之ヲ改正スルコトヲ得ルノ便ヲ與ヘリ而シテ本條ニ於テハ其舊法ニ依レハ支拂停止ノ時期ハ必スヤ破産宣告ト同時ニ之ヲ定ム可キ規定ナリシモ今ヤ之ヲ改正シ後ニ至リテ定ムルヲ得ヘキモノトナシ以テ之カ困難ヲ救正セリ然レモ既ニ定メタル日時ハ如何ナル場合ニ於

テモ直チニ之ヲ確定ノモノトスルヲ以テ當事者ヨリ抗告ヲ爲スニ非サレハ裁判所自ラ之ヲ更正スルヲ得サル可キナリ借何故ニ支拂停止ノ日時ヲ定ムルノ困難ナルカト問ハ、先ツ左ノ一例ヲ以テ之ニ答フルヲ得ヘシ例ハ債務者一時ノ詐術ヲ以テ數回支拂ノ延期ヲ請ヒ受ケ久シク商業ヲ維持シタル後遂ニ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキ又ハ死者ニ對シテ破産ヲ宣告シタルトキハ何レノ日ヲ以テ支拂停止ノ日時ト看做ス可キカノ類ノ如シ若シ夫レ右ノ場合ニ於テ破産宣告ノ日ヲ以テ支拂停止ノ日ト定ムルトキハ第一ノ場合ニ在テハ奸人ヲシテ益、奸ヲ逞マシクセシムルノ媒介タルニ至ル可ク第二ノ場合ニ在テハ本人ノ死亡シタル日ヨリ破産宣告ノ日ニ至ルマテ若干日間猶ホ支拂ヲ繼續シタルカ如キ事實相違ノ結果ヲ生ス可キナリ故ニ佛國大審院ノ判決例及ヒ學說ニ於テハ第一ノ場合ニ在テハ支拂停止ノ日ヲ最初延

期ヲ申込ミタル日ニ遡ラシメ而シテ第二ノ場合ニ在テハ之ヲ當人死  
亡ノ日トナセリ

前ニ説明セシ如ク破産事件ハ地方裁判所ニ於テ取扱フ可キモノニシ  
テ而シテ地方裁判所ハ三人ノ判事ヲ以テ之ヲ組織スルモノナリ然ル  
ニ其取扱中事毎ニ三人ノ合議ヲ要セサルハ勿論ナルヲ以テ一名ノ判  
事ヲシテ破産主任官トナシ以テ第九百八十三條及ヒ其他ニ記載シタ  
ル事務ヲ行ハシム故ニ裁判所ハ破産決定ト共ニ破産主任官及ヒ破産  
管財人ヲ選定シ之ヲ決定書中ニ記載ス可キモノトス但破産管財人ト  
ハ破産者ノ財産ヲ管理シ及ヒ其他ノ處分ヲ行フモノニシテ其詳細ナ  
ル手續ハ第千八條以下ニ於テ之ヲ規定ス  
破産財團ノ保全ニ必要ナル處分トハ第千二條ノ如キ破産者ノ動産ニ  
封印ヲ爲スノ類ヲ謂フナリ

破産債權者ニ對スル催告トハ身代限規則ニ於テ定メタル負債者ニ對  
シテ金穀其他ノ取引アル者ハ六十日<sup>〇</sup>内ニ訴出ツ可シト云ヘル揭示ニ  
異ナルコトナシ然レトモ本條ニ於テハ其期限ヲ延長シ短クモ三個月<sup>〇</sup>  
トナシ即チ九十日ヲ下タルコトヲ得サルモノトセシコト及ヒ訴出ツ  
可シト謂ハスシテ届出ツ可シトアルヲ以テ別ニ訴狀ヲ作ルコトヲ要  
セス書面又ハ口頭ヲ以テ單ニ債權ノ届出ヲ爲スヲ以テ足レリトスル  
コトノ點ニ付キ彼此少ク同シカラサルモノアルニ過キス但届出ヲ爲  
ス場合ト雖モ商事非訟事件印紙法ニ從ヒ一通毎ニ二十錢ノ印紙ヲ貼  
用セサルヲ得サルモノトス  
調査會トハ各債權ノ真偽ヲ調査スル爲メ債權届出ノ期間後十日乃至  
十五日間ニ於テ開ク可キ會議ヲ謂ヒ<sup>(第一千二</sup>債權者集會トハ調査會ヨ  
リ四週間以後ニ開ク可キ會議ヲ謂フナリ

(第九百八十一條) 破産宣告

二六

破産宣告ノ日時ハ必スヤ之ヲ世人ニ知ラシメサルヲ得ス何トナレハ破産宣告ノ日ヨリ以後ハ破産者ノ爲シタル支拂其他總テノ權利行爲ハ當然無効トス(第九百八十五條第二項)ト云フカ如ク此日時ハ取引上至大ナル關係ヲ有ス可キモノナルヲ以テナリ抑本條第七號ハ本法修正ノ際特ニ之ヲ加ヘタルモノニシテ其之ヲ加ヘタル理由ハ蓋右ニ謂フ所ニ外ナラサルナリ

決定書ヲ檢事ニ交付ス可キ規定ヲ設ケタル所以ノモノハ檢事ハ第九百八十四條ニ記載シタル職務ヲ行ハサルヲ得サルノミナラス抑破産ニ付テハ頗ル公益ニ關スルモノアルヲ以テ常ニ檢事ノ注意ヲ喚起セサルヲ得サルニ因ルナリ但此檢事トハ破産ヲ取扱フ裁判所ノ檢事ヲ指スモノトス

第九百八十一條 破産宣告ハ即時ニ裁判所ノ揭示場並ニ破産者ノ營業

場ニ貼附シ及ヒ其地ノ新聞紙ニ載セテ之ヲ公告スルコトヲ要ス其宣告ハ假執行ヲ爲スコトヲ得

〔義解〕 本條ハ破産宣告後ノ處置ニ付キ二箇ノ事項ヲ規定シタルモノナリ則チ第一ハ破産ノ決定ヲ爲シタルトキハ即時ニ其公告ヲ爲スコト第二ハ此決定ニ對シテ抗告アリタルニ拘ハラズ假ニ其執行ヲ爲スヲ得ルコト是ナリ

破産宣告ノ公告ヲ爲スコト及ヒ之レヲ爲スノ急速ナルコトヲ必要トスル所以ハ其決定書ニ記載シタル事項ヲ債權者ニ告知スルノ外尙ホ將來世人ヲシテ破産者ト取引ヲ爲サシメサランコトヲ注意スルニ在リ何トナレハ破産宣告ノ日ヨリ以後ハ破産者ノ爲シタル支拂其他總テノ權利行爲及ヒ破産者ニ爲シタル支拂ハ假令相手方カ其事情ヲ知ラサリシトキト雖モ當然無効ニ屬ス可キモノナルヲ以テナリ(第九百八十五條)

(第九百八十一條) 破産宣告

二七

破産ノ宣告ハ右ノ如ク即時ニ之ヲ公告スルノ必要アルニ拘ハラズ若シ其公告ヲ爲スコトヲ忘レ又ハ之ヲ遅延シタルトキト雖モ其怠慢ニ因リ毫モ宣告ノ効力ニ影響ヲ及ホスコトナシ何トナレハ是等ノ原由ニ因リテ該宣告ヲ無効トス可キ規定ノ設クナキヲ以テナリ故ニ此公告ヲ怠リタルヨリ生シタル損害ニ付テハ當局者ニ於テ自ラ其責ニ任セサルヲ得ス而シテ此當局者トハ蓋裁判所ノ書記タラサルヲ得サル可キナリ

破産者カ數個所ニ營業場ヲ有スルトキハ之カ公告ヲ爲ス可キ場所ハ其中ノ一個所ニテ十分ナルヤ又ハ各所ニ於テセサルヲ得サル可キヤニ付テハ本條ニ於テ之ヲ明示セスト雖モ余ノ見ル所ニ依レハ蓋之ヲ各所ニ於テス可キモノトス現ニ佛法(佛商法第四百二條)ニ於テハ之ヲ各營業

場ニ於テス可シトノ明文ヲ掲ケ且ロイスレル氏ノ草案ニ於テモ此營業場ナル語ヲ複數ニ爲シタルカ如キハ亦以テ數箇ノ營業場ニ於テス可キ旨趣タルヲ推知スルニ足ル可シ

其地ノ新聞紙トハ營業場所在地ノ新聞紙ヲ謂フ故ニ右ノ如キ數箇ノ營業場ヲ有シ而シテ各其地ヲ異ニスル場合ニ在テハ數個ノ新聞紙ニ於テ公告ヲ爲サ、ルヲ得サル可シ但何レノ場合ニ於テモ其公告ノ度數ハ一新聞ニ付キ通例一回ヲ以テ十分ナリトス  
 扱右ノ公告ヲ爲スニ付テハ破産決定書ノ全文ヲ以テス可キヤ又ハ其扱書ヲ以テス可キヤノ問題アリ佛國其他ノ商法ニ於テハ現ニ扱書ヲ以テス可シトノ明文ヲ掲ケリ而シテ本條ニ於テモ決定書ハ之ヲ公告ス可シトアルカ故ニ必スシモ決定書ノ全文ヲ以テスルヲ要セサルヲ知ル可シ且ロイスレル氏ノ註解

ニ於テモ此公告ハ之ヲ拔書ニ止ムルヲ得ヘシト明言セリ  
破産宣告ニ對シ抗告アリタルニ拘ハラヌ假執行ヲ爲スコトヲ得ル所  
以ノモノハ若シ其上訴ノ終局ニ至ル迄執行ヲ猶豫スルニ於テハ或ハ  
財産ヲ藏匿シ又ハ虚偽ノ負債ヲ作爲スルカ如キ爲メニ債權者ノ利益  
ヲ害スルノ恐アルニ因ルナリ故ニ原裁判所ハ其見込ニ依リ直チニ假  
執行ヲ命スルコトヲ得ヘシト雖モ若シ抗告裁判所ニ於テ該執行ヲ命  
スルヲ不可トスルモ未タ抗告ニ付テノ取調ヲ爲サ、ル以前ト雖モ  
同裁判所ノ命令ニ依リ該執行ノ中止セラル、ニ至ルコトアル可シ(民  
六訴訟法第四百  
六條第三項)

第九百八十二條 破産者ノ財産ヲ以テ破産手續ノ費用ヲ償フニ足ラサ  
ルトキハ前條ノ手續ヲ除ク外其後ノ手續ヲ停止ス其手續ノ停止ハ之  
ヲ公告スルコトヲ要ス  
然レトモ破産手續ノ費用ヲ償フニ足ル破産者ノ財産アルコトヲ證明

スルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ即時其手續ヲ再施ス

破産手續ノ停止ハ其繼續スル間ハ第一千九條ニ掲ケタル効力ヲ有ス

〔義解〕 破産處分ヲ行フニ付テハ爲メニ費用ヲ要スルコト少カラス例  
ヘハ公告ノ費用破産財團保全ノ費用及ヒ破産管財人ノ勤勞ニ對スル  
報酬ノ如キ何レモ破産者ノ財産ヨリ之ヲ支出セサルヲ得ス故ニ些少  
ナル財産ニテハ到底破産手續ノ費用ヲ支辨スルヲ得サル可ク現ニ白  
國ニ於ケル實例ニ依レハ千八百八十二年以前ニ於テ其首府アルツセ  
ル府商事裁判所カ宣告シタル破産事件ノ内其三分一ハ破産手續ノ費  
用ヲ支辨スルヲ得サルノ割合ナリキ然レトモ費用ヲ支辨スルコトヲ  
得サルカ爲メ破産手續ヲ行ハサルニ於テハ此ノ如キ多數ノ破産者ヲ  
シテ輒スク破産ノ制裁ヲ受クルコトヲ免レシメ却テ不信實ナル負債  
者ヲ優遇スルノ結果ヲ生スルニ至ル可シ是則チ本條第一項ノ規定ア

ル所以ニシテ假令費用ヲ支辨ス可キ財産ナキ場合ト雖モ前條ノ規定即チ破産宣告ノ公告ヲ爲ス迄ノ手續ハ必ス之ヲ履行ス可キモノトナシ唯其以後ノ手續例ハハ調査會及ヒ債權者集會ヲ開クカ如キハ總テ之ヲ停止ス可キモノトスルナリ

破産手續ノ停止ハ亦必ス之ヲ公告セサル可ラス何トナシハ此停止ニ依リテ本條末項ノ結果ヲ生スルノミナラス破産宣告ノ公告ニ依リテ債權者ハ請求權ノ届出ヲ催告セラレ及ヒ調査會并ニ債權者集會ノ期日ヲ告知セラレタルモノナレハ若シ此停止ヲ公告セサルトキハ債權者ハ空ク此等ノ手續ヲ履行スルニ至ル可キヲ以テナリ

本條第二項ノ申立ニ因リトハ破産者又ハ其關係人ヨリ申立タル場合ヲ謂フ而シテ破産手續ノ再施ヲ命シタルトキハ亦直チニ其旨ヲ公告シ且既ニ進行シタル以後ノ手續ノミヲ續行ス可キモノニシテ其以前

ニ爲シタル手續ハ更ニ之ヲ再施スルヲ要セサルモノトス

本條末項ハ破産手續ヲ停止シタルトキハ其停止ノ繼續スル間即チ其停止中ハ第千四十九條ニ掲ケタル効力ヲ有スト云フニ在リ夫レ破産手續施行中ニ在テハ各債權者ハ破産財團ニ對シ共同ノ請求ヲ爲ス可キモノナレハ唯其債權額ノ割合ニ應シテ配當ヲ受クルニ過キス然レトモ本項ニ於テハ第千四十九條ニ掲ケタル効力ヲ有ストアリ而シテ同條ニ破産手續終結後ニ至テハ各債權者ハ獨立シテ別々ニ請求ヲ爲スコトヲ得ヘキ旨ヲ定ムルカ故ニ破産手續停止ノ場合ニ在テハ猶ホ破産手續終結後ノコトク各債權者ハ獨立シテ直チニ債務者ニ係ルコトヲ得ヘキモノトス

佛國及ヒ白國ニ在テハ其學說及ヒ判決例ニ於テ破産手續停止中一債權者カ其債務ノ辨濟ヲ受ケタル後更ニ破産手續ヲ再施スルニ至リタ

ルトキハ其辨濟ヲ受ケタル債務ハ盡ク之ヲ財團ニ還付シ他ノ債權者ト共ニ之ヲ平分セサル可ラストスルモノアリ然レトモ此說ヲ反駁スル者亦取テ少シトセス其言ニ曰ク債權者ニ與フルニ各自訴訟ヲ爲スノ權利ヲ以テシタルニ拘ハラス其後新ナル裁判ヲ以テ破産手續ノ再施ヲ命シタルハトテ之カ爲メ既ニ受取タル金額ヲ返還セシメントスルハ極メテ不當ノ處分ニシテ恰モ豫メ網ヲ張り債權者ヲシテ之ニ罹ラシムルニ異ナルコトナシト是蓋該問題ヲ決スルニ付キ最モ適切ナル至言ト謂ツヘシ

第九百八十三條

破産主任官ハ總テノ破産手續ヲ指揮シ及ヒ監督スルコトヲ要ス其命令ハ假執行ヲ爲スコトヲ得然レトモ此命令ニ對シテハ破産裁判所ニ即時抗告ヲ爲スコト得

〔義解〕 本條ハ破産主任官ノ行フ可キ職務ノ大綱ヲ指定シタルモノナリ而シテ其細目ニ至テハ以下數條ニ於テ別ニ之ヲ規定ス例ヘハ第千

七條第千十一條第千十三條及ヒ第千十六條ノ如キハ破産手續ノ指揮ニ屬シ第千五條第千二十條ノ如キハ其監督ニ屬ス此他第千十八條第千二十一條第千二十二條第千二十五條第千三十二條第千三十七條第千四十七條ノ如キモ亦是レ破産主任官ノ職務ニ係ルモノナリ  
或人曰ク破産主任官トハ公益ノ爲メ及ヒ出席セサル債權者又ハ債權者會議ニ於ケル少數論者ノ利益ノ爲メ破産事務及ヒ破産管財人ノ處置ヲ監査シ并ニ破産管財人ニ委ヌルニハ重キニ過クルト雖モ裁判所ニ於テ行フ程ノ價直ナキ諸般ノ事務ヲ決行シ及ヒ破産手續中ニ發生スル細小ナル事件ヲ速決スル爲メ特別ニ委任セラレタル裁判官ヲ謂フト此言以テ破産主任官ノ何者タルヤヲ表示スルニ足ルモノト謂フ可シ

破産裁判所トハ破産事件ヲ取扱フ所ノ地方裁判所即チ破産主任官ノ

屬スル裁判所ヲ謂フ而シテ普通ノ抗告ニ在テハ直近上級ノ裁判所ニ於テ之ヲ管轄ス可キモノナリ(民事訴訟法第(四百五十六條)故ニ本條ハ全ク之カ例外ニ屬スルヲ知ル可シ

第九百八十四條 檢事ハ職權ヲ以テ破産者ノ罰セラル可キ行爲ノ有無ヲ捜査シ且此カ爲メ取引帳簿其他ノ書類ノ展閱ヲ求ムルコトヲ得

[義解] 夫レ破産ノ場合ニ在テハ檢事ニ於テ破産者ニ犯罪ノ行爲ヲキヤ否ヲ吟味スルハ公益上極メテ必要ナルノミナラス若シ檢事ニシテ豫メ破産ノ性質ヲ熟知スルニ於テハ他日犯罪ノ發覺シタル場合ニ至リ直チニ公訴ヲ提起スルコトヲ得ルノ便アリ是レ則チ本條ノ規定アル所以ナリ  
罰セラル可キ所爲トハ主トシテ第千五十條及ヒ第千五十一條ニ記載スル所ノモノヲ謂フ

取引帳簿トハ單ニ商業帳簿ニ止マラス非商人ニ屬スル一般ノ帳簿ヲモ合蓄スルモノニシテ苟モ破産事件ニ屬スル一切ノ書類ハ檢事ニ於テ盡ク之カ展閱ヲ求ムルヲ得ヘキモノナレハ破産裁判所ニ於テハ必ス之カ請求ニ應セサルヲ得サルナリ

### 第二章 破産ノ効力

第九百八十五條 破産宣告ニ依リ破産者ハ破産手續ノ繼續中自己ノ財産ヲ占有シ管理シ及ヒ處分スル權利ヲ失フ  
破産宣告ノ日ヨリ以後ハ破産者ノ爲シタル支拂其他總テノ權利行爲及ヒ破産者ニ爲シタル支拂ハ當然無効トス  
破産者ノ動産不動産ニ關スル訴及ヒ執行ハ特リ管財人ヨリ又ハ管財人ニ對シテ之ヲ起シ又ハ繼續スルコトヲ得

[義解] 本條以下數條ハ破産宣告ニ因リテ生ス可キ効力ヲ規定シタルモノナリ夫レ人ハ自己ノ財産ヲ任意ニ處分スルコトヲ得ル固ヨリ當(第九百八十五條) 破産ノ効力



然ナリト雖モ一旦破産ノ宣告ヲ受クルニ於テハ其停止若クハ終結ニ至ル迄即チ破産手續ノ繼續中ハ其財産ノ所有者タルニ拘ハラズ自ラ之ヲ占有シ又ハ之ヲ管理シ又ハ之ヲ處分スル權利ヲ失ヒ而シテ此權利ハ當然破産管財人ニ於テ之ヲ行フ可キモノトス是則チ本條第一項ノ規定スル所ナリ但此財産トハ破産宣告ノ當時ニ於テ所有シタルモノニ止マラス後ニ至リ取得スル財産ヲモ包含スルナリ例ヘハ後日他人ノ財産ヲ相續シタル等ノ場合ニ在テモ亦自ラ其財産ヲ處分スルコトヲ得サルカ如シ

本條第二項ハ破産者カ破産宣告後ニ於テ爲シタル財産上ノ取引ハ總テ無効ナリト云フニ在リテ例ヘハ破産者カ一債權者ニ對シテ債務ノ支拂ヲ爲シタルトキハ其支拂ヲ以テ無効トナシ破産管財人ノ請求ニ依リ之ヲ返還セサルヲ得ス又破産者ニ對スル債務者カ其債務ヲ直接

ニ破産者ニ支拂ヒタルトキハ亦其支拂ヲ無効ナリトシ該債務者ハ破産管財人ニ對シテ更ニ二重ノ支拂ヲ爲サ、ルヲ得サルカ如シ其他總テノ權利行爲トハ賣買貸借及ヒ贈與ノ如キ之カ爲メ權利關係ヲ生ス可キ行爲ヲ謂フナリ

本條末項ハ破産者ニ係リ又ハ破産者ヨリ爲ス訴訟及ヒ執行ニシテ動産、不動産即チ財産上ニ關スルモノハ總テ破産管財人ヲ以テ破産者ニ代ラシムト云フニ在リ而シテ繼續スルトハ例ヘハ最初ハ本人ヲ以テ被告トナシ又ハ本人自ラ原告トナリ訴訟ヲナシタル場合ニ於テ其訴訟終結前本人カ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ破産管財人ニ於テ中途ヨリ其訴訟ヲ繼續スルヲ得ルノ類ナリ但此得ナル文字ハ「特リ」ナル文字ト呼應スルモノニシテ破産管財人ノミ特リ之ヲ爲スコトヲ得其他ハ之ヲ爲スコトヲ得サルヲ謂フナリ

(第九百八十六條) 破産ノ効力

四〇

又本條末項ニ付テ注意ス可キハ「動産、不動産ニ關スル」ノ一句是ナリ故ニ動産、不動産ニ關セサル訴訟即チ後見人解除若クハ夫婦離別ノ如キ尙モ人事上ニ關スル訴訟ニ至テハ固ヨリ破産者ニ對シテ直接ニ之ヲ行フ可キモノニシテ全ク本項ノ例外ニ屬スルモノナリ

第九百八十六條 破産者ノ營業ノ用ニ供スル動産ニ對シテ不動産貸賃ノ爲メニスル強制執行ハ三十日間之ヲ猶豫ス但賃貸人カ其賃貸物ヲ取戻ス權利ヲ有スルトキハ此限ニ在ラス

〔義解〕 民法債權擔保編第四百十七條ニ曰ク居宅、倉庫其他ノ建物ノ賃貸人ハ賃借人ノ使用又ハ商工業ノ爲メ此建物内ニ備ヘタル動産物ニ付キ先取權ヲ有スト抑、本條ニ謂フ所ノ不動産貸賃ノ爲メニ強制執行ヲ受クル動産トハ則チ右ノ如キ建物内ノ動産ヲ指スモノニシテ所謂民法ノ規定ニ從フトキハ賃貸人ハ該動産ニ對シテ直チニ先取權ヲ行フコトヲ得可ク而シテ先取權ヲ行フニ付テハ制強執行(民事訴訟法第四百九十七條)

以下)即チ競賣ヲ爲スコトヲ得可キモノナリト雖モ本條ニ於テハ該動産中破産者ノ營業ノ用ニ供スルモノニ限り三十日間其執行ヲ猶豫セサル可ラサルモノトスルナリ其理由ハ營業ニ供スル物品ヲ賣却スルニ於テハ俄然營業ヲ中止セサルヲ得ス然ルトキハ各商品ハ自然低價ニテ之ヲ賣却セサルヲ得スシテ其結果一債權者(賃貸人)ノ爲メ數債權者ノ損害ヲ惹起スニ至ル可キヲ以テ此場合ニ於テハ姑ラク強制執行ヲ猶豫シ破産管財人ヲシテ之レカ營業ヲ繼續シ以テ相當ノ代價ニテ各商品ヲ賣却セシメノコトヲ欲スルニ在ルナリ然レモ營業ノ用ニ供セサル物品即チ自己ノ使用品ノ如キハ無論本條ノ規定ニ從フコトナクシテ直チニ強制執行ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

又猶豫期日タル三十日ヲ經過シタルニ於テハ假令營業ノ用ニ供スル物品ナルニモモ直チニ強制執行ヲ爲シ他ノ債權者未ダ分配ヲ受ク

(第九百八十六條) 破産ノ効力

四一

ルヲ得サルニ拘ハラス特リ自ラ其代金ヲ取得スルヲ得ヘキモノト  
 ス是之ヲ別除權ト謂ヒ第九百九十七條以下ニ於テ規定スル所ナリ  
 本條但書ニ貸貨物ヲ取戻ス權利ヲ有スルキトアルハ例ヘハ契約ヲ以  
 テ貸渡期限ヲ定メタル場合ニ於テ其期限ノ既ニ經過シタルトキヲ謂  
 フ則チ此場合ニ於テハ貸貸人ハ本文ノ猶豫ヲ與フルコトヲ要セス直  
 チニ強制執行ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス斯ク言ハ、前段ノ場合ハ  
 貸渡期限ノ未タ滿タサル前ニ關スルヲ明瞭ナルヲ以テ讀者或ハ其期  
 限前ナル上ハ元來強制執行ヲ受ク可キモノニ非サルヲ以テ故サラニ  
 本條ヲ設クルノ必要ナシト言フ可シ然レモ第九百八十八條ニ於テ辨  
 濟期限ノ未タ至ラサル破産者ノ債務ハ破産宣告ニ依リテ辨濟期限ノ  
 至リタル者トストアルヲ以テ假令契約期限内ナリト雖モ同條ニ依リ  
 既ニ辨濟期限ノ到達シタルモノトナシ即時強制執行ヲ受クルヲ免

ル、ヲ得ス是則チ前段ノ規定ナキヲ得サル所以ナリ

第九百八十七條 各箇債權者ハ優先權ノ存スルニ非サレハ破産處分中  
 破産者ノ財産ニ對シテ強制執行ヲ爲スコトヲ得ス

〔義解〕

破産處分ノ目的ハ同等ナル債權者ヲシテ各自平等ナル分配ヲ  
 受クシムルニ在リ故ニ破産ノ宣告アリタルトキハ破産者ノ財産ハ合  
 シテ之ヲ一團トナシ以テ破産管財人ノ管理ニ歸セシメ又各債權者ヲ  
 シテ一定ノ期限内ニ債權ノ届出ヲ爲サシメ其總債權ヲ合シテ一債權  
 トナシ彼此相對照シ以テ配當案ヲ定ム可キモノナレハ各債權者ハ何  
 レモ此配當案ニ從ヒ之カ配當ヲ受ク可キモノニシテ各自別個ニ債權  
 ヲ主張シ以テ破産處分ノ目的ヲ害スルコトヲ得サルモノトス

然レモ優先權ヲ有スル債權者ニ在テハ他ノ債權者ト平等ナル配當ヲ  
 受ク可キモノニ非ス則チ其擔保物タル財産ニ對シテ先取權ヲ有スル  
 モノナレハ各自別個ニ債權ヲ主張スト雖モ決シテ他ノ債權者ノ妨礙

(第九百八十七條) 破産ノ効力

(第九百八十八條) 破産ノ効力

四四

トナルコトナシ故ニ優先權アル債權ニ限リ第九百九十七條ニ從ヒ特別ニ之ヲ主張スルコトヲ得ヘキモノトス是本條ニ於テ優先權ノ存スルニ非サレハトノ一句ヲ置キ以テ此場合ヲ取除キタル所以ナリ但優先權トハ抵當權又ハ質權ノ類ヲ謂フ例ヘハ破産者ノ所有ニ係ル地所ヲ抵當ニ取置キタル債權者ハ其地所ニ對シテ直チニ強制執行ヲ爲スコトヲ得ヘキモノニシテ他ノ債權者ト平等ノ配分ヲ受クヘキ者ニアラサルカ如シ

第九百八十八條 辨濟期限ノ未タ至ルサル破産者ノ債務ハ破産宣告ニ

依リテ辨濟期限ニ至リタルモノトス

爲替手形ノ引受人又ハ引受ナキ爲替手形ノ振出人又ハ約束手形ノ振出人カ破産宣告ヲ受ケタルトキハ其償還義務ニ付テモ前項ノ規定ヲ適用ス

〔義解〕 抑、債權者カ其債務者ニ期限ノ利益ヲ與ヘタル所以ノモノハ一

ニ債務者ニ信用ヲ置キタルニ因ルナリ故ニ其債務者ニシテ破産シタルニ於テハ信用全ク滅盡シ最早擔保ノ頼ム可キナキニ至リタルモノナレハ此場合ニ在テハ債務者タル者當然期限ノ利益ヲ失ハサルヲ得サルモノナリ而シテ此理由タルヤ既ニ民法(四百五條)ニ於テモ是認スル所ナリ若シ夫レ債務者ノ破産シタル場合ニ於テ其債權者中ノ一名又ハ數名カ其債務ノ辨濟期限ニ至ラサルカ爲メ即時破産處分ニ加ハルコトヲ得サルモノトスルトキハ空ク其期限ノ到達スルヲ待ツノ間ニ在テ破産處分ハ早ヤ既ニ終結ヲ告ク該債權者ハ一モ辨濟ヲ受クルコトヲ得サルニ至ル可シ是豈ニ破産處分即チ平等分配ノ目的ナリトスルコトヲ得ンヤ故ニ本條ニ於テハ辨濟期限ノ未タ至ラサル債務ト雖モ破産宣告ニ依リ辨濟期限ニ至リタルモノトナシ其債權者ハ直チニ債權ノ届出ヲナシ以テ平等ノ分配ヲ受クルコトヲ得ヘキモノトス

(第九百八十八條) 破産ノ効力

四五

期限ニハ合意上ノモノアリ法律上ノモノアリ又停止條件若クハ解除條件ニ繋ルモノアリ(民法債編第四百三條及第四百八條)而シテ本條ニ謂フ所ノ辨濟期限ニハ盡ク此等ノ期限ヲ包含スルモノトス故ニ債務者カ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ停止ノ條件若クハ解除ノ條件カ成就セザルトキト雖モ其債權者ハ破産財團ニ對シテ請求ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス例ヘハ甲者カ乙者ニ對シ若シ三年内ニ公用ヲ以テ歐洲ニ赴クコトヲ得ハ自己ノ家屋ヲ乙ニ讓與スヘシト約シタル場合ニ於テ未タ其三今年ヲ經サル前甲カ破産シタルトキハ則チ甲ヲ以テ歐洲ニ赴キタルモノト假定シ乙ヨリ直チニ其家屋ノ引渡ヲ求ムルコトヲ得ルカ如シ然レモ三今年ヲ過キタル後甲ハ遂ニ歐洲ニ赴カサルコトアルヤモ未ク知ル可ラス依テ破産管財人ハ乙ヲシテ他日其家屋ヲ返還セシムルニ足ル可キ擔保ヲ取置クノ權利ヲ有スルハ蓋論ヲ待タサル所ナリ

本條ニ於テ注意ス可キハ辨濟期限ノ至ラサル債務トノミ謂ハスシテ辨濟期限ノ至ラサル破産者ノ債務トアルコト是ナリ則チ破産者ノ債務トアルヲ以テ例ヘハ二名ノ債務者アル場合ニ於テ其一名ノミ破産者トナリタルトキハ此者ニ對シテハ辨濟期限ノ至リタルモノトスト雖モ他ノ一名ハ固ヨリ破産者ナラサルカ故ニ其者ノ負フタル債務ハ未タ辨濟期限ノ至リタルモノトスルヲ得ス且此理由ヲ推スルハ破産者ノ保證人ニ對シテモ亦同一ノ解釋ヲ下タサルヲ得サル可キナリ本條第二項ハ爲替手形及ヒ約束手形上ノ義務ニ付キ特ニ例外ヲ設ケタルモノナリ則チ第一項ニ依レハ破産宣告ニ依リテ辨濟期限ニ至リタルモノトスルハ單ニ破産者ノ債務ニノミ止マルト雖モ第二項ニ於テハ管ニ破産者ノ債務ニ對スルノミナラス未タ破産セサル償還義務者ノ債務ニ對シテモ亦同シク辨濟期限ニ至リタルモノトスルテリ例

(第九百八十八條) 破産ノ効力

ハ甲ハ爲替手形ノ振出人ニシテ乙ハ其受取人タリ而シテ丙ハ其支拂人タル場合ニ於テ乙ヨリ之ヲ丁ニ讓渡シ丁ヨリ之ヲ戊ニ讓渡シ則チ戊ハ其手形ノ所持人トシテ丙(支拂人)ニ對シテ支拂ノ引受ヲ求メ而シテ丙之ヲ引受ケタル場合(第七百三)ニ於テ其支拂義務者タル丙カ破産シタルトキハ其手形ノ支拂期日以前ト雖モ第一項ニ依リ丙ノ義務ニ對シテハ既ニ支拂期日ニ至リタルモノトスルノミナラス第二項ニ依リ其償還義務者タル甲乙丁ニ對シテモ亦其支拂期日ニ至リタルモノトス依テ手形所持人タル戊ニ在テハ其支拂期日前タルニ拘ハラス甲乙丁ノ總員又ハ其内ノ一人若クハ數人ニ對シテ直チニ爲替金額ノ償還ヲ求ムルコトヲ得ルカ如シ是レ之ヲ償還義務ニ付テモ前項ノ規定ヲ適用スト謂フナリ

本條第二項ノ規定ハ一般ノ爲替義務者ノ破産ニ對シテ盡ク之ヲ適用

ス可キモノニ非ス所謂爲替手形ノ引受人又ハ引受ナキ爲替手形ノ振出人又ハ約束手形ノ振出人カ破産シタルトキニノミ係ルモノナリ故ニ裏書讓渡人又ハ引受アル爲替手形ノ振出人等カ破産シタルトキニ在テハ其者ニ對スル義務ニ付テノミ辨濟期限ニ至リタルモノトナシ之カ支拂ヲ請求スルコトヲ得ルト雖モ其他ノ爲替義務者ニ對シテハ未タ以テ之ヲ請求スルコトヲ得サルモノトス

夫レ爲替債務ニ付キ本條第二項ノ例外ヲ設クル所以ノモノハ抑爲替手形及ヒ約束手形ハ取引上現金ト其價直ヲ同フス可キモノナレハ其支拂ニ付キ常ニ鞏固ナル擔保ナキヲ得ス則チ爲替手形ノ引受人及ヒ引受ナキ爲替手形ノ振出人并ニ約束手形ノ振出人ハ孰レモ主タル擔保ナルヲ以テ若シ其者等ノ破産シタルトキハ忽チ手形ノ信用ヲ喪ヒ爲メニ其流通ヲ妨クルニ至ル可シ故ニ此ノ如キ危險ナル手形ハ直チ

ニ辨濟期限ニ至リタルモノトナシ長ク之ヲ社會ニ現存セシメサラン  
 コトヲ欲スルニ在ルナリ又裏書讓渡人又ハ引受アル爲替手形ノ振出  
 人ノ如キ普通償還義務者カ破産シタル場合ヲ取除キタル所以ノモノ  
 ハ假令此者等ニ於テ破産スルト雖モ主タル擔保ノ確實ナル上ハ未ダ  
 必スシモ手形ノ安全ヲ害セサルニ因ルナリ  
 爲替手形及ヒ約束手形ノ外別ニ小切手ナルモノアリ(第六百十條以下)而シテ  
 其價直ニ至リテハ毫モ手形ニ異ナルコトナシ然ルニ本條ニ於テ一モ  
 小切手ニ係ル場合ヲ定メサル所以ノモノハ元來小切手ハ一覽拂トス  
 ルニ非サレハ之ヲ振出スコトヲ得サルヲ以テ小切手ノ所持人ハ本條  
 ノ規定ヲ待タス何時ニテモ支拂ヲ求ムルノ權利アルニ因ルナリ  
 [論說] 第七百七十九條ニ於テハ引受人カ破産宣告ヲ受ケ其他資力ノ  
 確ナラサルニ至リタル場合ニ於テ爲替支拂ノ爲メ十分ナル擔保ヲ供

セサルトキハ所持人ハ滿期日前ニ支拂拒證書ヲ作リテ償還請求ヲ爲  
 スコトヲ得トアリテ所持人カ滿期日前ニ償還請求ヲ爲スコトヲ得ル  
 ハ所謂十分ナル擔保ヲ供セサルトキニ限リ然ルニ本條ニ於テハ償  
 還義務ニ付テモ辨濟期限ニ至リタルモノトス可キ規定ナルヲ以テ假  
 令償還義務者ニ於テ擔保ヲ供ス可キ旨ヲ申立ツルトキト雖モ所持人  
 ハ直チニ支拂ヲ請求スルコトヲ得ルカ如シ然レモ今之ヲ法理ニ質ス  
 トキハ本條ノ規定甚ダ妥當ナラサルヲ覺フ抑滿期日前ニ支拂ヲ要求  
 スルコトヲ許ス所以ノモノハ若シ之ヲ猶豫スルトキハ滿期日ニ至リ  
 遂ニ支拂ヲ受クルコトヲ得サルノ危險アルニ因ルナリ其レ然リ然ラ  
 ハ則チ其支拂ニ充ツ可キ十分ナル擔保ヲ供スルニ於テハ法律上豈敢  
 テ期限ヲ短縮スルノ必要アラザヤ是ヲ以テ本條ノ場合ニ於テモ所持  
 人カ支拂ヲ請求スルコトヲ得ルハ之カ擔保ヲ受クルコトヲ得サル場

(第九百八十八條)破産ノ効力

合ニ限ルモノトシ其實第七百七十九條ノ旨趣ニ異ナルナシトスルヲ  
 相當ナリトスロイスレル氏ノ第一草案ニ於テハ爲替債務ニ在テハ引  
 受テキ爲替手形ノ振出人及ヒ約束手形ノ振出人ニモ第八百四十條(草案  
 第七百七十九條ハ本法案第ニ適用ス)トアリテ本條ノ場合ハ毫モ第七百七  
 十九條ニ異ナラサル旨ヲ掲ケリ然ルニ第二ノ草案ニ至リ大ニ之ヲ變  
 更シ遂ニ本條末項ノ文章トナルニ至レリ案スルニ同氏ハ嘗テ破産法  
 テ以テ單行法トナサントスルニ當リ自ラ第一草案ヲ修正シタルコト  
 アリキ而シテ其事行ハンス更ニ之ヲ商法ニ組入レタルモノナレハ或  
 ハ恐ル該修正文ヲ以テ其儘之ヲ本法ニ加ヘタルニ因ルニ非サルナキ  
 歟果テ然ラハ第七百七十九條ト牴觸ヲ生セサルヲ得サル所以ノ理亦  
 以テ怪ムニ足ラサルナリ今ヤ本條末項ニ付キ余カ下ヲシタル解釋ヲ  
 以テ正當ナリトセンカ之ヲ第七百七十九條ノ規定ト調和セシムルノ

難キ上來辯解スル所ノ如シト雖モ若シ或者ノ説ノ如ク本條末項ノ場  
 合モ均ク引受人及ヒ其他ノ者カ破産シタルトキニ於テ其者ノ財團ニ  
 對スル場合ニ係ルモノトスルニ於テハ(木下氏爲替手形ニ於テハ其義錄ニ  
 者カ手形引受人ナルトキ又ハ其振出人ニシテ其手形ニ引受テキトキ  
 ニ限リ其手形支拂ノ期日即チ辨濟期限ノ未タ至ラサル前ト雖モ支拂  
 ルチ財團ニ對シテ云々)實ニ平易ノ法條ニシテ一モ牴觸ヲ感スル所ナシ  
 然レモ本條末項ヲ以テ同シク破産者ニ對スルモノトスルニ至リテハ  
 余ノ全ク同意スル能ハサル所ナリ何トナレハ破産者ノ債務ニ對スル  
 規定ハ前項ニ於テ既ニ十分ナルヲ以テ故サテ同一ノ規定ヲ復設ス  
 ルノ必要ナキノミナラス殊ニ末項ニ於ケル償還義務ニ付テノ文字ニ  
 至テハ到底之ヲ解釋スルヲ得サルニ至ルヲ以テナリ  
 第九百八十九條 財團ニ對シテハ破産宣告ノ日ヨリ利息ヲ生スルコト  
 止ム但抵當權、質權其他ノ優先權ヲ以テ擔保セラレタル債權ハ其擔  
 保物ノ賣拂代金ニ滿ツルマテテテ限リトシテ利息ヲ生スルコトヲ得  
 (第九百八十九條) 破産ノ効力  
 五三



〔義解〕 本條ハ破産者ノ財産配當ヲ容易ナラシムルノ一便法ナリ夫レ一旦届出タル債權カ其後ニ生ス可キ利息ノ爲メ日々其額ヲ異ニスルニ於テハ之カ爲メ確定ノ配當案ヲ作ルコトヲ得スシテ遂ニ正確ナル配當ヲナスノ機ナキニ至ルカ故ニ特ニ本條ヲ設ケテ債權額ニ利息ヲ生スルコトハ破産宣告ノ日ニ至リテ停止スルモノトセリ依テ債權者ハ債權届出ノ節唯其破産宣告ノ日迄ノ利息ヲ加算ス可ク而シテ破産管財人ハ其金額ニ依リテ配當案ヲ調製ス可キモノトス但破産宣告ノ日ヨリトハ破産宣告ノ翌日ヨリト謂フニ異ナラサルヲ以テ其當日迄ノ利息ハ固ヨリ之ヲ加算スルコトヲ得ヘキモノナリ

右ニ謂フ如ク破産宣告以後債權ニ利息ヲ生セサルモノトスルノ理由ハ單ニ配當ノ便利ヲ圖リタルニ外ナラス是ヲ以テ破産手續ノ停止若クハ終結ノ後ニ至リ破産者一身ニ對シテ債權ヲ主張スル場合ニ在テ

ハ破産宣告後ノ利息ト雖モ引續キ之ヲ計算シ以テ其全利息額ヲ請求スルコトヲ得ヘキモノトス是特ニ財團ニ對シテハトノ一句アル所以ナリ

抵當權質權及ヒ其他ノ優先權即チ留置權ノ如キ物上權ヲ有スル債權者ハ其物ニ對シテ特リ先取權ヲ有スルモノニシテ普通債權者ノ如ク配當案ニ依リテ分配ヲ受ク可キモノニ非サルヲ以テ凡ソ此等ノ債權ニ付テハ其辨濟ヲ受クルノ日ニ至ルマテ依然利息ヲ加算スルヲ得ヘキモノトス然レトモ其額ハ賣拂代金ニ滿ツルマテヲ制限トシ之ヲ超過スルコトヲ得ス例ヘハ抵當債權ノ額ハ一萬圓ニシテ而シテ破産宣告ノ日迄ノ利息額五百圓ナル場合ニ於テ若シ其抵當物公賣ノ價額カ一萬六百圓ナルトキハ破産宣告後ノ利息ハ其差引殘額百圓ニ滿ツルヲ以テ限トスルカ如シ何トナレハ元來優先權ヲ有スルハ唯其引當物

ノ上ニ止マルヲ以テ若シ其引當物ヲ以テ完全ナル辨濟ヲ得サルニ於テハ其殘額ハ則チ普通債權トナリ他ノ債權者ト共ニ財團中ヨリ平等ノ配當則チ普通債權者ト同一ノ待遇ヲ受ク可キモノナルヲ以テナリ」

〔論說〕 論者曰ク破産宣告ノ日ヨリ各債權ニ對シテ利息ヲ生セザラシムル所以ノモノハ各債權者ノ利益ヲシテ偏重ナラシメサルニ在リト而シテ其理由トスル所ハ債權者中利息ヲ契約シタル者ト否ラサル者トアル場合ニ於テハ其一方ニ在テハ破産ノ終局ニ至ル迄引續キ契約上ノ利息ヲ受クルコトヲ得ルニ拘ハラズ他ノ一方ニ在テハ一モ之ヲ受クルコトヲ得サルノミナラス破産處分ノ延引スルニ從ヒ益損失ヲ増加スルノ不都合アリト云フニ在ルナリ是固ヨリ理由ナキニ非スト雖モ若シ夫レ本條ノ目的ヲ以テ單ニ債權者ノ利益ヲ平均セシメントスルニ在リト云フニ至テハ余ハ其不備ヲ證セサルヲ得ス何トナレハ

果テ利益ヲ平均セシメントセハ豫メ利息ヲ引去置キタル債權者アル場合ニ於テハ蓋其利子ヲ財團ニ拂戻サシメサルヲ得サル可シ然ルニ本條敢テ此等ノ明文ナキノミナラス既ニ受取タル利息ハ固ヨリ之ヲ拂戻サシム可キ精神ニ非サルハ敢テ疑フ可ラサルヲ以テナリ故ニ曰ク本條ノ規定ハ單ニ配當ノ便利ヲ圖リタルニ外ナラズト

第九百九十條 支拂停止後又ハ支拂停止前三十日內ニ破産者カ爲シタル贈與其他ノ無償行爲又ハ之ト同視ス可キ有償行爲期限ニ至ラサル債務ノ支拂期限ニ至リタル債務ノ代物辨濟及ヒ從來負擔シタル債務ノ爲メ新ニ供スル擔保ハ財團ニ對シテハ當然無効トス

〔義解〕 本條ハ破産宣告前ニ於ケル破産者ノ行爲ト雖モ破産宣告ニ依リテ當然無効トナル可キモノアルヲ示シ以テ破産ノ際ニ至リ往々生スルコトアルヲ免レサル所ノ通弊ヲ防クニ在ルナリ今其行爲ヲ列舉シ之カ解説ヲ付スルニト左ノ如シ

(第九百九十條) 破産ノ効力

第一 贈與 民法財産編第二百九十八條ニ曰ク當事者ノ一方ノミ  
カ何等ノ利益ヲモ給セスシテ他ノ一方ヨリ利益ヲ受クルトキハ  
其合意ハ無償ノモノナリト則チ贈與トハ此ノ如キ無償ノ契約ヲ  
謂フナリ

第二 其他ノ無償行爲 右ニ謂フ如キ贈與ノ名義ヲ帯ヒサルモ無  
償ニテ義務ヲ負擔スル類例少カラス例ヘハ甲者ハ乙者ヨリ曾テ  
一錢ヲモ借受ケタルコトナキニ拘ハラズ乙者ニ對シテ若干圓ノ  
借用證書ヲ差入レタル場合又ハ甲者カ乙者ニ對シテ借金證書ヲ  
差入ル、ニ當リ丙者ハ何等ノ報酬ヲモ受クルコトナクシテ該證  
書ノ保證人トナリタル類ノ如シ

第三 無償ト同視ス可キ有償行爲 例ヘハ千圓ノ價直アル商品ヲ  
僅ニ百圓ニテ賣拂フ可キコトヲ約シ又ハ百圓ノ負債ニ對シテ千

圓ノ借用證書ヲ差入レタル類ノ如キ其名ハ有償ナルモ其實無償  
ニ異ナラサル行爲ヲ謂フナリ但如何ナル報償額ヲ以テ無償ト同  
視ス可キカハ事實上ノ問題ニシテ裁判官ノ大ニ注意ヲ要スル所  
ナリ

第四 期限ニ至ラサル債務ノ支拂 此行爲ハ普通ノ場合ニ在テハ  
固ヨリ答ム可キ所爲ニ非スト雖モ破産ノ際ニ在テ之ヲ行フニ於  
テハ忽チ財團ノ損失ヲ生シ以テ衆債權者ノ受ク可キ配當ノ割合  
ヲ減少スルニ至ル可シ故ニ之ヲ禁セサルヲ得サルノ理ハ則チ本  
條ニ掲ケタル他ノ場合ニ異ナルコトナキナリ

第五 期限ニ至リタル債務ノ代物辨濟 代物辨濟トハ米穀ヲ以テ  
借金ノ支拂ニ充テ又ハ牛ヲ賣渡シタル場合ニ於テ馬ヲ引渡ス類  
ヲ謂フ然レトモ本項ノ規定ハ佛法(佛商第四百四十六條)ニ所謂期限ニ至リ

(第九百九十條) 破産ノ効力

タル債務ヲ償フ爲メ貨幣又ハ商業手形ヲ支拂フ外其他ノ方法ヲ用ユルコトヲ得スト云フニ異ナルコトナシ故ニ現金ノ代リニ手形又ハ小切手ヲ支拂フカ如キハ固ヨリ之ヲ代物辨濟ト看做スコトヲ得ス何トナレハ手形及ヒ小切手ハ性質上常ニ通貨ト同視ス可キモノナレハナリ

第六 從來負擔シタル債務ノ爲メ新ニ供スル擔保 例ハ最初ハ無抵當ノ借用證書ナリシテ更ニ改メテ抵當入ノ證書トナスカ如キ後ニ至リ擔保物ヲ差入ル、テ謂フ但從來負擔シタルトアルテ以テ現金ヲ借入ル、ト同時ニ擔保物ヲ差入レタルトキハ假令支拂停止前十日内ニ係ル場合ト雖モ決テ本條ノ規定ヲ適用スルヲ得サルモノトス

本條ニ於テモ「財團ニ對シテ」トノ一句ハ最モ必要ノ文詞ニシテ則チ破

産者ノ一身ニ對シテ有効ナリトノ點ニ付テハ毫モ前條ノ説明ニ異ナルコトナシ又當然無効トストアル當然ナル二字ハ次條ノ場合ノ如キ關係人ノ異議アルニ因リ始メテ無効トナルニ非スシテ法律上當然無効タル旨ヲ明示スルモノナリ

第九百九十一條 前條ニ掲ケタルモノノ外債務者カ支拂停止後破産宣告前ニ財團ノ損害ニ於テ爲シタル總テノ支拂及ヒ權利行爲ハ相手方カ支拂停止ヲ知りタルトキニ限り財團ノ計算ノ爲メ之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得  
然レトモ手形ヲ支拂ヒタル場合ニ於テハ爲替手形ヲ振出し又ハ振出サシムル際支拂停止ヲ知りタル振出人又ハ振出委託人ヨリ又約束手形ニ在テハ裏書讓渡ノ際支拂停止ヲ知りタル第一ノ裏書讓渡人ヨリ其支拂金額ヲ償還スルコトヲ要ス

〔義解〕 前條ハ破産者ノ爲シタル行爲ニシテ當然無効タルモノヲ掲ケ本條ハ異議ノ申立アリタルニ依リ判決ヲ以テ始メテ無効トナル行爲ヲ掲グルモノナリ故ニ前條ノ場合ニ於テ契約ヲ取消シタルトキハ其

(第九百九十一條) 破産ノ効力

取消ノ効力ハ契約取結ノ時ニ遡リテ最初ヨリ無効トナリ全ク契約ナカリシトキノ情況ニ復ス可キモ本條ノ場合ニ於テ之ヲ取消シタルトキハ唯其判決言渡ノ以後ニ於テノミ効力ヲ有ス可キモノトス加之本條ノ場合ニ在テハ異議ヲ採用スルト否トハ全ク裁判所ノ權内ニ屬シ殊ニ相手方ノ善意ナリシヤ否ヤヲ審案スルハ最モ必要ナル事實上ノ問題ナリトス

「總テノ支拂」トハ支拂期限ニ至リタル支拂又ハ報償ヲ得テ爲ス支拂ノ如キ總テ前條以外ノ支拂ニシテ支拂停止後破産宣告前ニ在ルモノヲ謂フナリ

「權利行爲」ノ四字ニハ前條ニ掲ケタルモノノ外支拂停止後破産宣告前ニ財團ノ損害ニ於テ爲シタル總テノナル三十七字ヲ冠シタルモノナレハ其權利行爲ハ則チ前條ノ規定以外ニシテ且財團ノ損害トナル可

キモノタルヲ必要トスルナリ故ニ支拂停止後破産宣告前ニ於テ爲シタル行爲ト雖モ或ハ前條ニ掲ケタル行爲ニ屬スルトキ又ハ財團ノ損害トナラサルトキハ固ヨリ本條ノ規定ニ從フ可キモノニ非ス例ハハ賣買契約若クハ保險契約ヲ取結フトキハ其結果財團ノ損害タルヲ免レスト雖モ賣掛代金ヲ取立テ又ハ預品ヲ取戻スカ如キハ固ヨリ財團ノ損害トナルコトナキカ如シ

總テノ支拂又ハ財團ノ損害ニ於テ爲シタル權利行爲ト雖モ其相手方ニ於テ支拂停止ノ事實ヲ知りタルトキニ非サレハ異議ヲ述フルコトヲ得ストスル所以ノモノハ債務者ハ破産ノ宣告ヲ受クル迄自己ニ屬スル財産ヲ處分スル權利ヲ有スルノミナテス抑本條ニ於ケル取引ハ前條ニ謂フ如キ無償ノ利益ヲ授與ス可キ目的ニ非スシテ則チ破産者ニ於テモ正當ノ手續ニ依リ之ヲ行フタルモノト看做ス可キモノナル

(第九百九十一條) 破産ノ効力

カ故ニ此場合ニ在テハ善意ニテ取引ヲ爲シタル相手方ノ權利ヲ害スルコトヲ得サルニ因ルナリ  
 異議ヲ述フルコトヲ得ヘキ者ハ通例破産管財人ナリト雖モ債權者ヨリモ亦直チニ異議ヲ述フルコトヲ得ヘシ而シテ此異議ヲ述フルコトヲ得トハ通常ノ手續ニ從ヒ相手方ノ住所ヲ管轄スル裁判所ニ於テ訴權ヲ行フコトヲ得ルヲ謂フナリ

右ノ如ク破産者ヨリ支拂ヲ受ケタル者其他權利行爲ヲ爲シタル相手方ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得ヘシト雖モ若シ破産者ニ於テ爲替手形又ハ約束手形ト引替ニテ支拂ヲ爲シタル場合ニ在テハ何人タリトモ其支拂ヲ受ケタル者ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得ス唯左ノ人ニ對シテノミ支拂金額ノ償還ヲ求ムルコトヲ得ヘキモノトス

第一 爲替手形ヲ振出ス際其支拂人カ既ニ支拂停止ヲ爲シタルコ

トヲ知リタル振出人

第二 爲替手形ヲ振出サシムル際支拂人カ支拂停止ヲ爲シタルコ

トヲ知リタル振出委託人但振出委託人トハ例ヘハ甲者カ乙者ニ委託シ乙者ノ名義ヲ以テ甲者ノ取引先ナル丙者宛ニテ爲替手形ノ振出ヲ委託スル者ヲ謂フ

第三 約束手形ヲ振出ス際振出人カ支拂停止ヲ爲シタルコトヲ知リタル第一ノ裏書讓渡人（論說内參看）

以上三種ノ人々ハ何レモ手形ヲ振出ス際既ニ其手形カ不拂トナル可キコトヲ熟知シナカラ之ヲ振出シ又ハ之ヲ受取タル上更ニ他人ニ讓渡シタルモノナレハ此者等ニ在テハ破産財團ニ對シテ補償ヲ爲スノ義務アルモノトスルナリ然レモ正當ニ手形ノ讓受ヲ爲シ且正當ニ之カ支拂ヲ受ケタル手形所持人ニ於テモ其受取金ヲ返還セサルヲ得サ

ルモノトセハ其返還ス可キ時期ニ於テハ既ニ拒證書作成ノ期間ヲ過キ去リ最早裏書讓渡人ニ對シテ償還請求ヲ爲スコトヲ得サルカ故ニ終ニ不慮ノ損害ヲ蒙アルニ至ル可シ是則チ本條末項ノ規定ナキヲ得サル所以ナリ

〔論說〕 本條ニ於テ余カ疑義ヲ存スルモノ二點アリ則チ第一ハ本條前項ニ於ケル「財團ノ損害ニ於テ爲シタル」トノ一句ハ「總テノ支拂」ナル文字ニ冠ス可ラサルモノニ非サル耶第二ハ同末項ニ於ケル「裏書讓渡ノ際」ナル一句ハ誤テ之ヲ挿入シタルモノニアラサル耶ノ點是ナリ右第一ノ疑アル所以ハ若シ「財團ノ損害ニ於テ爲シタル」トノ一句ヲ以テ「總テノ支拂」ナル文字ニ冠スルモノトセハ破産者カ破産宣告前ニ爲シタル支拂ニシテ財團ノ損害トナラサルモノナキヲ得ス然ルニ如何ナル支拂カ果テ財團ノ損害トナラサルモノナルヤ余ハ未タ此ノ如キ支拂

アルヲ覺知スルヲ得サルナリ今假ニ他人ヨリ特別ニ金錢ヲ借受ケ之ヲ以テ支拂ヲ爲シタル場合ナリト想像セシカ既ニ一旦之ヲ借受ケタル上ハ則チ其金錢ハ之ヲ財團中ニ加ヘ一般債主ニ對シテ平等ニ配分ス可キモノナレハ此ノ如キ支拂ト雖モ猶ホ之ヲ財團ノ損害ト謂ハサルヲ得サルナリ然レトモ此ハ行文ノ不當ニ止リ實際上敢テ不都合ヲ生スルノ恐アルニ非スト雖モ唯其第二ノ疑點ニ至リテハ若シ之ヲ本文ノ如クスルニ於テハ頗ル事實ニ適セサルノ結果ヲ生ス可キナリ何トナレハ約束手形ノ裏書讓渡ヲ爲スニ際シ其者カ振出人ノ支拂ヲ停止シタル事實ヲ知リテ讓渡タルカ爲メ破産財團ニ對シテ支拂金ノ返還ヲ爲サ、ルヲ得ストセハ管ニ第一ノ裏書讓渡人ニ止マラス苟モ此事實ヲ知リタル裏書讓渡人ナルニ於テハ總テ同一ノ責任ヲ負擔セサルヲ得サル可キヲ以テナリ然ルニ本條ニ於テハ特リ第一ノ裏書讓渡

人ノミ此ノ如キ不幸ヲ被フル可キモノトセリ之レ豈道理ノ許ス所ナ  
 ランヤ且夫レ、ロイスンル氏ノ註解ニ於テハ本條ヲ草スルニ當リ佛國  
 商法第四百四十九條、白國商法第四百四十九條及ヒ獨國破産法第二十  
 七條ヲ引用セシ旨ヲ掲クルト雖モ右ノ諸條中未ダ曾テ「裏書讓渡ノ際」  
 ナル文字アルコトナク則チ「支拂停止ノ事實ヲ知リタル時期」ヲ爲替手形  
 若クハ約束手形ヲ振出ス際ニ在ルコトヲ必要トセリ是實ニ其當ヲ得  
 タルモノニシテ所謂振出ノ際爲替手形ノ支拂人又ハ約束手形ノ振出  
 人カ支拂停止ヲ爲シタル事實ヲ知リテ之ヲ受取リタルトキハ其受取  
 人ハ寧ロ善意ニテ其手形ヲ受取タルモノトスルヲ得サルヲ以テ此ノ  
 如キ受取人ニ對シテハ固ヨリ本條未項ノ制裁ヲ加フルヲ以テ相當ナ  
 リトス可キモ其振出ノ際ニ在テハ毫モ其事實ハ聞知セス而シテ裏書  
 讓渡ノ際ニ至リ始メテ之ヲ知リタル場合ニ在リテハ其裏書讓受人ヲ

害スルノ點ニ付テハ第一裏書讓渡人ト其後ノ裏書讓渡人トノ間毫モ  
 異ナルコトナキヲ以テ特リ第一ノ裏書讓渡人ノミテ責ムルノ道理ナ  
 カル可キナリ故ニ余ノ見ル所ニ依レハ裏書讓渡ノ際ナル文字ハ蓋之  
 レ衍字ナリト看過スルヲ以テ相當ナリトス然レトモ整然タル法文ヲ  
 以テ輒ク之ヲ誤認ナリト斷定スルハ亦却テ杜撰タルヲ免レス故ニ姑  
 ラク之ヲ爰ニ書シ以テ疑ヲ存スト云フ爾

第九百九十二條 有効ニ取得シタル抵當權其他合式ノ登記ニ因リテ法  
 律上効力ヲ有ス可キ權利ハ支拂停止後ニ在テハ其取得ノ時ヨリ十五  
 日ヲ過キサルトキニ限り破産宣告ノ日マテ登記ヲ爲スコトヲ得

〔義解〕 從來負擔シタル債務ノ爲メ新ニ供スル擔保ハ支拂停止後ハ勿  
 論支拂停止前ト雖モ其三十日以内ニ係ルモノハ總テ無効タル可キコ  
 トハ第九百九十條ニ於テ規定スル所ナリ而シテ本條ニ謂フ所ハ新ニ  
 供スル擔保ニ非スシテ從前既ニ供シタル擔保及ヒ其他ノ物權ニ付キ

(第九百九十二條) 破産ノ効力



唯其登記ノ手續ヲ經サリシ場合ニノミ係ルモノナリ

登記法(明治十九年法律第十九號)第六條ニ曰ク登記簿ニ登記ヲ爲サル地所、建物、船舶ノ賣買、讓與、質入、書入ハ第三者ニ對シテ法律上其効ヲキモノトスト本條ニ謂フ所ノ抵當權トハ則チ書入ニ因リテ得タル所ノ權利ニシテ右ニ謂フ所ノ規定并ニ本法第八百五十二條、第八百五十三條及ヒ第八百五十四條ノ規定ニ從フ可キモノヲ謂ヒ其他合式ノ登記ニ因リテ法律上効力ヲ有ス可キ權利トハ亦右ニ謂フ所ノ賣買、讓與、質入ヲ始メ民法財産編第三百四十八條以下ノ規定ニ依リテ取得スル權利ヲ謂フナリ之ヲ要スルニ凡ソ此等ノ權利ハ其當事者間ニ在テハ契約ニ依リテ即時ニ之ヲ移轉セシムルコトヲ得ヘキモノナリト雖モ第三者ニ對シテハ登記ヲ經ルコト非サレハ法律上其効力ヲ有ス可キモノニ非サルナリ

借本條ニ於テハ支拂停止後ニ在テ登記ヲ受クルコトヲ許スト雖モ其登記ヲ受クルニ付テハ必スヤ左ノ二箇ノ制限ニ從ハサルヲ得サルモノナリ

第一 有効ニ取得シタル權利ナルコト 故ニ第九百九十條ノ規定ニ反シテ取得シタル權利即チ支拂停止前三十日內ニ在テ無償若クハ不相當ノ報償ニテ所有權ヲ取得シタル場合又ハ虛偽ノ負債ノ爲メニ抵當權ヲ取得シタル場合ノ如キハ固ヨリ之カ登記ヲ受クルコトヲ得サルモノトス

第二 取得ノ時ヨリ十五日ヲ過キサルコト 假令有効ニ取得シタル權利ナリト雖モ其取得以來久シク之ヲ抛擲シ而シテ支拂停止後ニ至リ突然登記ヲ請求シタル場合ニ在テハ債權其モノ、上ニ付キ或ハ假裝ニ出タルカ又ハ新ニ擔保ヲ約シタルカニ因リテ他

(第九百九十二條) 破産ノ効力

ノ債權者ニ損害ヲ加フ可キ意思ナリトノ推測ヲ下タサ、ルヲ得  
ス是爰ニ十五日以前ニ係ル場合ヲ取除キタル所以ナリ但此十五  
日トハ破産宣告ノ日迄ノ日數ヲ謂フニ非スシテ現ニ登記ヲ爲ス  
迄ノ日數ヲ謂フナリ

第九百九十三條 破産宣告ノ時ニ破産者及ヒ其相手方ノ未タ履行セス  
又ハ履行ヲ終ラサル雙務契約ハ孰レノ方ヨリモ無賠償ニテ其解約ヲ  
申入ルルコトヲ得

貸借契約又ハ雇傭契約ニ在テハ解約申入ノ期間ニ付キ協議調ハサ  
ルトキハ法律上又ハ慣習上ノ豫告期間ヲ遵守ス可シ

〔義解〕 破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ破産者ノ方ニ在テハ各債權者ニ  
對シ平等ニ債務ヲ辨済ス可キモノニシテ例ヘハ甲ヨリ借受ケタル元  
利金額カ百圓ニシテ乙ヨリ買取タル物品代價カ百圓ナル場合ニ於テ  
若シ甲ニ配當ス可キ金額カ五十圓ナルトキハ乙ニ配當ス可キ金額モ

亦必ス五十圓タラサルヲ得サルカ如シ故ニ乙ト破産者トノ賣買契約  
カ未タ全ク履行スルニ至ラス若クハ既ニ幾分ヲ履行セシト雖モ未タ  
之ヲ終了セサル場合ニ在テモ仍ホ之カ履行ヲ全フスルノ要アリトセ  
ハ乙ハ僅ニ五十圓ノミヲ受ク可キモノタルヲ明知シナカラ百圓ニ相  
當スル現物ヲ引渡サ、ルヲ得サルニ至ル可シ之ニ反シ賣買ヲ約シタ  
ル物品ハ破産者ニ於テハ自ラ之ヲ有用ナリトシ則チ百圓ノ代價ヲ以  
テ之ヲ買取ルコトヲ承諾セシモ破産管財人ニ於テハ全ク之ヲ無用ナ  
リトシ且其價直ナキカ故ニ該代金ニ相當スル割賦額即チ五十圓ノ配  
當タモ之ヲ爲スコトヲ欲セサル場合ト雖モ其物品ヲ引取ラサル可カ  
ラサルニ至ル可シ本條ハ則チ此ノ如キ不都合ヲ矯正ス可キ便法ニシ  
テ如何ナル雙務契約ト雖モ一方ノ隨意ヲ以テ之ヲ解除スルコトヲ得  
可キモノトシ以テ之ヲ普通法ノ例外ニ置ケリ(民法財産編第三百

「未だ履行セス又ハ履行ヲ終ラサル」トアルヲ以テ既ニ履行ヲ終リタル  
場合例ヘハ賣買シタル物品ヲ既ニ引渡シタル後ニ在テハ賣主ハ代價  
不拂ノ旨ヲ以テ其賣買契約ヲ取消スコトヲ得スシテ單ニ財團ヨリ平  
等ノ配當ヲ受クルコトヲ得ルニ過キス則チ此點ニ付テハ別ニ次條ニ  
於テ規定スル所アルナリ

凡ソ普通法ニ在リテハ一方ノ隨意ヲ以テ契約ヲ解除シタル場合ニ於  
テ之カ爲メ相手方ニ損害ヲ生シタルトキハ固ヨリ之カ賠償ノ責ニ任  
ス可キモノナリト雖モ本條ニ於テハ特ニ「無賠償ニテ」トノ一句アルヲ  
以テ此解除ノ爲メ如何ナル損害ヲ生スルコトアルモ之カ責任ヲ負フ  
コトナキナリ例ヘハ賣却シタル物品ノ相場カ後ニ至リ低落シタルト  
キハ賣主ノ損害トナリ之ニ反シ其相場カ後ニ至リ騰貴シタルトキハ  
買主ノ損害トナル可シト雖モ右何レノ場合ニ於テモ解除者ニ對シテ

賠償ヲ求ムルコトヲ得サルカ如シ

貸借契約(民法財産編第八百八十五條以下及)及ヒ雇傭契約(民法財産取得

條以下及ヒ民法第五十一條以下)モ亦固ヨリ雙務契約ニ屬スルヲ以テ其

有期タルト無期タルトヲ問ハス本條第一項ニ從ヒ均ク之ヲ解除スル

コトヲ得ヘキモノナリト雖モ抑此契約ハ突然之ヲ解除スルニ於テハ

忽チ相手方ノ困難ヲ生ス可キヲ以テ雙方相協議シ以テ相當ノ實行期

間ヲ定ム可キナリ然レモ其協議ノ調ハサルニ於テハ法律又ハ慣習ヲ

以テ定メタル豫告期間ニ從フノ外ナキモノトス但法律上ノ豫告期間

トハ貸借契約ニ付テハ民法財産編第五百十條乃至第五百十三條雇

傭契約ニ付テハ民法財産取得編第二百六十條第二項及ヒ本法第五十

九條ノ類ヲ謂フナリ

又慣習上ノ豫告期間ハ地方ニ依リテ其例ヲ異ニスルモノアル可シ然

レ此慣習上ノ期間ハ如何ナル場合ニ於テモ常ニ法律上ノ期間ニ先  
 タツ可キモノトス何トナレハ民法財産編第五十四條ニ於テ契約申  
 入及ヒ返却ノ時期ニ關スル前數條ノ規定ハ其時期ニ付キ地方ノ慣習  
 ナキトキニ非サレハ之ヲ適用セストアリテ前數條トハ右ニ掲ケタル  
 第五百十條以下數條ヲ謂ヒ又民法財産取得編第二百六十條第二項ニ  
 於テモ雇傭ハ地方ノ慣習ニ因リ定マリタル時期ニ於テ又ハ確定ノ慣  
 習ナキトキハ云々トアリテ常ニ慣習ヲ先ニス可シトノ明文ヲ掲クル  
 ヲ以テナリ故ニ本條ニ於テハ假令法律上又ハ慣習上トアリテ法律ヲ  
 以テ慣習ノ上ニ置クト雖モ未タ以テ之ヲ適用ノ順序ヲ定メタルモノ  
 トスルヲ得サル可キナリ

第九百九十四條 契約者ノ一方ノ義務不履行ノ爲メ他ノ一方ニ於テ契

約ヲ解除スル權利又ハ既ニ給付シタル物ヲ取戻ス權利ハ財團ニ對シ

テ之ヲ行フコトヲ得ス

〔義解〕 本條ノ旨趣ハ前條ヲ説明スルニ當リ既ニ一言セシ如ク雙務契  
 約ニ於ケル一方ノ者カ既ニ其義務ヲ盡シタルモ他ノ一方ハ未タ其義  
 務ヲ盡サスシテ破産宣告ヲ受ケタル場合ニ係ルモノナリ夫レ一方ノ  
 者カ既ニ義務ヲ盡シタルニ拘ハラス他ノ一方ノ者ニ於テ自ラ盡ス可  
 キ義務ヲ盡サ、ルニ於テハ其者ニ對シテ契約ヲ解除スル權利即チ既  
 ニ給付シタル物ヲ取戻ス權利ヲ有スルハ蓋シ一般ノ原則ナリトス(第  
 百二十三條及ヒ)然ルニ本條ニ於テハ之カ例外ヲ設ケ此權利ハ財團ニ  
 對シテ之ヲ行フコトヲ得サルモノトナセリ例ヘハ賣主カ破産者ニ對シ  
 テ其賣品ノ全部ヲ引渡シタル場合ニ於テ未タ其代金ヲ受取ラサル前  
 破産者カ支拂ヲ停止シタルモ賣主ハ其賣品カ財團ノ中ニ存在スル  
 ト雖モ財團ニ對シテ之ヲ取戻スコトヲ得ス唯其代金ニ相當スル配當

金ヲ受クルコトヲ得ルニ過キサカ如シ是所謂總債權者ヲ合シテ一  
 躰トナシ以テ平等ノ分配ヲ爲ス可シトノ原則ニ出ツルモノナリ  
 本條ニ於テ特ニ「財團ニ對シテ」トアルヲ以テ其裏面上ヨリ考察スルト  
 キハ財團ヨリ他ノ一方ニ對シテハ無論解除ノ權利ヲ行フヲ得ヘキコ  
 ト取テ普通ノ場合ニ異ナルコトナシ故ニ右ニ掲ケタル反對ノ場合即  
 チ破産者ハ既ニ代金ヲ交付シタルニ拘ハラズ其賣主ニ於テ未タ賣品  
 ヲ引渡シ、ルトキハ財團即チ破産管財人ハ該賣主ニ對シテ契約ヲ解  
 除シ以テ代金ノ取戻ヲ求ムルノ權アルモノトス

第九百九十五條 相殺ノ權利アル債權者ハ期限ニ至ラサル債權又ハ金  
 額未定ノ債權ト雖モ財團ニ對シテ其効用ヲ致サシムルコトヲ得  
 債權カ支拂停止後ニ生シ又ハ取得シタルモノナルトキハ支拂停止ヲ  
 知リタル場合ニ限り相殺ヲ許サス

〔義解〕 相殺ニハ法律上ノモノアリ任意上ノモノアリ又裁判上ノモノ

アリ(民法財産編第五項)而シテ法律上ノ相殺ヲ行フニ付テハ數箇ノ條件  
 アリ(同法第五百二十條)及就中其債權カ要求期限ニ至リタルコト及ヒ  
 金額ノ確定シタルモノタルコトハ最も必要ナル條件ナリトス然レモ  
 本條ニ於テハ之カ例外ヲ設ケ右ノ二條件カ未タ成立セサルトキト雖  
 モ財團ニ對シテ直チニ相殺ヲ求ムルコトヲ得ヘキモノトス是則チ破  
 産者ニ對スル債權ハ未タ返濟期限ニ至ラサルモ破産宣告ニ依リ當然  
 返濟期限ニ至リタルモノトナル(第九百八條)ノミナラス破産者ヨリ受取  
 ル可キ物品ノ價額不確定ナルモ特ニ之ヲ査定スルコトヲ得ヘ  
 キニ因ルナリ例ヘハ曾テ破産者ヨリ買取タル品代金千圓ハ既ニ支拂  
 期限ニ至リ而シテ破産者ニ貸渡シタル金千圓ハ未タ返濟期限ニ至ラ  
 サル場合ニ在テ若シ此相殺ヲ行フコトヲ得ストセハ雙方互ニ同一ノ  
 債權ヲ有スルニ拘ハラズ破産者ニ對シテハ現ニ千圓ヲ完濟シ而シテ

破産者ヨリハ僅ニ一分ノ配當ヲ受クルコトヲ得ルニ過キサル可シ且金額未定ノ故ヲ以テ相殺ヲ許サ、ルニ付テモ亦全ク之ニ同シ是蓋本條ノ例外ナキヲ得サル所以ナリ

辨濟期限ノ至ラサル債權ヲ相殺スルニ當リ之ガ全額ヲ以テス可キヤ又ハ辨濟期限迄ノ利息ヲ割引ス可キヤノ點ニ付テハ本條之ヲ規定セズ加之第九百八十八條ニ於ケル破産者ノ債務ヲ辨濟スル場合ニ付テモ亦之カ規定ヲ設クルモノナシ按スルニ獨法（獨破法及ヒ第五十八條）ニ於テハ右二箇ノ場合ニ在テハ何レモ利子ヲ控除ス可キモノトナシ且別ニ之カ細則ヲ掲ケリ抑此獨法ノ規定ハ頗ル條理ニ適合シタルモノ、如シト雖モ蓋之ヲ本條ニ適用スルヲ得サル可シ何トナレハ第五百八十七條ニ於テ別段ノ契約ナキトキハ債務ノ主タルモノ及ヒ從タルモノヲ割引ナク一回ニ償還スルニ非サレハ債權者之ヲ領取スルコトヲ要

セストアリテ今其精神ヲ推及スルトキハ本條ノ如キ場合ニ在テモ同シク割引ヲ爲スコトヲ許サ、ルモノト認メサルヲ得サルヲ以テナリ」債權カ支拂停止後ニ生シトハ則チ支拂停止後ニ至リ始メテ破産者ヨリ債權ヲ得タルヲ謂フ而シテ第九百九十一條ニ於テハ相手方カ支拂停止ヲ知りタルトキト雖モ單ニ異議ヲ述ヘ其取消ヲ求ムルコトヲ得ルニ過キス之ニ反シ本條ニ於テハ異議アルヲ待タス裁判所ノ職權ヲ以テ當然相殺ヲ許サ、ルモノトスルナリ

取得シタルモノナルトキトハ支拂停止前既ニ生シタル債權ナルモ相手方カ自己ニ之ヲ取得シタルハ支拂停止後ニ在ルトキ即チ支拂停止後他人ヨリ讓受ケタル債權ヲ謂フナリ抑讓渡ヲ受ケタル債權ヲ以テ相殺ヲ行ハントスルニ付テハ常ニ民法（財產編第五）ノ規定ニ從ハサルヲ得サルノミナラス債務者カ破産シタル際ニ在テハ尙ホ且本條ノ規

（第九百九十五條）破産ノ効力

定ニ從ハサルヲ得サルモノナリ

第九百九十六條 債務者カ債權者ニ損害ヲ加フル目的ヲ以テ爲シタル  
權利行爲ハ相手方カ情ヲ知りタルトキニ限リ其日限ノ如何ヲ問ハス  
之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得

[義解] 第九百九十條及ヒ第九百九十一條ニ於テ破産者ノ爲シタル權  
利行爲ニシテ或ハ當然無効トナリ或ハ異議アルヲ待テ無効トスルヲ  
得ヘキ場合ノ規定ヲ設ケリ然レモ是唯、支拂停止後又ハ支拂停止前三  
十日内ニ在ルモノニ限ル今ヤ本條ニ於テハ其行爲ノ如何ナル時ニ在  
リタルヲ問ハス之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得ヘキ旨ヲ定メリ但  
此異議ヲ述フルニ付テハ左ノ二條件ヲ具備セサルヲ得サルモノトス

第一 債務者カ債權者ニ損害ヲ加フル目的ヲ以テ爲シタル權利行  
爲ナルコト 是民法(財産編第三百四十一條)ニ謂フ所ノ詐害ノ行爲  
ニシテ語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ債務者カ債權者ヲ害スルコトヲ知

リテ自己ノ財産ヲ減シ又ハ自己ノ債務ヲ増シタル行爲ナリトス  
例ヘハ債權者ヲ害スル意思ヲ以テ故サラニ訴訟ニ失敗シタルカ  
如キモ亦蓋之ニ屬スルモノトス

第二 相手方カ右ノ情ヲ知りタルコト 假令債務者ハ右ノ如キ惡  
意アリタルトキト雖モ相手方ニ於テ之ヲ知りタリトノ證據ナキ  
ニ於テハ則チ之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得サルモノトス  
右二箇ノ條件ヲ備フルコトハ異議ヲ爲ス者ニ於テ必ス之ヲ證明セザ  
ル可ラス故ニ之ヲ第九百九十條及ヒ第九百九十一條ノ場合ニ比スル  
ハ頗ル難事タルヲ免レヌト雖モ是蓋行爲ノアリタル日附ノ如何ナル  
ヲ問ハス汎ク異議ヲ述フルコトヲ許スノ規定ヨリシテ自ラ生セサル  
ヲ得サルノ結果ナリ

本條ニ於テハ異議ヲ爲スコトヲ得可キ者ノ誰タルヲ指定セスト雖モ

破産管財人ハ其性質上當然之ヲ爲スコトヲ得ヘク而シテ其他ノ者ニ在テハ蓋民法ノ規定ニ從ハサルヲ得サルヘキナリ則チ民法財産編第三百四十三條ニ於テハ廢罷ハ詐害行爲ニ先タチ權利ヲ取得シタル債權者ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ストアリテ異議ヲ述フルコトヲ得可キ權利ハ之ヲ總債權者ニ及ホサハルモノトセリ但其異議ニ依リテ得タル利益ハ之ヲ總債權者ニ分タサル可カラサルコト同條ノ規定スル所ナリ

異議ヲ述フルコトヲ得ヘキ期間ニ付テモ亦別ニ之ヲ定メサルヲ以テ第三百四十九條第一項ニ依リ通例之ヲ六年内トナス可シ然レモ若シ異議ヲ述フルノ權利アル者ニ於テ其事實ヲ覺知シタルトキハ其覺知ノ時ヨリ起算シ二個年ヲ以テ時効ニ罹リタルモノトナシ假令六個年以内ナルトキト雖モ最早異議ヲ述フルコトヲ得サルモノトス是同

條但書及ヒ民法財産編第三百四十四條ニ依リ自ラ然ラサルヲ得サル所ナリ

### 第三章 別除權

〔字解〕 別除權トハ破産者ノ全財産中ヨリ或ル物品ヲ別異シ以テ或ル債權者ノミノ辨償ニ充ツルヲ謂フ英語ニ所謂「ライト、オフ、セパレーション」則チ是ナリ

第九百九十七條 債務者ノ動産又ハ不動産ニ對シテ抵當權、質權其他ノ優先權ヲ有スル債權者ハ財團ヨリ先ツ辨償ヲ受ケタルニ非サレハ其擔保物ノ賣拂代金ヨリ費用利息及ヒ元金ノ支拂ヲ受クル爲メ別除ノ辨償ヲ請求スルコトヲ得若シ其賣拂代金ノ剩餘アルトキハ買主之ヲ財團ニ拂込ム可シ

〔義解〕 普通ノ債權者ハ平等ノ割合ニ依リ及ヒ同一ノ時期ニ於テ財團ヨリ配當ヲ受ク可キモノナリト雖モ本條ニ掲ケタル特種ノ債權者ハ或ル物品ノ價額ヲ限トシテ普通債權者ニ先チ特別ニ辨償ヲ受クルヲ

(第九百九十七條) 別除權



得ヘキモノナリ

其他ノ優先權トハ例ヘハ民法債權擔保編第九十二條以下及ヒ本法第三百八十七條以下ニ定メタル留置權第八百四十九條ニ掲ケタル船舶債權其他税法ニ於ケル國稅及ヒ營業稅ノ類ノ如キ其擔保物ニ對スル先取ノ權利ヲ謂フナリ

【財團ヨリ先ツ辨償ヲ受ケタルニ非サレハトアルハ破産管財人ハ優先權ヲ有スル債權者ニ對シ擔保物以外ノ物ヲ以テ先ツ其負債ヲ辨償スルコトヲ得ヘキカ故ニ若シ此債權者ニ於テ此ノ如キ方法ニ依リ既ニ辨償ヲ受ケタルトキハ該擔保物ハ當然財團中ニ組入ル可キモノナルヲ以テ何人ト雖モ最早之ヲ別除スルコトヲ得サル旨ヲ示スニ在ルナリ

擔保物ハ之ヲ賣擲フタル上其代金ヲ以テ之カ債權ノ辨償ニ充ツ可キ

モノニシテ擔保物其モノヲ以テ直チニ之ニ充ツルヲ得ス故ニ賣拂代金ヨリ云々ト謂ヒ以テ之ヲ賣拂ハサル可ラサル旨ヲ示セリ但賣拂ノ手續ハ質物ニ付テハ第三百七十一條及ヒ第三百七十二條ニ於テ之ヲ規定シ而シテ其他ノ手續ハ總テ民法及ヒ民事訴訟法(民法債權擔保編二百七十八條以下及ヒ第六百四十二條以下)ノ規定ニ從フ可キモノトス

費用利息及ヒ元金トアルハ各辨償充當ノ順序ヲ定メタルモノナリ則チ元金ヲ後ニシ費用及ヒ利息ヲ先ニシタル所以ノモノハ費用及ヒ利息ハ財團ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得サルニ因ルナリ(第九百八十三條)例ヘハ元金カ千圓ニシテ費用カ十圓利息カ百圓ナル場合ニ於テ若シ其擔保物ノ元金カ千圓ナルトキハ殘金百十圓ハ財團ニ向テ之ヲ請求セサルヲ得ス此場合ニ於テ費用及ヒ利息ノ額トシテ百十圓ヲ擔保物ノ代金ヨリ引去ルトキハ其不足額ハ元金ナルヲ以テ更ニ財團

(第九百九十七條) 別除權

ニ對シテ請求スルコトヲ得ヘシト雖モ若シ先ニ元金ヲ引去ルトキハ其殘金ハ利息及ヒ費用ナルヲ以テ之ヲ財團ニ求ムルコトヲ得サルカ如シ

別除ノ辨償ヲ請求スル者ハ其旨ヲ破産管財人ニ申出ツ可キモノトス  
(第六條)但其申出ヲ爲ス可キ期間ニ付テハ別ニ之ヲ規定スルモノナシト雖モ破産管財人ハ相當ノ期間内ニ於テ該債權者ノ意見ヲ問合セ以テ之ヲ決定セサル可ラス何トナレハ本條末項ニ規定スル如ク賣拂代金ニ剩餘アルトキハ買主ヨリ之ヲ財團ニ組入レ以テ一般債權者ノ配當ニ供ス可キモノナルヲ以テナリ  
又買主之ヲ財團ニ拂ヒ込ム可シトアルハ買主ヨリ財團即チ破産管財人ニ對シテ拂込ム可キ義務アルコトヲ示シタルモノナリ故ニ買主ニ於テ債權者若クハ破産者ニ對シテ之ヲ拂込ミタリト雖モ其拂込ヲ以

テ無効トナシ更ニ財團ニ對シテ二重ノ拂込ヲ爲サルヲ得サルモノトス

第九百九十八條 優先權及ヒ其順序ハ民法及ヒ特別ノ法律ニ依リテ定マル

〔義解〕 前條ニ於テ優先權ヲ有スル債權者ハ別除ノ辨償ヲ請求スルコトヲ得ヘキ旨ヲ定メリ故ニ如何ナル債權ヲ以テ優先權ヲ有スルモノトスルカ及ヒ二箇以上ノ優先權アル場合ニ於テハ如何ナル方法ヲ以テ之カ順序ヲ定ム可キカハ屢々生ス可キ問題ナリト雖モ本法ニ於テハ別ニ之ヲ定ムルコトヲ爲サス總テ之ヲ民法及ヒ特別ノ法律ニ讓レリ則チ民法トハ債權擔保編第二部又特別ノ法律トハ國稅徵收法及ヒ銀行條例ノ類ヲ謂フナリ

然レモ船舶債權ハ全ク商事ニノミ屬スルヲ以テ特ニ商法ヲ以テ之ヲ規定セサルヲ得ス故ニ此點ニ付テハ第八百四十九條ニ於テ特ニ之カ

(第九百九十八條) 別除權

順序ヲ定ムルモノアリ其他本法ニ於テ特別ニ規定スル所ノモノ(第九條及第十二條)ハ亦自ラ本條ノ例外ニ屬スルモノナリ

第九百九十九條 優先權ヲ有スル者其擔保物ノ賣拂代金ヨリ完全ナル辨償ヲ受ケサルトキハ其未済ノ債權ハ他ノ債權者ト平等ナル割合ヲ以テ財團ニ對シテ之ヲ主張スルコトヲ得

〔義解〕 本條ハ優先權ヲ有スル債權者カ若シ其擔保物ノ賣拂代金ヲ以テ皆済ヲ受クルコトヲ得サリシトキハ其殘金額ニ付テハ財團ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得ヘク且此場合ニ在テハ他ノ債權者ト共ニ平等ノ配當ヲ受クルコトヲ得ルニ過キスト云フニ在リ但本條ニ於テ注意ス可キハ該債權者カ配當ヲ受クルニ當リ其割合ヲ定ム可キ標準ハ最初ノ請求額ニ非スシテ則チ其殘額ニ依ル可キモノナルコト是ナリ故ニ千圓ノ請求ニ對シ其擔保物ヲ以テ七百圓ノ辨償ヲ受ケタルトキハ財團ニ對シテハ其殘金三百圓ノ割合ヲ以テ配當金ヲ求ムルコトヲ

得ルニ止リ敢テ千圓ノ割合ニ對スル配當金ヲ受クルコトヲ得サルモノトス是或ハ説明ヲ爲スノ必要ナキカ如シト雖モ佛獨其他ノ法律ニ於テハ明文ヲ以テ特ニ之ヲ規定スルモノアルヲ以テ聊カ爰ニ一言ヲ付スノミ

第一千條 債務者カ其支拂停止後ニ遺產ヲ取得シタルトキハ遺產債權者及ヒ受遺者ハ遺產トシテ仍ホ現存スル遺產物ヨリ又ハ未タ債務者ニ支拂ハレサル遺產ニ屬スル金錢ヨリ別除ノ辨償ヲ請求スルコトヲ得

〔字解〕 遺產債權者トハ債務者ノ死亡シタル場合ニ當リ其遺產ニ對シテ債權ヲ有スル者ヲ謂ヒ受遺者トハ或人ノ遺言ニ因リテ其者ノ財產ヲ其死亡ノ時ニ於テ取得スル者ヲ謂フ

〔義解〕 本條ハ遺產債權者及ヒ受遺者ノ權利ヲ保護ス可キ規定ニシテ此債權者ハ均ク破産者ニ對シテ債務ヲ求ムル者タルニ拘ハラズ左ノ條件ヲ具備シタル場合ニ於テハ特ニ別除ノ辨償ヲ求ムルコトヲ得ハ

キモノトスルナリ

第一 債務者カ遺産ヲ取得シタルハ支拂停止後ニ在ルコト但爰ニ  
 遺産ヲ相續シタルト云ハスシテ遺産ヲ取得シタルト云フヲ以テ  
 民法ニ謂フ所ノ遺産相續ノ場合ニ止マラス家督相續及ヒ遺贈ノ  
 場合ヲモ包含スルモノト解ス可キナリ(財産取得編第二條及ヒ第三  
 百五十條)

第二 遺産物カ遺産トシテ仍ホ現存スルコト又ハ遺産ニ屬スル金  
 錢カ未タ債務者ニ支拂ハレサルコト

夫レ遺産債權者及ヒ受遺者ハ元來遺産ニ對シテ債權ヲ有スルモノナ  
 レハ其遺産カ一旦破産者ノ有ニ歸シタルハトテ他ノ債權者即チ元來  
 其遺産ノ上ニ債權ヲ有シタルニアラスシテ債務者カ偶之レテ取得シ  
 タルカ爲メ其利ヲ享クル者ト共ニ平等ノ配當ヲ受ケサルヲ得ストス

ルハ少ク妥當ナラサルモノアリ是則チ本條ノ規定アル所以ニシテ則  
 チ其遺産カ支拂停止後ニ至リ破産者ノ有ニ歸シタル場合ニ於テ仍ホ  
 其遺産カ其儘現存スルトキ即チ之ヲ賣却セス或ハ之ヲ混淆セザルト  
 キ又金錢ニ在テハ未タ財團ニ組入レサル間ハ該遺産ヲ以テ別除ノ辨  
 償ニ充テラントテ求ムルヲ得ヘキモノトス但此遺産トシテ其儘現存  
 スルヤ否ヤ及ヒ未タ財團ニ支拂ハレサルヤ否ヤハ極メテ困難ナル問  
 題ニシテ其舉證ノ責任ハ遺産債權者及ヒ受遺者ニ於テ之ヲ負ハサル  
 ヲ得サルナリ

第一千條 破産者ノ財産ニシテ民事訴訟法ニ從ヒ強制執行ノ爲メ差押  
 フルコトヲ得サルモノハ之ヲ財團ニ加フルコトヲ得ス但債權者ニ優  
 先權ノ屬スルモノニ付テハ第九百九十七條ノ規定ニ從フ

〔義解〕 民事訴訟法ニ從ヒ強制執行ノ爲メ差押フルコトヲ得サルモノ  
 トハ同法第五百七十條及ヒ第六百十八條ニ列記スル所ノモノヲ謂フ

(第一千條) 別除權

例ハ衣服、寢具、家具又ハ法律上ノ養料ノ類ニシテ身代限規則ニ所謂抵償トシテ差押フ可ラサル物品ニ屬スルモノナリ但本條ニ於テハ民事訴訟法ニ於テ差押フルコトヲ得サルモノハ之ヲ財團ニ加フルコトヲ得ストアリテ財團ニ加フ可ラサルモノハ悉ク民事訴訟法ニ於テ差押フ可ラサルモノナリト云フニ非ス故ニ民事訴訟法ニ列記シタル以外ノモノニシテ特別ノ法律ニ依リ仍ホ之ヲ財團ニ加フ可ラサルモノアリ例ハ華族ノ世襲財産ノ如キ則チ是ナリ

本條但書ノ規定ハ民事訴訟法ニ於テ強制執行ノ爲メ差押フルコトヲ得サルモノト雖モ既ニ優先權ノ屬スル物ナルニ於テハ其債權者ニ於テ其物ノ賣拂代金ヨリ別除ノ辨濟ヲ求ムルコトヲ得ヘキノミナラス若シ其代金ノ剩餘アルトキハ之ヲ財團ニ拂込ム可シト云フニ在リ抑、本條ヲ以テ本章即チ別除權ノ部ニ置ク所以ノモノハ特ニ此但書ノ規定アルニ因ルナリ

### 第四章 保全處分

第一千二條 裁判所ハ破産宣告ト同時ニ債務者ノ財産ノ封印ヲ命ス  
會社ニ在テハ連帶無限ノ責任ヲ負ヘル總社員ノ財産ニ對シテ右ノ處分ヲ行フ

〔義解〕 財産ノ封印ヲ爲スハ之カ脱漏若クハ藏匿ヲ防クニ在リ但不動産ニ對シテハ固ヨリ封印ヲ爲スヲ要セサルノミナラス假令動産ト雖モ直チニ目錄ニ記入スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ最早脱漏ノ恐ナキヲ以テ必スシモ封印ヲ爲スコトナクシテ直チニ目錄ヲ作ルコトヲ得可シ則チ佛法ニ於テハ現ニ此ノ如キ例外ヲ定メ以テ無用ノ手數ヲ省略スルノ便ヲ與ヘリ（佛商第四百五條第二項）此他如何ナル場合ニ於テモ封印ヲ爲スコトヲ要セサルモノアリ是則チ第一千五條第二項ニ於テ列記スル所ナリ

（第一千二條）保全處分

又佛法ノ如キハ封印ヲ爲ス可キ責任者ハ則チ其財産所在地ヲ管轄スル治安裁判官トナセリ然レモ本法ニ於テハ一モ此等ノ規定ナキヲ以テ第一千十四條ニ準據シ蓋之ヲ裁判所職員執達吏若クハ警察官吏ニ委テサルヲ得サル可キナリ但此封印ハ之ヲ爲シタル人ノ誰タルヲ問ハス刑法ニ所謂官署ノ処分ニ因リテ特別ニ施シタル封印ナルヲ以テ若シ之ヲ破毀シタルハ則チ刑法ノ制裁ヲ受クサルヲ得サルモノトス

(刑法第百七十四條及第百七十五條)

舊法ニ於テ破産宣告ト共ニ破産者ノ財産ヲ封印スル外尙ホ即時拘留若クハ監守ヲ命スルヲ常トセシモ衆議院ニ於ケル特別委員會ノ意見ニ依リ遂ニ本條ノ如キ變更ヲ生シ則チ破産宣告ノ時ニ在テハ如何ナル場合ト雖モ一モ拘留ヲ命スルコトヲ得サルニ至レリ是レ蓋外國法律ニ於テモ未タ見ルコトヲ得サルノ寬典ナリト雖モ該修正ノ理由ニ

依レハ破産ハ民事上ノ出來事ナリ云々犯罪ト認ム可キ證據ナキ場合ニ於テ人身ヲ勾留スルハ普通ノ法理ニ反スルト云フニ在リテ刑事ノ被告人トナルニ非サレハ法理上勾留ヲ行フコトヲ得サルモノトスルナリ

無限責任ヲ負ヘル社員トハ合名會社ニ在テハ總社員(第百十條)合資會社

ニ在テハ業務擔當社員及ヒ有責任者ヲ除キタル他ノ社員(第百三十三條及第百四十六條)株式會社ニ在テハ或ル場合ニ於ケル取締役(第百

八條及第百九條)ヲ謂フ

[論說] 既ニ說明セシ如ク本條ノ修正ニ依リ破産者ハ犯罪ノ證據アル

ニ非サレハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ勾留スルコトヲ得サルニ至レリ是蓋勾留ヲ以テ刑罰トナシ所謂保全處分即チ取締法タルヲ解セサルニ因ルナリ今之ヲ各國ノ法律ニ參照スルニ英ニ在テハ破産法第二

(第百二條) 保全處分

十五條佛ニ在テハ商法第四百五十五條獨ニ在テハ破産法第九十八條  
 其他白國商法第四百六十七條和國商法第七百八十九條西國商法第千  
 四十四條ノ如キ多少寬嚴ノ差アリト雖モ何レモ該勾留ノ規定ヲ設ケ  
 サルハナシ殊ニ英、白及ヒ獨ノ法律ハ最モ近代ノ創設ニ係ルモノナル  
 ナ以テ若シ此勾留ヲ不當ナリトスルニ於テハ當時必スヤ之ヲ改正シ  
 タルナル可シ然ルニ曾テ此改正ナキノミナラス現ニ此勾留ヲ實行セ  
 ルハ余カ在歐中屢目撃セシ所ナリキ但伯林府ノ如キハ監獄内別ニ一  
 室ヲ設ケ其待遇ニ於ケルモ全ク之ヲ普通ノ囚人ト別異シ概シテ之ヲ  
 論スレハ該勾留者ニ在テハ唯其外出ヲ禁セラル、等ノ不便アルニ過  
 キスト云フ可シ要スルニ此勾留ノ目的タルヤ則チ取締方法ノ一種ニ  
 シテ而シテ此ノ如キ取締ヲ必要トスル所以ノモノハ苟モ破産ノ宣告  
 チ受クルニ至リタル者ハ其全軀ニ付キ之ヲ論スレハ既ニ信用ヲ喪失

シタルモノニシテ則チ之ヲ不正ナル人ト推測セサルヲ得ス故ニ今之  
 ナ勾留スルニ於テハ一ハ以テ重罪又ハ輕罪ニ付キ直ニ起訴スルコト  
 ナ得ルノ利益アリ一ハ以テ總債權者ノ損害ヲ豫防スルコトヲ得ルノ  
 利益アルニ因ルナリ夫レ文明ヲ以テ公認セラレタル諸外國ノ法律ハ  
 盡ク此勾留ヲ是認セルノミナラス實際ノ必要アル亦世人ノ疑ハサル  
 所ナル可シ然ルニ我帝國議會ハ此勾留ヲ認メテ法理ニ反スルモノト  
 シ故サラニ本條ヲ變更シ以テ偏ニ破産者ヲ利益スルニ至レリ嗚呼法  
 理々々何人カ能ク真正ノ法理ヲ解ス

第千三條 破産者ハ裁判所ノ許可ヲ受クルニ非サレハ其住地ヲ離ルルコトヲ得  
 又裁判所ハ何時ニテモ債務者ノ引致ヲ命スルコトヲ得  
 破産者ハ裁判所ノ許可ヲ受クルニ非サレハ其住地ヲ離ルルコトヲ得  
 又裁判所ハ何時ニテモ債務者ノ引致ヲ命スルコトヲ得

(第千三條) 保全處分

〔義解〕 監守ニ付テハ商法施行條例第四十五條及ヒ第四十八條ニ於テ之カ手續ヲ定メ則チ監守ヲ命シタルトキハ裁判所ハ警察官吏ヲシテ債務者ノ住所ニ就キ其逃走若クハ財産ノ隠匿ヲ豫防シ且破産主任官ノ許可ヲ得タルトキノ外ハ外人ト面接若クハ通信ヲ爲スコトヲ禁スルモノトス

會社ノ實權ヲ有スル者ハ業務擔當ノ任アル社員又ハ取締役ナリ故ニ會社ノ破産シタル場合ニ在テ保全處分ノ必要ナルトキハ蓋之ヲ此者等ニ對シテ行ハサルヲ得サルナリ是則チ本條第二項ノ規定アル所以ニシテ果シテ之ヲ實施スルヲ得ルニ至テハ或ハ以テ會社ノ通弊ヲ矯正スルニ足ル可シ

破産者ヲシテ其住地ヲ離レシムルコトヲ許サ、ル所以ハ或ハ財産ノ取調ニ立會ヒ或ハ貸方借方ノ始末ヲ説明シ其他第千十二條第二項及

ヒ第千二十二條ノ如キ破産手續施行中破産者自身ノ出席ヲ要スル場合アルニ因ルナリ

債務者ヲ引致スル手續ハ商法施行條例第四十九條ニ於テ之ヲ規定ス之ヲ約スルニ刑事被告人ヲ拘引スル手續ニ異ナルコトナキナリ

第千四條 管財人カ破産者ノ財産ヲ財産目錄ニ載セ且之ヲ占有シタルトキ又ハ監守ノ事由最早存セサルトキハ裁判所ハ其決定ヲ以テ破産者ヲ釋放ス可シ然レトモ破産者ヲシテ裁判所又ハ管財人ノ呼出ニ應ジ何時ニテモ出頭ス可キ爲メノ擔保ヲ供スル義務ヲ負ハシムルコトヲ得

取上ケタル擔保ハ之ヲ財團ニ歸セシム

〔義解〕 債務者ヲ釋放スル手續ハ商法施行條例第五十條ニ於テ之ヲ規定シ則チ檢事ヲシテ其命令ヲ施行セシム可キ筈ナリ然レモ此規定タルヤ本條改正後ノ今日ニ在テハ蓋之ヲ遵奉ス可キモノニ非サル可シ何トナレハ舊法ニ於テハ即時勾留ヲ爲スコトヲ許シタルニ付其勾留

(第千四條) 保全處分



者ヲ釋放ス可キ場合ヲ豫想シ以テ該規定ヲ設ケタルモノナル可シト雖モ今ヤ單ニ監守ヲ命スルコトヲ得ルニ過キス而シテ監守ヲ命シタルキハ一モ檢事ノ關涉スルコトナク裁判所ヨリ直ニ警察官吏ニ命令ス可キ規定(商法施行條例第四十八條)ナルカ故ニ其釋放ノ場合ニ至リ故ヲニ檢事ヲ煩ハスノ必要ナキヲ以テナリ

擔保ヲ供セシムル手續ハ別ニ之ヲ規定セスト雖モ民事訴訟法ニ於ケル保證金納付ノ手續ニ從ヒ或ハ現金ヲ供託所ニ供託シ或ハ公債證書其他身許確ナル保證人ノ證書ヲ以テスルヲ得ヘシ(民事訴訟法第八十七條)破産者ノ財産ハ總テ破産財團ニ屬スルカ故ニ破産者自己ノ財産ヲ以テ本條ノ擔保ニ充ツルコトヲ得ス故ニ該擔保ハ其親戚其他他人ノ支出ニ係リタルモノヲラサルヲ得ス然レトモ若シ破産者カ呼出ヲ受ケタルニ當リ故ナク出頭セサルニ於テハ何人ノ提供ニ係ルヲ問ハス直

チニ其擔保ヲ取上ケ之ヲ財團ニ歸セシメ以テ一般債權者ニ配當ス可キモノトス但此取上ヲ爲スハ破産裁判所ノ決定ニ依ル可キモノニシテ之カ呼出ヲ爲シタル破産管財人ハ勿論破産主任官ト雖モ自ラ此ノ如キ處分ヲ爲スコトヲ得サルモノトス

第一千五條 管財人カ債務者ノ財産ヲ財産目錄ニ載セ且之ヲ占有シタルトキハ直チニ其封印ヲ解ク可シ

第一千一條ニ依リ財團ニ加フルコトヲ得サル物及ヒ財團ノ爲メニスル即時ノ換價又ハ繼續利用ヲ封印ノ爲メ妨ケラレル物ニハ封印ヲ爲サルコトヲ得此等ノ物ハ直チニ財産目錄ニ載セ管財人ノ占有スルコトヲ要ス

債務者ノ商業帳簿ハ即時之ヲ管財人ニ交付シ且其帳簿ノ現状ハ破産主任官之ヲ認證ス  
特ニ高價ナル物ハ即時之ヲ管財人ニ交付シ又ハ一時之ヲ裁判所ニ引取ルコトヲ得

〔義解〕 第一千二條ニ於テハ破産者ノ動産ニ對シテ封印ヲ施ス可キ規定ヲ掲ケ而シテ本條ニ於テハ之カ封印ヲ解ク可キ場合及ヒ最初ヨリ之

(第一千五條) 保全處分

ヲ施スユトテ要セサル場合ヲ定メタルモノナリ  
 封印ヲ解ク可キ場合ハ則チ其封印セラレタル財産ヲ悉ク財産目録ニ  
 載セ及ヒ之ヲ管財人ノ占有ニ歸シタルトキニ在リ而シテ假令一旦封  
 印ヲ解キタルトキト雖モ未タ之ヲ財産目録ニ登載シ了ラヌシテ之ヲ  
 取調ヲ延引スル場合ニ在テハ更ニ封印ヲ施コサ、ルヲ得サルモノト  
 ス例ヘハ倉庫ノ戸前ニ施シタル封印ヲ解キ其中ノ物品ヲ財産目録ニ  
 記載スルニ當リ一日ニテ之ヲ終アルコト能ハスシテ之ヲ翌日ニ延ハ  
 ストキハ再ヒ倉庫ヲ封印セサルヲ得サル類ノ如シ但財産目録ヲ作ル  
 者ノ誰タルヤ及ヒ之ヲ作ル可キ方法ノ如何ハ第千十四條ニ於テ之ヲ  
 規定ス

又封印ヲ解キタルモノトスト云ハスシテ封印ヲ解ク可シト云ヒ以テ  
 之ヲ命令法トナシタル所以ハ抑、封印ヲ施ス可キ任アル者ハ第千二條

ニ於テ辯明セシ如ク裁判所役員又ハ其地ノ警察官吏タル可ク而シテ  
 財産目録ヲ作ル場合ニハ必ス裁判所役員又ハ警察官吏ノ立會アルヲ  
 以テ取モ直サス之カ封印ヲ施シタル者ニ對シ更ニ之ヲ解ク可キコト  
 ヲ命令スルニ外ナラサルナリ

「財團ノ爲メニスル即時ノ換價」トハ腐敗シ易キ物品若クハ代價下落ノ  
 恐アル物品ハ速ニ之ヲ賣却スルニ非サレハ忽チ財團ノ損害トナルヲ  
 免レサルヲ以テ此ノ如キ物品ハ他ノ財産ト別異シ即時ニ之ヲ代價ニ  
 換フルヲ謂フナリ

繼續利用ヲ封印ノ爲メニ妨ケラル、物トハ破産者ノ營業ヲ繼續スル  
 爲メ必要ナル物件(第九百九十六條)ヲ謂フ但「財團ノ爲メニスル」トノ一  
 句ハ繼續利用云々ノ句ニ冠スルヲ以テ其營業ヲ繼續スルハ果シテ財  
 團ノ爲メ利益アル場合ニ限ルモノトス

商業帳簿ハ破産者ノ貸方借方其他一切ノ取引ヲ知ルニ付キ最モ必要  
 ノモノナルヲ以テ該帳簿ハ別ニ封印ヲ爲サスシテ之ヲ取上ケ破産主  
 任官ハ各帳簿ノ現狀ヲ檢閲シ若シ其破損若クハ脱落等ノ實跡アルニ  
 於テハ其旨ヲ記載シ及ヒ如何ナル場合ニ於テモ各帳簿ノ末尾ニ閉鎖  
 ノ旨ヲ記シ之ニ認印シ以テ後日ノ記入ヲ防キ而シテ即時ニ之ヲ管財  
 人ニ交付ス可キモノトス

金銀珠玉ノ如キ高價ナル物品ニ至テハ假令封印ヲ施スト雖モ尙ホ其  
 保全ヲ期シ難キ場合アリ何トナレハ封印ヲ破毀シ及ヒ之ヲ竊取シタ  
 ルトキハ之ニ對シ刑法ノ制裁ヲ加フル勿論ナルモ既ニ破産ノ宣告ヲ  
 受タル者ノ如キハ利慾ノ爲メ往々刑罰ヲ受クルコトヲ甘ニスル者ナ  
 キニ非サルヲ以テナリ故ニ此ノ如キ恐アル場合ニ在テハ亦別ニ封印  
 ヲ爲スコトナク即時ニ之ヲ管財人ニ交付シ又ハ一時之ヲ裁判所ニ引

取ルコトヲ得ヘキモノトス

之ヲ要スルニ本條ニ於テ最初ヨリ封印ヲ施コサ、ルコトヲ得ヘキモ  
 ノハ則チ次ノ五種ニ過キス第一ハ第一千一條ニ依リ財團ニ加フルコト  
 ヲ得サル物第二ハ財團ノ爲メニスル即時換價ヲ封印ノ爲メ妨ケラル  
 、物第三ハ財團ノ爲メニスル繼續利用ヲ封印ノ爲メ妨ケラル、物第  
 四ハ商業帳簿第五ハ特ニ高價ナル物はナリ但封印ヲ施コサ、ルコト  
 ヲ得ヘキ物ト雖モ財産目錄ニハ必ス之ヲ登載セサル可ラス是則チ第  
 千十四條ニ於テ特ニ規定スル所ナリ

第一千六條 破産者ニ對シテ債務ヲ負ヒ又ハ財團ニ屬スル物ヲ占有スル  
 者ハ其支拂又ハ交付ヲ管財人ニノミ爲スコキコトヲ拂渡差押ノ命令  
 ナ以テ催告セラレタルモノトス  
 別除權ヲ行ハント欲スル者ハ其旨ヲ管財人ニ申出ツ可シ若シ管財人  
 ヨリ其物ノ評價ヲ爲サンコトヲ求ムルトキハ之ヲ承諾スルコトヲ要  
 ス

(第一千六條) 保全處分

債務者ニ宛テタル電信、書狀其他ノ送達物ハ之ヲ管財人ニ交付ス可シ其管財人ハ開封ノ權ヲ有ス然レトモ其旨趣カ財團ニ關係ナキトキハ管財人ヨリ債務者ニ引渡スコトヲ要ス  
破産裁判所ハ此カ爲メ郵便局、電信局其他ノ運送取扱所ニ必要ナル命令ヲ發ス可シ

〔義解〕 破産者ノ動産ニ封印ヲ施シ及ヒ財産目錄ヲ調製スルニ於テハ以テ破産者ノ占有ニ屬スル財産ヲ保全スルニ足ル可シ然レトモ既ニ他人ノ占有ニ屬スル物件ニ付テハ別ニ之ヲ保全スルノ方法ナキヲ得ス是則チ本條第一項ノ規定アル所以ナリ抑、破産決定書ニハ破産者ノ債務者又ハ財團ニ屬スル物ノ占有者ニ對スル拂渡差押ノ命令ヲ包含スルモノナレハ（第九百八十條第四號）此決定ニ依リ該債務者ハ既ニ拂渡差押ノ命令ヲ受ケタルモノナリト雖モ唯、其差押ヲ爲シタルノミニテ現物ハ依然該債務者ノ手ニ存在スルヲ以テ未タ之ヲ安全ナル處分トスルヲ得ス故ニ拂渡差押ノ命令ヲ以テ催告セラレタルモノトストノ規定ヲ

設ク此命令ニ依リ各占有者ハ破産管財人ニ對シテ遅延ナク支拂ヲ爲ス可キ義務ヲ負フタルモノトナシ各物件ヲシテ盡ク破産管財人ノ管理ニ歸セシメノコトヲ要セリ  
破産宣告後即チ拂渡差押ノ命令アリタル後破産者ニ對シテ直接ニ爲シタル支拂ハ當然無効トナルコトハ第九百八十五條ニ於テ既ニ規定スル所ナルヲ以テ本條ニ於テハ固ヨリ之ヲ複説スルヲ爲サス則チ本條第一項ノ旨趣ハ各占有者ハ管財人ニ對シテ支拂ヲ爲ス可シトノ催告ヲ受ケタルモノナルヲ以テ若シ此催告ニ應セス之カ爲メ財團ニ損害ヲ生セシメタル場合ニ在テハ該占有者ニ於テ之カ責任ヲ負ハサルヲ得スト云フニ在リ故ニ拂渡差押ノ命令アリタルトキハ債務者ハ之カ爲メ當然遲滞ニ付セラレタルモノトナルナリ（民法第三百三十五條）  
別除ノ辨償ヲ請求スルヲ得ヘキ權アル者（第九百九條）ハ則チ其擔保物ノ

（第九百九條） 保全處分

賣拂代金ヲ以テ自己ノ債權ニ充ツルコトヲ得ヘシト雖モ破産管財人ハ破産財團中ヨリ該債權ヲ辨濟シ以テ之カ擔保物ヲ受戻ス可キ權利アルカ故ニ本條第二項ニ於テハ此ノ如キ債權ヲ有スル者ハ先以テ其旨ヲ管財人ニ届出ツルノ義務アルモノトシ以テ管財人カ該權利ヲ行フノ便ニ供セリ殊ニ擔保物ノ評價ヲ爲サノコトヲ求ムルヲ得セシムル所以ハ破産管財人ヲシテ其受戻ヲ爲スハ果シテ利益ナルヤ否ヤヲ判定セシムルノ必要アルニ因ルナリ

本條第三項及ヒ第四項ハ亦是財産保全ニ付キ必要ナル手續ニシテ特ニ注意ス可キハ假令嫌疑ノ存セサル破産者ニ關スル場合タリトモ總テ此手續ヲ履行セサルヲ得サルモノタルコト是ナリ故ニ之ヲ獨法其他ノ法律ニ照セハ少ク寬嚴ヲ異ニスルモノアルカ如シ則チ獨法ニ於テハ破産者ノ申立ニ依リ特ニ此手續ヲ廢止シ又ハ之ヲ制限スルノ便

ヲ設ケ且同法及ヒ佛法等ノ如キハ破産者カ現在スルトキハ其開封ニ立會ハシム可キモノトセリ

〔論說〕 信書ノ祕密ヲ貴重セサル可カラサルハ既ニ憲法(第二十)ノ規定スル所ナリト雖モ此憲法ノ規定タル法律ニ定メタル場合ヲ除ク外云々トアリテ未ダ曾テ絕對的ノ原則トスルニ非ラス則チ本條ノ如キハ所謂法律ニ定メタル場合ノ一ニ屬スルモノナリ夫レ憲法ニ於テ信書ノ祕密ヲ犯ス可カラスト定メタル精神ハ政府及ヒ官吏ノ擅恣ニ對シ臣民ノ爲メニ一ン保障ヲ設クルノ外他ニ目的トスル所ナク而シテ人民相互ノ關係ニ屬スル事項ニ付テハ蓋之ヲ規定スルノ意ニ非サルナリ今テ距ルコト數年前白國ノ國會ニ於テハ同國商法第四百七十八條(即チ本條ト同旨趣ナル規定)ヲ以テ其憲法第二十二條ニ牴觸スルモノトナシ痛ク抗擊ヲ試ミタルコトアリト雖モ多數議員ハ該規定ヲ以テ

必要ナルモノト認メ右ニ謂フ所ノ理由ニ依リテ遂ニ其發議ヲ排斥スルニ至レリ爾後同國學說ニ於テモ亦此議決ヲ是認セルモノ、如シト云フ但白國ニ於テ此ノ如キ議論ヲ生シタルハ同國ノ憲法ニ於テハ我憲法ノ如キ法律云々ノ例外ナキニ因ルモノナリト雖モ抑此議決ハ或ハ以テ本條ヲ設クルノ必要ナルヲ證スルニ足ル可シ

第七條 破産主任官ハ破産者及ヒ其家族ニ財團ヨリ給養ノ扶助料ヲ與フルコトヲ得

〔義解〕 本條ハ破産者ニ於テ自ラ營利ノ業ヲ行フコト能ハス及ヒ他ヨリ扶助ヲ受クルコト能ハサル場合ニ於テ破産者及ヒ其家族ノ生活ヲ保タシムルノ方法タルニ過キス故ニ其給スル所ノモノハ生活上最モ必需ニシテ萬缺ク可ラサルモノ、外ニ出ルコトヲ得サルノミナラス之ヲ與フルト否トテ決スルハ全ク破産主任官ノ權内ニ屬スルモノトス然レモ之ヲ與フルト否トニ關スル命令ニ對シテハ勿論其給與額ノ

多少ニ關スル命令ニ對シテモ第九百八十三條ニ從ヒ破産裁判所ニ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

佛法(佛商第四百七十四條)ニ依レハ扶助料給與ノ申立ヲ爲ス可キ者ヲ破産管財人トナセリ然レモ本法ニ於テハ別ニ其指定ナキカ故ニ蓋破産者之ヲ申立管財人ハ單ニ意見ヲ述フルコトヲ得ルニ止マル可キナリ

### 第五章 財團ノ管理及ヒ換價

第八條 各裁判所管轄區ニハ職務上義務ヲ負フ可キ破産管財人ノ名簿ヲ備置キ破産裁判所ハ各箇ノ場合ニ於テ其名簿中ヨリ管財人ヲ選定ス

〔義解〕 財團ノ管理及ヒ換價ハ主トシテ破産管財人ノ行フ可キ職務ニ屬スルヲ以テ本條ニ於テハ先ツ破産管財人ヲ選定ス可キ方法ノ大要ヲ規定ス則チ破産管財人ハ破産裁判所ニ於テ豫メ備ヘ置ク所ノ名簿中ヨリ一事件毎ニ之ヲ選擇ス可キモノトスルナリ但其員數ハ事件ノ

(第八條) 財團ノ管理及ヒ換價

難易ニ從ヒ或ハ之ヲ一名トシ又ハ之ヲ數名トナス等一ニ裁判所ノ所見ニ任ス可キモノトス

各裁判所管轄區トハ各地方裁判所ノ管轄内ヲ謂ヒ職務上義務ヲ負フ可キトハ破産管財人タル可キ任命ヲ受ケタル者ハ正當ノ理由アルニ非サレハ其任命ヲ辭スルコトヲ得サルノミナラス已ニ任命セラレタル破産管財人ハ亦正當ノ理由アルニ非サレハ其職務ヲ行フヲ拒ムコトヲ得サルモノニシテ則チ職務トシテ其任ヲ負ハサルヲ得サルヲ謂フナリ(商法施行條例第三十六條第三十八條及ヒ第四十四條)破産管財人ノ名簿ヲ作ルニ付テハ先ツ其破産管財人タル可キ者ヲ任命セサル可ラス而シテ此任命ヲ爲スハ司法大臣ノ職權ニ屬シ則チ司法大臣ハ各地方裁判所ノ意見ヲ聽キ其需用ニ應シテ之ヲ任命ス可キモノトス但其任期ハ三ヶ年ニシテ更ニ再選セラレ、コトヲ妨ケサル

ナリ(商法施行條例第三十七條及ヒ第五條)

右ノ外破産管財人ニ關スル細則ハ商法施行條例第三十九條以下ニ於テ別ニ之ヲ規定ス

〔論說〕 破産管財人ハ如何ナル人ニ付キ之ヲ選定ス可キカ是蓋商法實施ト共ニ忽チ生ス可キ問題ナル可シ若シ夫レ選定其當ヲ得サルコトアルニ於テハ其害ノ恐ル可キ或ハ更ニ執達吏ヨリモ甚シキニ至ラン佛國ノ如キハ大ニ之カ弊害ニ鑑ミル所アリ遂ニ其法律ヲ變更シ之カ精神ヲシテ前後全ク相背反スルニ至ラシメタリ則チ最初ノ法律ニ於テハ破産管財人ノ職務ヲシテ一ノ職業トナスコトヲ欲セサリシ何トナレハ若シ之ヲ職業トスルニ於テハ其職務ヲ行フニ際シ或ハ不正ノ意ヲ挿ムノ恐ナキヲ得サレハナリ故ニ何人ト雖モ債權者中ノ一人ニ非サル上ハ一年以内ニ再度破産管財人トナルコトヲ得サルノミナラ

(第一千八條) 財團ノ管理及ヒ換價

ス成ル可ク破産管財人ハ債権者中ヨリ之ヲ選任セシメテ期望シ而シテ  
 此場合ニ於テハ破産管財人ハ一モ報酬ヲ受クルコトヲ得サルモノナ  
 リシ然ルニ債権者ハ必スシモ破産管財人ノ職務ヲ熟知スル者ニ非ス  
 故ニ善ク其職ヲ盡スコト能ハサルノミナラス報酬ヲクシテ其職ニ從  
 事セシムルモノナレハ常ニ自ラ其職ヲ忽ニシ而シテ之ヲ監督ス可キ方  
 法ニ至テハ一モ之ヲ設クルコトヲ得サルノ不都合アルニ至レリ是ヲ以  
 テ千八百三十八年ノ法律ニ依リ全ク其主義ヲ變更シ破産管財人ハ債  
 権者以外ノ者ヨリ之ヲ選任スルコトヲ得且常ニ謝金ヲ受クルコトヲ  
 得ヘキモノトナセリ故ニ現今ニ在テハ各商事裁判所内破産管財人ヲ  
 常職トスル者アリテ其報酬ノ如キモ該裁判所長ノ認可ヲ受ケ豫メ之  
 ヲ一定スルノ慣習トナレリ抑本條ノ精神タルヤ全ク右ノ新法ニ異ナ  
 ラスト雖モ最初一二年ノ間ニ在テハ固ヨリ此職務ヲ熟知スル者ナキ

ヲ以テ余ノ見ル所ニ依レハ或ハ代言人若クハ公證人中廉直ニシテ且  
 成ル可ク計算事務ニ練熟スル者ヲ以テ之ニ充テサルヲ得サル可キナ  
 リ而シテ其給與ス可キ報酬ニ至テハ商法施行條例中僅ニ之カ大綱ヲ示  
 スニ過キス故ニ苟モ其局ニ當ル者宜ク之ヲ斟酌シ以テ豫メ弊害ヲ防  
 カサル可ラサルナリ

第千九條 管財人ノ勤勞ニ對スル報酬ハ財團ヨリ第一ニ之ヲ支拂ヒ其  
 額ハ破産裁判所之ヲ定ム

〔義解〕 本條ノ規定ハ破産管財人ノ受ク可キ報酬ヲ以テ之ヲ裁判費用  
 ト同視スルニ出ツルモノナリ加之破産管財人ナル職務ハ則チ代理人  
 ト同一ナルヲ以テ民法ニ所謂代理人ハ代理ニ依リテ所持シ且債権者  
 ト爲レル原因タル物ノ上ニ留置權ヲ有ス（民法第二百四十八條）トアル規定  
 ニ照スモ亦以テ優先權ヲ與ヘサルヲ得サル可キナリ  
 第一ニ之ヲ支拂ヒナル文字ニ依ルキハ破産管財人ハ第一ニ報酬ノ全

（第千九條）財團ノ管理及ヒ換價



額ヲ受取ルコトヲ得ルカ如シト雖モ是唯優先權ヲ與フルトノ意義ニシテ其支拂ノ割合ハ下ニ謂フ如ク財團ノ配當アル毎ニ其步割ヲ以テスルニ過キサルナリ

裁判所カ管財人ノ報酬額ヲ定ムルニハ或ハ一破産手續ノ全體ニ付キ又ハ收入シタル價額ノ割合ニ應ス可ク且財團ノ配當アル毎ニ其步割ヲ以テ之ヲ支拂フ可キモノトス例ヘハ一件ニ付キ最初ヨリ若干圓ト定メ又ハ財團ノ價額一萬圓以上ナルトキハ一分トシ五千圓以上ナルトキハ一分五厘トスル類ノ如シ(商法施行條例第四十三條)之ヲ要スルニ其金高ヲ定ムルニハ破産管財人ノ爲シタル事業ト其職務ヲ行フニ付テノ勉勵ト其得タル所ノ結果トヲ斟酌スルハ蓋最モ緊要ノ事タル可キナリ

第一千條 裁判所ハ何時ニテモ管財人ヲ易ヘ又ハ他ノ管財人ヲ加フルコトヲ得

〔義解〕 破産事件ノ種類ニ從ヒ或ハ繁雜ナルモノアリ或ハ簡易ナルモノ

ノアリ又最初ハ繁雜ナル可キ見込ナリシモ案外簡易ナルモノアル可ク之ニ反シ最初簡易ナル可キ見込ナリシモ後ニ至リテ繁雜タルコトヲ發見スルコトアル可シ此場合ニ當リ能ク其事務ヲ調理シ以テ其宜シキヲ得セシメントスルニ付テハ或ハ最初ニ命シタル管財人ヲ易ヘ又ハ他ノ管財人ヲ加フル等便宜之ヲ處分スルノ職權ヲキテ得ス殊ニ管財人ノ職務執行ノ不當又ハ不正ナルコトアルニ於テハ直チニ之ヲ解任セサルヲ得ス是則チ本條ノ規定アル所以ナリ

管財人ノ職務執行ノ不當又ハ不正ノ爲メ其職ヲ解クトキハ破産裁判所ノ公庭ニ於テ其理由ヲ付シテ之ヲ言渡ス可キモノトス(商法施行條例第四十二條)是一ハ破産裁判所カ爲ス所ノ處置ノ公平ナルヲ擔保シ一ハ此ノ如キ管財人ヲシテ自ラ恥ツル所アルヲ知ラシムルニ在ルナリ

破産者ノ親族ハ破産管財人トナルコトヲ得ストハ佛國主義ノ法律ニ

於テハ明ニ之ヲ規定スル所ナリ本法ニ於テハ絶テ此ノ如キ規定ナシト雖モ破産管財人ヲシテ正實ヲ保タシメント欲セハ實際上蓋此旨趣ヲ採用スルノ價直アル可シ故ニ最初ヨリ親族ノ關係アルヲ知リタル者ハ之ヲ任命スルコトナク又後ニ至リテ之ヲ知リタル者ハ則チ本條ニ依リ之ヲ處分スルヲ穩當ナリトス

第一千十一條 管財人ハ其行爲ニ付テハ代理人ト同一ノ責任ヲ負フ若シ管財人二人以上アルトキハ共同ニ非サレハ行爲ヲ爲スコトヲ得ス但破産主任官カ或ル行爲ニ付キ各箇ニ特別ノ委任ヲ與ヘタルトキハ此限ニ在ラス

〔義解〕 代理人ト同一ノ責任トハ本條第三百四十一條ニ所謂代理人ハ委任ヲ行フ際至重ノ注意ヲ爲ス義務アリ及ヒ民法財産取得編第二百三十九條ニ所謂代理人ハ委任事件ヲ成就セシムルコトニ付テハ善良ナル管理人タル注意ヲ爲ス責ニ任スト云フカ如キ責任ヲ始メ其他本

法ニ於テハ第三百四十一條以下民法ニ在テハ財産取得編第二百三十七條以下ニ規定スル所ノモノヲ謂フナリ

管財人二人以上ヲ命シタルトキハ各自別々ニ事務ヲ分擔ス可キモノニ非スシテ共同シテ之ヲ行フヲ通例ナリトス故ニ管財人ノ名ヲ以テスル所爲ニ付テハ其總員ノ署名アルニ非サレハ之ヲ有効トスルヲ得ス且此規定ノ結果ヨリシテ各管財人ハ第三者ニ對シテ常ニ連帶ノ責任ヲ負フ可キモノトナスナリ

然レモ破産主任者ハ其見込ニ依リ各管財人ヲシテ事務ヲ分擔セシムルノ權アリ例ヘハ債權ノ取立ハ甲管財人ニ委テ財團ノ賣却ハ乙管財人ニ任スルコトヲ得ルカ如シ之ヲ要スルニ本條ニ於テハ特別ノ委任アルニ非サレハ破産管財人ハ各自別箇ニ事務ヲ取扱フコトヲ得スト云フニ在リテ其定義タル恰モ佛法ト同一ニシテ而シテ全ク獨法(獨破産法第七十一條)

ニ反スルモノナリ

第一千二百條 管財人ハ破産宣告後即時ニ財團ヲ占有シ且其管理及ヒ換價ニ著手スルコトヲ要ス

管財人ハ其職務ノ爲メ破産者ノ補助ヲ求ムルコトヲ得破産主任官ハ此カ爲メ破産者ニ報酬ヲ與フルコトヲ得

〔義解〕 本條ニ付テハ別ニ説明ヲ要スルモノナク唯其注意ス可キハ「即時」ノ三字ニシテ破産管財人カ其職務ニ著手スル期限ヲ定ムルニ付キ或ル國ノ法律ノ如ク日數ヲ以テセサルノ點是ナリ故ニ管財人ニ於テ若シ本條ノ處分ヲ遅延シタルカ爲メ財團ノ損害ヲ生シタル場合ニ於テハ自ラ之カ責任ヲ負ハサルヲ得サルモノナリ例ヘハ換價トハ手形ヲ現金ニ換フルコトヲモ包含スルコト勿論ナルヲ以テ若シ其手形ノ支拂期日カ破産宣告後餘日ナカリシ場合ト雖モ既ニ之ヲ占有セシ上ハ其支拂期日ニ於テ其支拂ヲ請求セサルヲ得ス故ニ之ヲ怠リタル

カ爲メ償還請求權ヲ失フタル場合ニ於テハ自ラ之カ責任ヲ負ハサルヲ得サルカ如シ

破産者ニ報酬ヲ與フルト否トハ全ク破産主任官ノ權内ニ屬スト雖モ既ニ之ヲ與フルコトニ決定シタル上ハ其金額ハ則チ破産手續上ノ費用ニ屬スルカ故ニ第一千三百二十二條ニ從ヒ破産者ニ於テ之ヲ先取スルノ特權ヲ有スルモノトナルナリ

〔論說〕 破産者ニ報酬ヲ與フルコトヲ得ルトノ規定ハ屢非難ヲ被フリタル所ニシテ之ヲ削除ス可シトノ議論ハ頗ル勢力ヲ有シタルコトアリキ而シテ其理由トスル所ハ自己ノ破産シタルカ爲メ其破産手續ニ執務シタリトテ特ニ報酬ヲ與フルハ條理上極メテ不都合ナリト云フニ在リ(東京商法會議所調査法及ヒ商法施行條例修正案第九十七條)然レモ既ニ破産シタル上ハ其財産ハ擧テ之ヲ管財人ノ處分ニ委テ破産者ニ在テハ絶テ自ラ關係ヲ

有セス則チ破産手續ノ履行ハ全ク破産管財人ノ職務ニシテ破産者ハ特ニ破産管財人ノ請求アルニ依リ始メテ該職務ヲ補助ス可キモノナルヲ以テ之カ爲メ當然相當ノ報酬ヲ受ク可キ筋合ナレハ法律上反對ノ規定ヲ設ケサル以上ハ普通ノ道理ニ基キ如何ナル場合ニ於テモ破産者ハ報酬ヲ受ク可キ權利アリト謂ハサルヲ得ス是蓋該規定ノ幸ニ削除ヲ免ンタル所以ナル可シ則チ該規定ハ報酬ヲ與フルコトヲ得ト云フニ在レハ與フルモ與ヘサルモ全ク破産主任官ノ職權ニ屬スルモノナルカ故ニ該規定ヲ削除スルヨリモ寧ロ之ヲ留存スルコト却テ論者ノ意思ヲ達スルニ近シト謂フ可シ況ンヤ長時間無報酬ニテ破産者ヲ使用スルニ於テハ或ハ破産者ヲシテ生計ヲ立ツルノ道ナキニ至ラシムルオヤ又況ヤ報酬ヲ與フルニ非サレハ破産者ニ於テ請求ニ應ゼサル可キ場合ナキニ非サルオヤ

第一千三條 管財人ハ破産主任官ノ監督ヲ受ケ且其指揮ニ從フ義務アリ若シ管財人ノ行爲又ハ決斷ニ對シテ異議ヲ述フル者アルトキハ破産主任官命令ヲ以テ之ヲ決ス此命令ニ對シテハ破産裁判所ニ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

〔義解〕 破産管財人ハ破産裁判所ノ委任ニ依リテ其職務ヲ行フモノナリ而シテ破産主任官ハ則チ破産裁判所ヲ代表スルモノナレハ破産管財人ハ常ニ破産主任官ノ指揮監督ニ從ハサルヲ得ス是蓋本條ノ規定アル所以ナリ但或ル國ノ法律ニ於テハ管財人ハ併テ債權者總代ノ指揮監督ヲ受ケサルヲ得サルモノトナシ少シク本條ト其趣ヲ異ニスルモノアリ是他ナシ彼ニ在テハ破産管財人ヲ選定スルハ債權者總會ニ於テス可キモノニシテ本條ノ如ク之ヲ裁判所ノ任命ニ委スルモノニ非サルカ故ナリ

又破産主任官ニ於テ破産管財人ヲ監督スル等ノ職權ナキヲ得サル所

以ノモノハ第九百八十三條ニ於テ破産主任官ハ總テノ破産手續ヲ指揮シ及ヒ監督スルコトヲ要ストアルヲ以テ今ヤ破産主任官ヲシテ之カ責任ヲ盡サシメントセハ當然此等ノ職權ヲ付與セサルヲ得サルニ因ルナリ

破産管財人ノ行爲又ハ決斷ニ對シテ異議アル者ハ先以テ破産主任官ノ裁決ヲ受ク可ク此裁決ニ對シ異議アル者ニ限り抗告ヲ以テ破産裁判所ノ裁決ヲ受クルコトヲ得ヘキモノトス但此抗告ハ異議ノ申立人ハ勿論其對手人タル破産管財人ヨリモ亦之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

第千十四條 財産目録ハ裁判所職員又ハ其地警察官吏ノ立會ヲ以テ管財人ノ手作り若シ必要アルトキハ破産者ヲモ立會ハシム  
破産者ニ屬スル總テノ財産ハ財團ニ組入ル可カラサルモノト雖モ其價額ヲ明示シテ之ヲ財産目録ニ記入スルコトヲ要ス必要ナル場合ニ

在テハ其價額ハ鑑定人ナシテ之ヲ鑑定セシム

財産目録及ヒ之ニ關スル調書ノ認證アル際本ハ公衆ノ展閱ニ供スル

爲メ裁判所ニ之ヲ備フ

檢事ハ其見込ニ因リ職權ヲ以テ財産目録ノ作成ニ立會フコトヲ得

(義解) 本條ハ財産目録ヲ作ルニ付テノ手續ヲ規定シタルモノナリ而シテ裁判所役員又ハ警察官吏ノ立會ヲ必要トスル所以ハ專ハラ管財人ノ所爲ヲ監査スルニ在リテ則チ該官吏ノ立會ヲ以テ調査シタル目録ニ非サレハ裁判上之ヲ有効ナリトスルヲ得サルモノトス然レモ破産者ニ至テハ唯其必要アリト認メタル場合ニ限り之ニ立會ハシムルモノニシテ之ヲ身代限規則ニ照セハ大ニ其趣ヲ異ニスルモノアリ  
裁判所職員トハ書記又ハ執達吏ヲ謂フ是蓋司法省令ヲ以テ他日一定スル所アル可シ而シテ警察官吏ヲ立會ハシムル場合ハ多クハ破産者ノ財産カ遠ク裁判所ノ所在地外ニ在ル場合ニ係ルモノナリト雖モ之

ヲ選擇スルハ唯其破産裁判所ノ職權ニ屬スルモノトス  
財團ニ組入ル可ヲサルモノトハ第一千一條ニ所謂民事訴訟法ニ從ヒ強  
制執行ノ爲メ差押フルコトヲ得サルモノ及ヒ優先權ノ屬スル擔保物  
等ヲ指スナリ

財産目録ニハ當ニ有形財産ニ止マラス無形財産即チ各債權ヲモ登載  
ス可キモノナレハ總テ是等ノ價額ヲ付スルニ付テハ蓋第三十二條第  
二項ノ規定ニ準ス可キナリ而シテ多數ノ財産中ニハ管財人ノ意見ヲ  
以テ其價額ヲ定メ難キモノアルヲ以テ此場合ニ於テハ特ニ鑑定人ヲ  
シテ之カ鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得ヘキモノトス凡ソ鑑定ヲ命スル  
ハ常ニ裁判所ノ職權ニ屬スルト雖モ此場合ニ於テハ管財人自己ノ行  
フ可キ職務ヲ補助セシムルニ外ナラサルヲ以テ管財人ニ於テ自ラ之  
ヲ選任スルヲ得ヘキモノトス是本條ノ文面上ヨリ自ラ推測スルヲ得

ヘキノミナラス白法(白國商法第八條第四)ノ如キハ特ニ其旨ヲ明示シ唯此場  
合ニ於テ破産主任官ノ許可ヲ受クルコトヲ要スルモノトセリ

第三十二條ニ依ンハ各商人ハ毎年自ラ財産目録ヲ作り及ヒ其價額ヲ  
モ記載ス可キモノナルガ故ニ同條ノ偏ク實施セラル、ノ日ニ至ラハ  
管財人カ財産目録ヲ作ルニ當リ若シ其破産者カ商人タル場合ニ於テ  
ハ蓋大ニ手數ヲ減スルノ利益アル可シ

財産目録ニ價額ヲ明示ス可シトスル所以ハ第一破産者ノ財産ヲ以テ  
破産手續ノ費用ヲ償フニ足ルヤ否ヤヲ知ルノ必要アルノミナラス貸  
借對照表及ヒ配當案ヲ作ルニ付テハ皆其源ヲ之ニ採ラサルヲ得サル  
ニ因ルナリ

本條末項ノ規定ハ第九百八十四條ニ依リ檢事カ破産者ノ罰セラル可  
キ所爲ノ有無ヲ捜査スルノ便ヲ與フルモノニシテ其要專ラ公益ヲ保

(第一千十四條) 財團ノ管理及ヒ換似

護スルニ在ルナリ

第一千五百條 破産者ニ屬セサル財産ヲ財團ヨリ取戻スコトニ係ル争訟ハ破産裁判所之ヲ裁判シ不動産ニ付テハ其所在地ヲ管轄スル裁判所之ヲ裁判ス

〔義解〕 財産目録ヲ作ルニ當リ管財人ニ於テ破産者ノ財産ト認メタルモノハ悉ク之ヲ其目録ニ記入シ以テ財團ニ組入ル可キモノナルヲ以テ若シ其所有權ニ付キ争アル者ハ別ニ訴訟ヲ提起シ以テ之ヲ判決ヲ受ケサルヲ得ス然ルニ普通ノ手續ニ依ルトキハ請求金額ノ多寡ニ從ヒ裁判所ノ管轄ヲ異ニシ且其被告人ノ住所ノ裁判所ニ於テセサルヲ得サル等ノ制限アルヲ以テ本條ニ於テハ特ニ之カ例外ヲ設ケ凡ソ此種ノ訴訟ハ總テ之ヲ破産裁判所ノ管轄ニ屬スルモノトシ唯其不動産取戻ニ係ル場合ニ限リテノミ普通ノ手續ニ從フ可キモノトスルナリ

(帝國裁判所構成法第十四條及ヒ民事訴訟法第十條及ヒ第二十二條)

破産者ニ屬セサル財産トハ借用品又ハ被託物ノ類ニシテ元來破産者カ所有權ヲ有セサルモノヲ謂フ故ニ第五百七十二條ニ依リ取戻權ヲ行フ可キ場合ノ如ク其財産ノ所有權カ既ニ破産者ニ屬シタル場合ニ在テハ或ハ本條ノ規定ニ依ルコトヲ得サルカ如シ然レモ「ロイスンル」氏ノ説ニ依レハ「取戻權」モ破産ノ場合ニ適用ス可シ而シテ總テノ權利者ハ唯其時ノ形狀ニ從ヒ財團ヨリ物件ヲ取戻スコトヲ得「トアリテ之ヲ破産者ニ屬セサル財産ヲ取戻ス場合ト同視スルニ似タリ加之本條ヲ特置スルノ精神ニ依テ之ヲ考フルトキハ右ノ場合ト雖モ直チニ本條ノ規定ヲ適用スルヲ得ヘキモノタルハ敢テ疑フ所ナキナリ

第一千五百條 管財人ハ破産主任官ノ定メタル三十日以内ノ期間ニ破産者ヨリ差出シタル届書及ヒ貸借對照表ヲ調査シ若シ破産者ヨリ之ヲ差出ササリシトキハ自ラ貸借對照表ヲ作り且其報告書ニ貸借對照表ヲ添ヘテ破産主任官ニ提出ス可シ

(第一千五百條、第一千五百六條) 財團ノ管理及ヒ換價

報告書及ヒ貸借對照表ノ認證アル際本ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フ  
報告書及ヒ貸借對照表ハ之ヲ檢事ニ送致スルコトヲ要ス

〔義解〕 破産主任官ノ定メタル三十日以内ノ期間トハ破産主任官ニ於テ相當ト見込ミタル期間ヲ定ムルヲ得ヘキ職權アルヲ示シ而シテ其期間ヲ定ムルニハ破産宣告ノ日ヨリ起算シテ長クモ三十日ヲ超ヘサルヲ要スルモノトスルナリ  
届書及ヒ貸借對照表ハ第九百七十九條ニ依リ破産者ヨリ差出ス可キ義務アルヲ以テ破産管財人ハ之ヲ調査シタル上自ラ報告書ヲ添ヘテ破産主任官ニ提出スルヲ以テ通例ナリトス然レモ破産者ニ於テ此義務ヲ履行セサル場合ニ在テハ管財人自ラ之ヲ調製シ併テ報告書ヲ差出サ、ルヲ得サルモノトス  
報告書ハ破産ノ原因及ヒ事情ヲ示ス可キモノニシテ之ヲ細言セハ其

原因ハ破産者ノ惡意ニ出タル歟事變ノ然ラシムル所ナリシ歟常ニ規則正シク其業ヲ營ミタル歟帳簿ノ記載正整ナル歟財産ヲ浪費セザリシ歟投機ノ爲メニ失敗シタルニ非サル歟過量ノ負債ヲ起シタルニ非サル歟刑法ニ觸ル、ノ所爲ナキ歟ノ如キ總テ是等ノ事情ヲ記載スルニ在ルナリ  
又貸借對照表ノ目的ハ第九百七十九條ヲ説明スルニ當リ既ニ之ヲ辯セリ然レモ凡ソ此等ノ書面ハ成ル可ク明瞭ナルヲ要スルカ故ニ今ヤ佛國ニ於テ使用スル所ノ書式ヲ掲載シ以テ聊カ參考ニ供スルアル可シ

貸借對照表

何區何町何番地住雜品商何某ノ貸借對照表

權利ニ屬スル分

(第千十六條) 財團ノ管理及ヒ換價



第一章 不動産

第一、何町何番地家屋一戸此價

何圓

第二、何區何番ノ葡萄園一个所此價

何圓

第二章 貨幣債權、營業動産及ヒ家具

第一、現金

何圓

第二、何某ヨリ振出シタル何圓ノ爲替手形一通期限本月三十日

何圓

第三、商業資本大略ノ估計

何圓

第四、商業ニ使用セル動産ノ估計

何圓

第五、破産者一切ノ動産及家具ノ估計

何圓

權利ニ屬スル分總計

何圓

義務ニ屬スル分

第一章 優先權又ハ抵當權ヲ有スル債權者

第一、前第一章ニ擧ケタル家屋ノ賣主何某ニ拂フ可キ元金並ニ何

月何日ヨリノ利子

何圓

第二、妻何某ノ嫁資

何圓

第二章 通常債權者

第一、何地住何商何某ノ何月何日附ノ仕切目錄

何圓

第二、(一切ノ通常債權者ヲ明示シ其債權ノ金高及性質ヲ示ス可シ)

何圓

義務ニ屬スル分總計

何圓

權利ニ屬スル分

何圓

義務ニ屬スル分

何圓

差引不足

何圓

破産者ノ事務處分方法辯明

(第一千六百條) 財團ノ管理及ヒ換價

營業中ノ利益(毎年利益ヲ得タル事業ヲ示ス可シ) 何圓

營業中ノ損失(毎歲損失ヲ爲シタル事業ヲ示ス可シ) 何圓

總計 何圓

家事費用(家計入費及ヒ其他ノ雜費毎年ノ金高ヲ示ス可シ)

總計 何圓

何區何番地住雜品商何某右真正ナルヲ保證ス

何年何月何日何所ニ於テ (破産者手署)

若シ此貸借對照表ヲ假管財人ノ作りタル時ハ左ノ如ク認ム可シ

右ハ假管財人ナル我等之ヲ作り且真正ナルヲ保證ス

何年何月何日何所ニ於テ (假管財人手署)

右ノ表中「破産者」ノ事務處分方法辯明「トアルハ第九百七十九條第三號

ニ所謂利益及ヒ損失ノ概要ナル項目ニ該當スルナリ

第一千七條

貸方ノ借方ニ超ユルコト判然ナルトキ又ハ協諾契約ノ期限セラレル間ハ裁判所ハ破産主任官ノ申立ニ因リ且管財人ノ意見ヲ聽キタル後管財人ノ破産者ノ營業ヲ續行セシムル決定ヲ爲スコトヲ得

管財人營業ヲ續行スル場合ニ在テ財團ニ屬スル物ヲ通常ノ營業外ニテ賣却セントスルニハ破産主任官ノ認可ヲ受ケ且豫メ破産者ノ意見ヲ聽クコトヲ要ス

〔義解〕 本條ノ規定ハ支拂停止ノ爲メ一旦破産ノ宣告ヲ受ケタリト雖

モ更ニ回復スルコトヲ得ヘキ見込アル破産者ヲシテ其營業ヲ衰微セシメス及ヒ之ヲ妨害セシメサランコトヲ欲スルニ在リ故ニ此規定ハ管ニ債務者及ヒ務權者ノ利益トナルニ止マラス併セテ幾分ノ公益トナルヲ得ヘシ例ヘハ破産者ニシテ一大工場ヲ有スルトセンニ其營業者カ一朝破産ノ爲メ營業ヲ停止スルニ於テハ數多ノ職工ヲシテ遽カニ其職ヲ罷メ一時生活ノ途ヲ失ハシムルニ至ル可キモ若シ此規定ヲ

(第一千七條) 財團ノ管理及ヒ換價

實行スルニ於テハ則チ此ノ如キ不幸ヲ免ル、コトヲ得ヘキカ如シ但右ニ云フ回復スルコトヲ得ヘキ見込アル場合トハ則チ貸方ノ借方ニ超ユルコト判然タル場合及ヒ協諧契約ノ調フ可キ見込アル場合ヲ謂フナリ

破産者ノ貸方ニシテ其借方ニ超ユル場合アリト云ハ、少ク疑フ可キニ似タリト雖モ曾テ説明セシ如ク假令巨萬ノ財産ヲ有スル者ニモセヨ一時支拂ヲ爲スコトヲ得サルニ於テハ忽チ破産ノ宣告ヲ受ク可キモノナルカ故ニ貸方ノ借方ニ超ユル場合ハ實際上往々之ヲ見ル所ニシテ其例蓋鮮少ニ非サル可キナリ

協諧契約トハ第一千三十八條以下ニ規定スル所ノモノヲ謂フ故ニ其詳細ナル意義ニ付テハ同條下ニ至リ別ニ之ヲ説明ス可シト雖モ之ヲ約言セハ破産ノ處分ヲ停止シ破産者ヲシテ再ヒ舊態ニ復セシム可キ契

約ヲ謂フナリ而シテ此契約ヲ爲ス可キ申出ヲ爲スニ付テハ自ラ支拂停止ノ申出ヲ爲シタル者タルヲ要スル等ノ條件アルノミナラス此申出ヲ爲スコトヲ得ルハ單ニ一回ニ止マリ即チ一タヒ其申出ヲ棄却セラレタルトキハ最早之ヲ爲スコトヲ得サル等ノ規定アルヲ以テ凡ソ此等ノ規定ニ適合スルニ非サレハ協諧契約ヲ爲スコトヲ得サルモノナリ故ニ協諧契約ノ豫知セラル、間トハ則チ此ノ如キ條件ノ具備スル場合ヲ指シタルモノト解ス可キナリ

英法ノ如キハ破産者ヲシテ自ラ營業ヲ續行スルコトヲ得セシメ白法ニ於テハ第三者ヲシテ管財人ノ監督ノ下ニ立テ以テ破産者ノ營業ヲ續行スルコトヲ得セシムルト雖モ本條ニ於テハ之ヲ續行スルコトヲ得可キ者ハ單ニ管財人ニノミ止マリ破産者及ヒ第三者ニ在テハ管財人ノ指揮アル場合ニ於テ唯之ヲ補助スルコトヲ得ルニ過キササルモノ

ナリ

安クモ

一四〇

「財團ニ屬スル物ヲ通常ノ營業外ニテ賣却セントスル」トハ例ヘハ管財人カ命セラレタル營業ハ工場ノ人夫ヲ使用シ且其製造品ヲ賣却スルニ在リ然ルニ人夫ニ支拂フ可キ賃錢若クハ其他ノ資金ニ差支テ生シタルカ爲メ財團ニ屬スル或ル物品則チ製造品以外ノ物品ヲ賣却セントスル場合ノ類ヲ謂フ凡ソ此ノ如キ變例ニ屬スル處分ハ先以テ破産者ノ意見ヲ聽キ且破産主任官ノ認可ヲ受ケタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得サルモノトス是他ナシ破産者ノ營業ヲ續行スル目的ハ現ニ得ヘキ利益ヲ抛擲セザラフコトヲ主トスルニ在ルヲ以テ其職務ノ範圍ハ成ル可ク之ヲ狭小ニセフコトヲ欲スルニ因ルナリ

本條ノ文面ニテハ管財人カ破産者ノ意見ヲ聽クハ破産主任官ノ認可ヲ受ケタル後ニ於テスヘキモノ、如シ然レハ破産主任官カ其認可ヲ

爲スニ付テハ破産者ノ意見ヲ参照スルコト蓋當然ノ手續ナレハ強チ文面ニ拘ハラズ先以テ破産者ノ意見ヲ聽クヲ以テ事理ニ適合スルモノト謂フ可シ但破産主任官ハ勿論管財人ト雖モ破産者ノ意見ハ單ニ自己ノ參考ニ供スルノミニシテ固ヨリ之ニ服從スルノ義務ナキモノトス

終ニ臨ミ尙ホ一言不可キモノアリ曰ク既ニ營業ヲ續行ス可キ決定ヲ爲シタル後更ニ其停止ヲ必要トスル場合ニ在テハ則チ之ヲ停止スルヲ得ルヤ及ヒ其停止ヲ爲スニ付テハ如何ナル方法ニ依ル可キヤ本法中之ヲ規定スルモノナシ果シテ然ラハ如何ニセハ可ナラン乎之ヲ白法(百七十五條)第四ニ釋ヌルニ破産裁判所ハ破産主任官ノ申立ニ基キ更ニ管財人ノ意見ヲ聽キタル後何時ニテモ此處分ヲ變更又ハ取消スルコトヲ得ヘシトアリテ恰モ最初營業ヲ續行スルニ付キ盡シタル手續ニ

(第十七條) 財團ノ管理及ヒ換價

一四一

異ナルコトナシ今ヤ本條ノ精神ヲ案スルニ亦是白法ト同一ニシテ唯  
爰ニ之ヲ詳説セサルニ過キサル可キナリ

第一千八百條 不動産ハ破産主任官ノ認可ヲ受ケテ之ヲ競賣スルコトヲ  
要ス

動産ハ競賣スルヲ通例トスト雖モ破産主任官ノ認可ヲ受ケルトキハ  
相對テ以テ之ヲ競却スルコトヲ得

競賣ノ手續ハ總テ民事訴訟法ノ規定ニ依ル

〔義解〕 本條ハ財團賣却ノ方法ヲ規定シタルモノニシテ動産ニ付テハ  
破産主任官ノ認可ヲ受ケタルトキニ限り相對テ以テ之ヲ賣却スルコ  
トヲ得ルト雖モ其他ハ總テ之ヲ競賣ニ付セサルヲ得ス就中不動産ノ  
競賣ニ付テハ其代價ノ適否及ヒ代金支拂ノ擔保ヲ確實ニスル等最モ  
之ヲ鄭重ニスルノ必要アルヲ以テ特ニ破産主任官ノ認可ヲ受ケタル  
後ニ非ザンハ其羅賣ヲ爲スコトヲ得サルモノトスルナリ  
競賣ノ手續ハ動産ニ付テハ民事訴訟法第五百七十六條以下不動産ニ

付テハ同法第六百五十八條以下ニ之ヲ規定ス但民事訴訟法ニ於テ執  
達吏ノ行フ可キ職務ハ破産管財人ノ行ヒ執行裁判官ノ行フ可キ職  
務ハ破産主任官ニ於テ之ヲ行フ等性質上當然差違ノ生ス可キモノハ  
固ヨリ之カ變更ヲ生セサルヲ得サルモノトス

第一千九條 管財人ハ財團ニ屬スル破産者ノ貸方ヲ取立テ及ヒ破産者

ノ權利ヲ債務者其他ノ人ニ對シテ主張シ且保全スルコトヲ要ス  
管財人ハ左ニ掲ケル行爲ニ付テハ破産者ノ意見ヲ聽キ且破産主任官  
ノ認可ヲ受ケ可シ

- 第一 訴訟ヲ爲スコト
- 第二 和解契約又ハ仲裁契約ヲ取結フコト
- 第三 質物ヲ受戻スコト
- 第四 債權ヲ轉付スルコト
- 第五 相續又ハ遺贈ヲ拒絕スルコト
- 第六 消費借ヲ爲スコト
- 第七 不動産ヲ買入ルコト
- 第八 權利ヲ拋棄スルコト
- 第九 總テ財團ニ新ナル義務ヲ負ハシムルコト

〔義解〕 本條第一項ニ於テハ破産管財人カ通常行フ可キ職務ヲ明示シ其第二項ニ於テハ特ニ之カ制限ヲ加ヘタルモノナリ但第一項ニ謂フ所ノ「其他人」トハ例ヘハ財團ニ屬スル物ヲ横奪セントスル者ノ類ヲ謂フ是管財人ハ債務者ニ對シテ債權ヲ主張スル外右等ノ人ニ對シテモ亦財團保全ノ爲メニ防禦セサルヲ得サル旨ヲ示シタルモノナリ

管財人カ本條第一號乃至第九號ニ列記シタル所爲ヲ行フニ付テハ破産主任官ノ認可ヲ受ケサルヲ得ス故ニ此認可ヲ受クルコトナクシテ行フタル此等ノ所爲ハ全ク無効ニ屬シ其對手人ニ於テモ之カ爲メ財團ニ對シテ權利義務ヲ生スルコトナキナリ

和解契約トハ管財人カ第三者ニ對シテ相對ニテ和解ヲ爲スヲ謂ヒ仲裁契約トハ民事訴訟法第八編（同法第七百八十六條以下）ニ於テ特ニ規定スルモノニシテ之ヲ約言セハ特別ノ仲裁人ヲシテ仲裁ヲ爲サシムル契約ヲ謂フナリ

フナリ

相續又ハ遺贈ヲ拒絕スルハ一面ヨリ之ヲ見ルトキハ財團ノ受ク可キ利益ヲ拋棄スルモノナリト雖モ他ノ一面ヨリ之ヲ見ルトキハ相續又ハ遺贈ヲ受クレハ之ト同時ニ其先人ノ負債ヲ引受ク可キ義務ヲ生スルヲ以テ却テ財團ノ損害トナルコトアリ故ニ之ヲ拒絕スルハ則チ先人ノ負債アル場合ニ存スルモノナリトス然レモ通例ハ之ヲ受クルヲ以テ利益トスルカ故ニ之ヲ受クルニ付テハ別ニ認可ヲ必要トセス唯、之ヲ拒絕スル場合ニノミ認可ヲ受クルコトヲ要スルモノトナセリ但此拒絕ニ付テノ手續ハ民法財産取得編第三百三十六條及ヒ第三百九十條ニ於テ之ヲ規定ス

管財人ニ於テ不動産ヲ買入ル、ノ必要アル場合ハ例ヘハ甲地ハ破産者ニ屬シ乙地ハ他人ニ屬スル場合ニ於テ若シ其乙地ヲ買受ケ之ヲ甲

（第千九條） 財團ノ管理及ヒ換價

地ト合併スルトキハ之ニ因リテ甲地ノ價格ヲ増加ス可ク又家屋ハ破産者ニ屬シ地所ハ他人ニ屬スル場合ニ於テ其地所ヲ買受テ該家屋ト共ニ之ヲ賣却スルトキハ則チ家屋ノ代價ヲ増加ス可ク又ハ營業續行ノ爲メ新ニ家屋ヲ買受ケサルヲ得サル場合ノ類ナリ

財團ニ新ナル義務ヲ負ハシムルトハ例ヘハ財團中ノ物品保存ノ爲メ若干ノ賃錢ヲ以テ之カ修繕ヲ爲サシムル類ノ如シ

舊法ニテハ本條第一號乃至第九號ニ列擧シタル事項ト雖モ其價額ノ百圓以下ナルニ於テハ破産管財人自ラ之ヲ專斷スルコトヲ得ヘキ規

定ナリシ今ヤ全ク此區別ヲ廢止シ則チ金高ノ如何ヲ問ハス破産者ノ意見ヲ聽キ且破産主任官ノ認可ヲ受ク可キモノトナレリ是蓋至當ノ

改正ト謂フ可シ何トナレハ破産管財人ハ果テ信用ヲ置クニ足ル可キヤ其未タ經驗ヲキ今日ニ在テハ固ヨリ之ヲ確保スルヲ得サルノミナ

ラス試ニ之ヲ現時ノ民度ニ照スモ百圓ナル金高ハ敢テ之ヲ寡少ナリト謂フヲ得サレハナリ

第千二十條 財團ニ收入スル金錢ハ破産主任官ノ定ム可キ常用支出額ノ外遲延ナク之ヲ供託所ニ寄託スルコトヲ要ス其金錢ハ破産主任官ノ支拂命令ニ依ルニ非サレハ支出スルコトヲ得ス

〔義解〕 本條ハ財團ニ屬スル金錢ノ保管法ニ係ル而シテ常用支出額トハ財團管理ノ爲メ時々支出セサルヲ得サル費用ニ供ス可キモノニシテ則チ破産主任官ニ於テ豫メ定メ置ク所ノ金額ヲ謂フナリ

本條ニ於テ注意ス可キハ「遲延」ノ一句ニシテ苟モ管財人カ受取タル金額ハ空ク之ヲ手許ニ留置クコトヲ得ス遅クモ之ヲ受取タル翌日中ニハ供託所ニ委託セサルヲ得サルモノトス余ノ目撃セシ所ニ依レハ巴里薩事裁判所ニ在テハ管財人ハ毎日其前日ニ於テ行フタル事務ノ報告ヲ爲ス可キ例規ニシテ其報告書ニハ各破産事件ニ付キ受取タ

(第千二十條) 財團ノ管理及ヒ換價

ル金額及ヒ支拂ヒタル金額等ヲ記載スルカ故ニ破産主任官ニ於テ其  
受取金額ト供託所ノ預ケ金額ト符合スルヤ否ヤヲ審査スル等ノ便ア  
ルノミナラス凡ソ金錢ノ取扱ニ付テハ極メテ之カ取締ヲ嚴ニシ以テ  
豫メ不慮ノ弊害ヲ防ケリ

第一千二百一十條 管財人ハ其管財中破産者ニ關セラル可キ行爲アルヲ知  
リタルトキハ之ヲ破産主任官ニ届出ツル義務アリ破産主任官其届出  
ヲ受ケタルトキハ之ヲ檢事ニ通知ス

〔義解〕 本條ハ破産者ノ有罪行爲ヲ發見シタルトキノ處分手續ニ係ル  
モノニシテ若シ管財人ニ於テ此ノ如キ犯罪アルヲ知リテ之ヲ届出サ  
ルニ於テハ之カ爲メ生シタル損害ニ對シテ自ラ責任ヲ負ハサルヲ得  
サルノミナラス其行爲ノ不正ナルヲ理由トシテ破産裁判所ノ公廷ニ  
於テ解職ノ言渡ヲ受クルニ至ル可キナリ但本條ニ謂フ所ノ罰セラル  
可キ行爲トハ主トシテ第一千五百十條及ヒ第一千五百一十條ニ掲ケタル事項

ノ如キ財團ニ影響ヲ及ボス可キ行爲ヲ謂フ故ニ普通ノ犯罪ニ付テハ  
必スシモ之ヲ届出ツルノ義務アリトスルヲ得ニ是蓋管財人タルノ性  
質上ヨリ當然推測スルヲ得ヘキモノナリ

第一千二百一十條 破産主任官ハ破産ノ理由、事情、貸方、借方並ニ其對照表其  
他管理及ヒ破産手續ニ關スル事項ニ付キ破産者、其商業使用人、雇人其  
他ノ人ヲ何時ニテモ訊問スルコトヲ得

〔義解〕 本條ハ破産ニ付キ成ル可ク眞個ノ事實ヲ表示シ以テ其顛末ヲ  
明晰ナラシムルカ爲メ破産主任官ニ與ヘタル職權ニ係レリ或國ノ法  
律ニ於テハ破産者ノ妻子ヲ訊問スルコトヲ禁スルモノアリ而シテ其  
理由トスル所ハ若シ之ヲ訊問スルトキハ一家互ニ德義ヲ守リ敬愛ヲ  
以テ互ニ相牽連スル所ノ倫理ヲ傷フニ至ル可シト云フニ在リ然レモ  
本條ニ於テハ「其他ノ人」トアルヲ以テ假令父母若クハ妻子ト雖モ總テ  
之ヲ訊問スルコトヲ得ヘキモノトス今其理由ヲ按スルニ此等ノ者ノ



答フル所必スシモ破産者ノ害トナラサルノミナラス或ハ却テ利益トナリ且其事實ヲ明瞭ナラシムルコトアリ加之若シ此等ノ者ニ於テ答辯ヲ爲スノ不利益タルヲ知ラハ則チ之ヲ爲スコトヲ肯セサルヲ得ヘキヲ以テ法律ニ於テハ何人ト雖モ之ヲ訊問スルコトヲ得ト定ムルヲ適當ナリトスルニ因ルナラン

破産主任官ノ訊問ニ對シテ答辯セサル場合ハ勿論假令其呼出ニ應セサルトキト雖モ破産者ニ係ル場合ノ外ハ一モ制裁ヲ付スルニ由ナク唯犯罪ノ疑アル場合ニ於テ其旨ヲ檢察ニ告知スルニ止マル可キモノトス

### 第六章 債權者

#### 第一節 債權ノ届出及ヒ確定

第一千二十三條 破産者ノ總債權者ハ破産決定ノ公告ニ因リ債權届出ノ

期間ニ其債權ヲ破産主任官ニ届出ツ可キ旨ノ催告ヲ受タルモノトス其届出ニハ各債權ノ合法ノ原因及ヒ請求金額若シ優先權アルモノハ其權利ヲ明記シ且證據書類又ハ其原本ヲ添フ可シ  
他所ニ住スル債權者ハ裁判所所在地ニ代人ヲ置ク可シ  
債權及ヒ代人任置ノ届出ハ書面ヲ以テ又ハ調書ニ筆記セシメテ之ヲ爲スコトヲ得書面ヲ以テスル場合ニ在テハ二通ヲ差出スコトヲ要ス所在ノ知レタル債權者ハ右ノ外特ニ裁判所ヨリ書面ヲ以テ其債權届出ノ催告ヲ受ク然レトモ其書面カ債權者ニ達セサルモ此カ爲メ損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ得ス

〔義解〕 本條ハ債權ノ正當ナルヤ否ヤヲ調査スルノ階梯ニシテ各債權者ハ其優先權ヲ有スル者ナルト否トヲ問ハス總テ届出期間ニ其債權ヲ届出ツルノ義務アリ且届出ヲ爲スニ付テハ一定ノ手續ニ從ハサルヲ得サル旨ヲ規定シタルモノナリ

届出期間トハ破産宣告ト共ニ破産裁判所ニ於テ決定スル所ノ期間ニシテ短カクモ三ヶ月ヲ下ラス長クモ六ヶ月ヲ超エサルモノトス(第九百八

五十條第)而シテ或國ノ法律ニ於テハ其届出ノ宛名ヲ管財人トナシ或ハ之ヲ裁判所書記局トナスモノアリト雖モ本法ニ於テハ之ヲ破産主任官トナシ其手續ヲシテ成ル可ク之ヲ鄭重ニセシコトヲ要セリ  
 請求金額ヲ記スルニ當リ注意ス可キハ利息ノ計算ニ係ル第九百八十九條ノ規定是ナリ即チ財團ニ對シテ利息ヲ生スルハ破産宣告ノ日ニ止マルヲ以テ之ヲ債權届出ノ日迄ニ及ホス可ラサルモノトス  
 本條ノ場合ニ於テ證據書類ヲ差出スニハ本書ヲ以テスルモ謄本ヲ以テスルモ債權者ノ隨意ニシテ又ハトハ則チ擇一ノ意義ナリ然レトモ調査會ニ於テハ必ス本書ヲ提出セサル可ラス何トナシハ假令破産者ノ認諾アル場合ヲリトモ調査會ノ承認ヲ經サル以前ニ於テハ他ノ債權者ニ對シテ直チニ之ヲ有効トスルヲ得サルヲ以テナリ  
 他所ニ住スル債權者ニシテ裁判所々在地ニ代人ヲ定メ且ツ其旨ヲ届

出サルニ於テハ書類ノ送達ヲキ場合又ハ呼出ニ付キ常ニ必要トスル所ノ里程ノ猶豫ヲ與ヘサル場合ト雖モ之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得ス而シテ其送達ヲナス場合ニ於テハ蓋民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ郵便ニ付シタルヲ以テ送達ヲ爲シタルモノト看做ス可キナリ(民事訴訟法第百四十三條第三項)

債權ノ届書及ヒ代人任置ノ届書ヲ出スニ二通ヲ必要トスルハ次條ノ規定ニ從ヒ内一通ハ之ヲ管財人ニ交付セサル可ラサルニ因ルナリ但調査ニ筆記シタル場合モ同シク右ノ必要アルヲ以テ別ニ一通ノ謄本ヲ作ル可キハ勿論ナリト雖モ是全ク裁判所書記ノ職務ニ屬スルヲ以テ本條ニ於テハ別ニ之ヲ定メス  
 遠國殊ニ外國ニ在ル債權者ノ如キハ殆ント破産宣告ノ公告ヲ知ルニ由ナキヲ以テ動モスレハ債權ノ届出ヲ爲サス途ニ其權利ヲ失却スル

ノ恐アルノミナラス各債權ノ調査ヲ爲スニ付テハ其届出ノ成ル可ク迅速ナルヲ要スルカ故ニ貸借對照表商業帳簿又ハ破産者ノ申立等ニ依リ債權者ノ誰タルヲ知り得タルキハ裁判所ヨリ一應届出ノ催告ヲ爲ス可キモノトス是本條未項ノ規定スル所ナリ但白法(白商第四百九十六條)ノ如キハ此書面ハ回狀トナシ書留郵便ヲ以テ之ヲ送達ス可キモノトセリ此手續タル費用ヲ節スルノ便益アルヲ以テ本邦ニ於テモ或ハ之ヲ採用スルニ足ル可シ

本條ニ從ヒ届出ヲ爲ス可キ者ハ商事非訟事件印紙法第三條ニ依リ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可キモノトス而シテ之ヲ身代限ノ場合ニ比照スルトキハ大ニ其稅額ノ減少アルヲ見ル是蓋至當ノ改正ニシテ抑債權者ノ爲メニ一モ收額ヲ生セス或ハ僅少ナル收額ヲ生ス可キ場合ニ於テ尙ホ債權者ヲシテ其債權額ニ相當スル印紙ヲ貼用セシムルカ如キ

ハ極メテ其當ヲ失シタルモノト謂ハサルヲ得ス況ヤ此届出ニ付テノ費用ハ財團ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得サルニ於テオヤ(第千三十三條)本條ノ届出ヲ怠リタル債權者ノ被アル可キ損害ハ第千二十五條第四項及ヒ第千二十九條ニ於テ之ヲ規定ス

第千二十四條 届出ハ之ヲ受取リタルトキ直チニ順次番號ヲ付シテ二箇ノ表ニ記載ス可シ其一ニハ優先權アル債權ヲ掲ケ他ノ一ニハ通常ノ債權ヲ掲ケ此債權表ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フニ管財人ハ其使用ノ爲メ届出書及ヒ債權表ノ贈本ヲ受領ス

〔義解〕 貸借對照表ハ破産者自ラ之ヲ作り又ハ管財人ニ於テ商業帳簿等ニ因リ之ヲ作ル可キモノナレハ該表ノ記スル所未タ以テ之ヲ正確ナル事實トナスコトヲ得ス是本條ニ於テ別ニ債權一覽表ヲ作ラシムル所以ナリ而シテ之ヲ公示スルハ各債權者ヲシテ異議ヲ述ヘシムルノ便ヲ與フルニ外ナラサルナリ

第一千二十五條 調査會ハ管財人及ヒ成ル可ク破産者ノ面前ニ於テ破産  
 主任官之ヲ開キ且其調査ヲ作ル可シ債權者ハ自身又ハ代理人ヲ以テ  
 此會ニ参加スルコトヲ得  
 破産主任官ハ債權者ニ取引帳簿若クハ其抜書ノ提出ヲ命スルコトヲ  
 得調査ノ結果ハ債權表及ヒ提出シタル債務證書ニ附記シ且各債權者  
 又ハ其代理人ニ告知スルコトヲ要ス  
 調査會ハ届出期間ノ満了後十日乃至十五日間ニ之ヲ開クヲ通例トス  
 届出期間ノ満了後二届出テタル債權ハ調査會ニ於テ之ヲ調査スルコ  
 トヲ得然レトモ其調査ヲ爲スコトニ付キ異議ノ申立アリタルトキ又  
 ハ調査會ノ終リタル後債權ヲ届出テタルトキハ其債權者ノ費用ヲ以  
 テ新ナル調査會ヲ開ク

〔義解〕 調査會ノ期日ハ破産ノ決定ト同時ニ豫メ之ヲ定ム可キモノナ  
 ルハ第九百八十條ニ規定スル所ノ如シ而シテ此調査會ハ破産主任官  
 ノ上席ニテ管財人及ヒ各債權者并ニ破産者ヲ以テ之ヲ組織シ各債權  
 ノ真偽ヲ調査スルモノナリ但破産者若クハ債權者ノ出席セザルトキ  
 ト雖モ會議ノ効力ニ對シテハ毫モ瑕瑾ヲ生スルコトナキナリ

普通ノ手續ニ依レハ調査ヲ作ル可キ任アル者ハ裁判所書記タルコト  
 勿論ナリト雖モ本條ノ文意ニ依ルトキハ此調査ニ限リ破産主任官ニ  
 於テ自ラ之ヲ調製ス可キモノト謂ハサルヲ得ス且佛法(佛商第三百九十九條)  
 如キハ此責任者ヲ以テ明ニ之ヲ破産主任官ナリト定ム又白法(白商第五百條)  
 ニ於テハ管財人此調査ヲ作り破産主任官之ニ連署ス可キモノトナセ  
 リ何レニシテモ此調査ヲ作ルハ自ラ普通ノ手續ニ異ナルモノアルヲ  
 知ル可シ

又本條ニ於テハ調査ニ記ス可キ事項ヲ明記セスト雖モ右白佛等ノ法  
 律ニ依レハ該調査ニハ各債權者及ヒ其代人ノ住所ヲ指示シ及ヒ提出  
 シタル證書ニ付テノ簡畧ナル記載ヲ爲シ且其證書ニ挿入削除シ又ハ  
 塗抹等ノ點アルトキハ其事實并ニ債權ノ是認セラレタルヤ否ヤ又爭  
 アリタルヤ否ヤヲ記載ス可キモノトセリ按スルニ本條ノ調査ニ付テ

モ此等ノ事項ハ常ニ之ヲ記載セサル可ヲサルナリ  
 届出期間經過後調査會終了前ニ届出タル債權(第一)又ハ調査會終了後  
 届出タル債權(第二)タリトモ敢テ調査ヲ受クルコトヲ得サルニ非ス唯  
 第一ノ場合ニ於テハ管財人又ハ他ノ債權者ヨリ異議アリタルトキ第  
 二ノ場合ニ於テハ常ニ届出ヲ怠リタル債權者自ラ調査會ヲ開クニ付  
 テノ費用ヲ支辨スルノ義務アルニ過キス是亦大ニ身代限規則ニ異ナ  
 ル所ナリ  
 時期ニ後レタル届出カ他ノ債權者ニ對シ既ニ幾分ノ配當ヲ爲シタル  
 後ニ係ル場合ニ於テ其債權ニ對スル配當方法ノ如何ハ第千二十九條  
 ニ於テ別ニ之ヲ規定ス

第千二十六條 債權ノ確定ハ承認又ハ裁判所ノ判決ヲ以テ之ヲ爲ス  
 調査會ニ於テ管財人ヨリモ又債權ノ確定シ若クハ貸借對照表ニ掲ケ  
 タル債權者ヨリモ異議ヲ申立テサルトキハ債權ハ承認ヲ得タルモノ

トス  
 管財人ノ債權ニ係ル承認又ハ異議ハ破産主任官其管財人ニ代ハリテ  
 之ヲ爲ス

〔義解〕 本條ハ債權ノ眞偽ヲ確定ス可キ方法ヲ規定シタルモノニシテ  
 特ニ注意ス可キハ異議ヲ申立ツルヲ得ヘキ者ノ資格ヲ制限シタルコ  
 ト是ナリ則チ本條ニ依レハ破産者ハ如何ナル場合ニテモ異議ヲ申立  
 ツルコトヲ得ス假令之ヲ申立ツルコトアリトモ唯之ヲ參考ニ供スル  
 ニ過キサルモノトス

破産主任官ニ於テモ亦自ラ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス故ニ其申立テ  
 爲ス可キ權利ハ唯之ヲ管財人及ヒ限アル債權者ニノミ許與シタルニ  
 過キサルナリ

夫レ管財人ハ債權ノ認否ヲ決スルニ付キ恰モ破産者ヲ代表スル者ナ  
 ルカ故ニ若シ管財人ヨリ破産者ニ對スル自己ノ債權アル場合ニ於テ

ハ一面ハ權利者トナリ一面ハ義務者トナリ利害相戦フテ公平ナル判決ヲナス極メテ難シ是則チ本條末項ノ規定アル所以ニシテ此場合ニ限リ破産主任官ニ於テモ管財人ニ代リテ異議ヲ述フルコトヲ得ヘキモノトス

管財人二名以上アルキハ一管財人ノ債權ニ係ル承認又ハ異議ハ他ノ管財人ニ於テ之ヲ爲サシムルヲ得ヘキモノ、如シト雖モ法律ハ猶ホ或ハ其間ニ私曲ノ行ハル、コトアラソテ恐レ此場合ト雖モ均ク破産主任官ニ於テ之ヲ爲ス可キモノトスルナリ

第千二十七條 異議ヲ受ケタル各債權ハ若シ其債權者之ヲ取消ササルトキハ破産裁判所公延ニ於テ破産主任官ノ演述ヲ聽キ成ル可ク合併シテ其判決ヲ爲ス可シ其辯論及ヒ判決ハ原告被告ノ出頭セサルトキト雖モ之ヲ爲ス但此判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

〔義解〕 前條ニ從ヒ異議ヲ申立ツル權アル者ヨリ異議ヲ述ヘタルトキ

ハ其申立人ヲ以テ原告トナシ異議ノ存スル債權者ヲ以テ被告トナシ金高ニ拘ハラズ總テ之ヲ破産裁判所ノ判定ニ委ヌ可キモノトス原告若クハ被告ノ出頭セサル場合ニ於テ言渡シタル裁判ハ民事訴訟法(第百五十五條)ノ規定ニ依ルトキハ常ニ故障ヲ爲スコトヲ許シ而シテ故障ノ判決アリタルニ非サレハ控訴ヲ爲スコトヲ得サルヲ通例ナリトス然ルニ本條ニ於テ特ニ故障ヲ爲スコトヲ許サ、ル所以ノモノハ專ラ破産手續ノ滯滞ヲ防クニ在リ加之既ニ破産主任官ノ演述アル上ハ以テ其事實ヲ了知スルヲ得ヘシトスルニ因ルナリ其他合併シテ審理ヲ爲サシメ及ヒ裁判管轄チ一ニスルカ如キハ皆は無用ノ手數ヲ省キ及ヒ冗費ヲ減セシコトヲ欲スルニ外ナラサルナリ  
右ニ謂フ如ク本條ノ場合ニ在テ故障ヲ爲スコトヲ許サ、ルニ於テハ直ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ヘキモノナルヤ否ヤ此問題ハ蓋民事訴訟法

第三百九十八條末段ノ規定即チ故障ヲ訴サ、ル關席判決ニ對シテハ  
懈怠ナカリシコトヲ理由トスルモニ限り控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツル  
コトヲ得トアルニ依テ決ス可キモノニシテ之ヲ要スルニ懈怠ナカリ  
シコトヲ理由トスルニ非サレハ控訴ヲ以テモ尙ホ不服ヲ申立ツルコ  
トヲ得サル可キナリ

第千二十八條 判決ハ成ル可ク債權者集會ニ之ヲ爲スコトヲ要ス若  
シ之ヲ爲スコト能ハス又ハ判決ニ對シテ控訴ヲ爲シタルトキハ裁判  
所ハ異議ヲ受ケタル債權者ノ右集會ニ加ハルコトヲ許ス可キヤ否ヤ  
又裁許ノ金額ニ付キ加ハルコトヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス  
債權者ノ優先權ノミカ異議ヲ受ケタルトキハ其債權者ハ通常ノ債權  
者トシテ右集會ニ加ハルコトヲ得

〔義解〕 判決トハ前條ニ掲ケタル異議ニ對スル判決ヲ謂フ夫レ債權者  
集會ハ第千二十七條ニ規定シタル議決ノ外協賛契約ノ成否ヲ決ス可  
キ權力ヲ有スルモノナルヲ以テ該會ニ列ス可キ債權者ノ有スル債權

ハ成ル可ク確定シタルモノヲ得ス故ニ本條第一段ニ於テ判  
決ハ成ル可ク債權者集會前ニ之ヲ爲スコトヲ要スト謂ヒ以テ裁判所  
ハ訴訟番號ノ順序ニ拘ハラス他ノ事件ニ先ヲチ此訴訟ヲ判決セサル  
可ラサルモノトスルナリ

然レトモ證據提出ノ爲メ或ル日數ヲ要スルカ其他當事者ノ都合等ニ  
因リ債權者集會前ニ右ノ判決ヲ爲スコトヲ得サル場合又ハ假令判決  
ヲ爲スモ之ニ對シテ上訴ヲ爲シタルカ爲メ久シク確定ニ至ラサル場  
合ナシトセス殊ニ此場合ハ甲債權者カ破産者ト密謀シ乙債權者ヲシ  
テ債權者集會ニ加ハ、ルコトヲ得セシメス以テ破産者ニ利益ナル協  
賛契約ノ成立ヲ容易ナラシメシコトヲ欲スルヨリシテ往々生ス可キ  
モノナルヲ以テ此ノ如キ債權不確定ノ場合ニ在テハ其不確定ナルニ  
拘ハラス裁判所ハ其債權者カ債權者集會ニ加ハ、ルコトヲ許ス可キ

ヤ否ヤ及ヒ幾許ノ金額ニ付キ加ハルコトヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可キモノトナセリ

幾許ノ金額ニ付キ加ハルコトヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定スルニハ例ハハ甲債權者ハ一萬圓ノ債權アリトスル場合ニ於テ其債權額ハ五千圓ノ外之ヲ認メス則チ其半額ニ對シテ異議アルトキハ甲債權者ノ加ハル可キ金額ハ五千圓ナリトスルカ又ハ之ヲ一萬圓ナリトスルカ一ニ裁判所ノ意見ニ從フ可キモノニシテ之ヲ要スルニ債權ノ全ク無効ナル可キ見込ナルトキハ債權者集會ニ加ハ、ルコトヲ許サス然レモ其債權額中幾分ノ有効ナル可キ見込アルニ於テハ其部分ニ付テノミ之ニ加ハ、ルコトヲ許シ若シ全部ノ有効ナル可キ見込ナルトキハ則チ全部ニ付キ之ニ加ハ、ルコトヲ許ス可キモノナリ但會議ニ加ハルニ當リ此ノ如キ金額ヲ定ムルノ必要アルハ該會議ニ於テ決議決權ノ多數

ハ特リ人員ノミニ依テスシテ債權額ノ過半數タルコトヲモ必要トスルニ因ルナリ(第十條三)

本條第一項ノ債權者ハ裁判所ノ許可ヲ受ケ始メテ債權者集會ニ加ハ、ルコトヲ得ヘキモノナリト雖モ其第二項ノ債權者ニ至テハ固ヨリ許可ヲ須ツコトナクシテ自ラ之ニ加ハ、ルコトヲ得ヘキモノトス何トナレハ第二項ノ債權者カ受ケタル異議ハ之カ債權額ニ對スルモノニ非スシテ唯其債權ニ屬スル優先權ノ上ニ存スルヲ以テ其債權額ハ固ヨリ既ニ確定シタルモノニシテ通常債權者タル可キ資格ニ付テハ毫モ缺損スル所ナキヲ以テナリ

第千二十九條 債權ヲ正當時期ニ届出テス又ハ債權ノ確定セサル債權者ハ以後ノ確定ニ因リテ爲ス可キ財團ノ配當ニノミ加ハルコトヲ得然レトモ異議ヲ受ケテ訴訟中ニ在ル債權及ヒ届出竝ニ調査ノ爲メ別段ノ期間ヲ定メラレタル在外國債權者ノ債權ニ付テハ以前ノ配當ニ於テ其債權ニ歸スル割前ヲ留存ス

(第千二十九條) 債權者 第一節 債權ノ届出及ヒ確定



〔義解〕 夫レ財産ノ配當ヲ爲スハ之ヲ同時ニ於テシ且之ヲ平等ナラシムルヲ以テ原則トナスハ已ニ説明セシ所ナリト雖モ或ル場合ニ依リテハ往々之カ原則ニ從フコトヲ得サルモノアリ本條ノ規定ハ則チ此例外ノ一ニ屬スルモノナリ

夫レ債權者ハ破産決定ノ公告ニ依リ債權届出ノ期間ニ其債權ヲ届出ツ可キ旨ノ催告ヲ受ケタルモノナレハ（第三千二條）若シ其期間内ニ届出ヲ爲サ、ルニ於テハ第千二十五條ニ從ヒ新ニ開ク可キ調査會ノ費用ヲ自辨セサルヲ得サルノミナラス本條ニ從ヒ以後ノ確定ニ因リテ爲ス可キ財團ノ配當ニアラサレハ加入スルコトヲ得ス例ハハ財團ノ全價額ヲ一萬圓ナリトシ其内二千圓ハ既ニ之ヲ各債權者ニ配當シタル後ナルニ於テハ期間後ニ届出タル債權者ハ唯其殘額八千圓ノ配當ニノミ加入スルコトヲ得ルカ如シ是則チ自己ノ怠慢ニ因リテ生シタル損

害ニシテ又奈何トモスル能ハサルナリ而シテ此債權ハ假令破産者ヨリ差出シタル貸借對照表ニ記入セラレタルモノ、如キ破産者ニ在テハ既ニ債權ナルコトヲ自認シタル場合ト雖モ別ニ債權者ヨリノ届出アルニ非サレハ盡ク之ヲ承諾セラレサルモノト同視シ以テ本條ノ制裁ヲ受クルコトヲ免レサルナリ

正當時期ニ届出ヲ爲シタル債權ニテモ異議若クハ其他ノ原因ニ依リ久シク確定セサル場合ナシトセス若シ此場合ニ當リ一般ノ配當ヲ遅延スルニ於テハ他ノ債權者ハ之カ爲メ大ナル不利ヲ被フルニ至ル可シ故ニ其未ダ確定セサル債權ハ其確定以後ニ爲ス可キ配當ニノミ加ハルコトヲ得ヘキモノトシ他ノ債權ニ付テハ直チニ配當ノ處分ヲ行フ可キモノトス然レモ既ニ届出タル債權ニ對シテ異議ヲ生シ之カ爲メ其訴訟ノ落著ニ至ラサル場合ニ在テハ本條後段ノ規定ニ從ヒ其落

著後ニ至リ該債權ニ相當スル金額ノ配當ヲ受クルコトヲ得ヘキモノトス是他ナシ若シ此規定ナキニ於テハ惡意アル債權者ハ他ノ債權ニ對シテ徒ラニ異議ヲ申立以テ其確定ニ至ルコトヲ妨ケ遂ニ財團ノ配當ヲ受クルコトヲ得セシメサルノ恐アレハナリ

外國ニ在ル債權者ノ爲メニハ債權ノ届出及ヒ調査會ニ付キ別段ノ期間ヲ設クルノ必要ナシトセス例ヘハ各國ニ支店ヲ有スル商人カ破産シタル場合ニ於テハ之ニ對スル債權者ハ當然各國ニ散在ス可キ譯合ナルヲ以テ別段ノ期間ヲ定ムルニ非サレハ爲メニ平等配當ノ原則ヲ實施スルヲ得ス則チ此ノ如キ場合ニ於テハ既ニ知ラレタル在外國債權者ノ爲メ裁判所ニ於テ其受ク可キ配當額ヲ差引置キ他日届出アリタル時ニ於テ之ヲ配當ス可キモノトスルナリ但特別ニ定メタル期間ヲ過キ尙ホ届出ヲ爲サル場合ニ在テハ先ニ留存シタル金額ハ更ニ

之ヲ一般債權者ニ割戻ス可キコト蓋論ヲ待タサル可キナリ

### 第二節 特種ノ債權者

第三十條 主タル債務者ノ破産ニ於テ届出テタル債權ハ協議契約ノ場合ト雖モ保證人其他ノ共同義務者ニ對シ其金額ニ付キ之ヲ主張スルコトヲ得又保證人又ハ共同義務者ハ主タル債務者ノ破産ニ於テ其償還請求ヲ届出ツルコトヲ得然レトモ主タル債務者ノ爲メニスル協議契約ノ効果ニ從フ

〔義解〕 本條及ヒ次條ハ共同義務者ニ對スル債權者ノ權利ト共同義務者間ニ於ケル相互ノ權利トヲ規定シタルモノナリ而シテ本條ハ一債務者ノ破産シタル場合ニ係リ次條ハ二人以上ノ債務者ノ破産シタル場合ニ係レリ

一債務者カ破産シタル場合ニ於テ其債權ノ全額ヲ届出テ以テ之カ返還ヲ求メタルトキト雖モ保證人又ハ其他ノ共同義務者ニ對シ更ニ其全額ノ返還ヲ求ムルコトヲ得ヘキモノトス是二重ノ返還ヲ求ムルカ

如キ外觀ナキニアラサレトモ單ニ届出ヲ爲シタルノミニテハ未ダ何等ノ効果ヲ生セサルヲ以テ則チ之ヲ受取ル迄ハ幾回ノ請求ヲ爲ストモ敢テ差支ナキニ因ルナリ而シテ協諧契約ノ場合ト雖モト云ヘル法文ハ最モ必要ノ主點ナリ抑協諧契約ハ債權者總會ノ議決ニ依リ割合ヲ以テ各請求金額ヲ低減シ以テ之ヲ落著ニ至ラシム可キ和解契約ニシテ例ヘハ各債權ノ半額ヲ支拂ヒ以テ之ヲ落著ス可シトノ決議アリタルトキハ各債權者ハ破産者ニ對シテハ則チ半額ノミ受取ルコトヲ得ルニ過キササルナリ然レモ此議決ハ少數論者ノ意思ニ反スルモ取ラ之ヲ願ミサル所ノモノニシテ所謂壓制示談ト稱スルモノナルノミナラス抑債權者カ協諧契約ヲ取結ヒタル目的ハ其損失ノ可成的少小ナラシムコトヲ欲シタルニ在リ之ヲ反言スレハ利益ノ可成的大ナラシムコトヲ欲シタルニ在リテ毫モ免除ノ意思ヲ有シタルニ非サルカ故ニ

此契約ニ依リ破産者カ被フリタル利益ハ固ヨリ之ヲ其他ノ義務者ニ及ホスコトヲ得ルキモノニ非ス是ヲ以テ該債權者ハ破産者ニ對シテハ所謂半額ノ支拂ヲ求ムルコトヲ得ルニ過キスト雖モ保證人其他共同義務者ニ對シテハ更ニ其殘額ヲ請求スルコトヲ得ヘキモノトスルナリ之ヲ詳言セハ協諧契約ニ依リ半額ヲ以テ勘辨ス可キ示談ノ調フタルトキト雖モ保證人其他ノ共同義務者ニ對シテハ敢テ此契約ニ服従スルノ義務ナシ依然全額ヲ請求スルコトヲ得ルト云フニ在リ  
 保證人又ハ共同義務者カ其債權者ニ對シテ代償ヲ爲シタルトキハ債務者ノ破産ニ於テ其償還請求ヲ届出ツルヲ得ヘキコト毫モ通常ノ債權者ニ異ナルコトナシト雖モ若シ其代償前ニ於テ債權者ヨリ債權ノ届出ヲ爲シ而シテ協諧契約ノ調フタルカ爲メ其債權ノ幾分ヲ減殺セラレタルトキハ保證人又ハ共同義務者ハ債權者ニ對シテ其殘額ノ代

債ヲ爲シタルニ拘ハラズ破産者ニ對シテハ之カ償還ヲ請求スルコトヲ得サルモノトス是之ヲ協諧契約ノ効果ニ從フト云ヒ保證人等ニ在ラモ此契約ノ旨趣ニ從ハサルヲ得サルモノトスルナリ抑此ノ如キ規定ヲ設ケタル所以ノモノハ破産者ニ於テ既ニ協諧契約ノ利益ヲ得タル上ハ同一ノ負債ニ付キ更ニ該契約ニ反スル請求ヲ受クルノ不當ナルニ因ル之ヲ詳言スルハ若シヤ破産者ノ債務ニ付キ盡ク保證人アル場合ニ於テハ該債務ニ付折角債權者ヨリ受ケタル利益ハ忽チ保證人ノ奪却スル所ト爲リ協諧契約ヲシテ空ク無効ニ歸セシムルノ結果ヲ生スルニ因ルナリ但共同義務者トハ完全ナル連帶義務者及ヒ不完全ナル連帶義務者并ニ第七百十五條ニ定メタル連帶義務者ヲモ總稱スルナリ

〔論說〕 或人曰ク本條第二段即チ保證人又ハ共同義務者ハ主タル債務者ノ破産ニ於テ其償還請求ヲ届出ツルコトヲ得トアルハ債權者カ其債權ノ全額ニ就キ破産者ニ對シ請求ヲ爲シタルニ拘ハラズ保證人又ハ共同義務者モ亦自己カ債權者ニ辨濟スルコトアル可キ金額ニ付キ破産者ニ對シテ請求ヲ爲スコトヲ得ヘキ旨趣ニシテ破産者ハ同一ノ債權ニ付キ二重ノ請求ヲ受クヘキ規定ナルカ如シト而シテ此說タル曾テ本法ヲ非難セシ一ニ居リタルモノナリ然レモ余ノ見ル所ニ依レハ既ニ説明セシ如ク保證人又ハ共同義務者カ届出ヲ爲スコトヲ得ヘキハ自ラ償還ヲ爲シタル以後ニ限ル可キモノナルカ故ニ此場合ニ在テハ債權者ハ破産者ニ對シテ該金額ヲ請求ス可キ道理ナシ則チ破産者ニ在テハ決シテ二重ノ請求ヲ受ク可キ場合ナキナリ而シテ論者若シ保證人等カ該權利ヲ行フハ何故ニ償還請求ヲ爲シタル以後ニ限レルカト問ハ、余ハ之ヲ法文自ラ明示スル所ナリト答フ可シ何トナレハ現

ニ償還請求ヲ届出ツルコトトアル上ハ即チ保證人等ニ於テ償還請求  
ヲ爲スコトヲ得ヘキ權利ヲ獲得シタル以後ニ非サレハ能ハサル所而  
ノ此權利ヲ獲得スルハ債權者ニ對シテ自ラ辨濟ヲ爲シタル後ニ限レ  
ルヲ以テナリ

第三十一條 二人以上ノ共同義務者カ破産シタルトキハ其各義務者  
ノ破産ニ於テ債權ノ全額ヲ届出ツルコトヲ得

各自ノ破産財團ノ間ニ於ケル償還請求權ハ之ヲ主張スルコトヲ得ス  
然レトモ債權者カ受取ル割前ノ額カ主タルモノ及ヒ從タルモノヲ合  
セタル債權ノ總額ヲ超過スルトキハ其超過額ハ共同義務者中他ノ共  
同義務者ニ對シテ償還請求權ヲ有スル者ノ財團ニ歸ス

〔義解〕 本條第一項ハ例ヘハ甲乙二名ニテ負擔スル債務額一萬圓ナル  
場合ニ於テ若シ其二名共ニ破産シタルトキハ該債權者ハ甲ノ財團ニ  
對シテモ乙ノ財團ニ對シテモ各一萬圓ノ請求ヲ爲スコトヲ得ルヤ又  
ハ其半額即チ五千圓宛ノミ請求スルコトヲ得ルニ止マルヤノ問題ヲ

決定シタルモノニシテ即チ此場合ニ於テハ各財團ニ對シテ全額一萬  
圓ニ對スル割合ノ配當ヲ求ムルコトヲ得ヘシト云フニ在リ是各連帶  
義務者ハ獨立シテ負債ノ全額ヲ擔當セサル可ラストノ原則ニ因ルモ  
ノナリ然レモ各財團ノ配當割合何レモ五割以上ナルトキハ甲ヨリモ  
五千圓以上乙ヨリモ五千圓以上ヲ得ヘク又甲ハ四割ニシテ乙ハ七割  
ナルトキハ甲ヨリハ四千圓乙ヨリハ七千圓ヲ得ヘクシテ債權者ハ債  
務者ノ破産ニ因リテ却テ債權額ニ超過スル配當ヲ受クルコトナキヲ  
期セス若シ夫レ此ノ如キ場合ニ在テハ本條第二項ニ從ヒ該債權者ニ  
於テ固ヨリ其超過額ヲ返戻セサルヲ得サルモノナリ

各自ノ破産財團ノ間ニ於ケル償還請求權トハ例ヘハ一萬圓ニ對シニ  
人ノ負債者アル場合ニ於テ若シ甲ノ財團ヨリ六千圓ノ配當ヲ爲シタ  
ルキハ其配當額ハ連帶義務者トシテ通例負擔ス可キ割合即チ連帶債

務ノ半額ヲ超過スルヲ以テ其超過額千圓ニ付テハ乙ノ財團ニ對シテ  
 之カ償還ヲ請求スルコトヲ得ヘク又甲ハ負債者ニシテ乙ハ其保證人ヲ  
 ル場合ニ當リ乙ノ財團ヨリ若干ノ金額ヲ支拂ヒタルニ於テハ甲ノ財  
 團ニ對シテ償還ヲ求ムルコトヲ得ヘキカ如ク一財團ヨリ他ノ財團ニ對  
 シテ償還ヲ求ムヘキ權利ヲ謂フ而シテ此權利ハ普通人ノ間ニ在テハ  
 固ヨリ之ヲ行フコトヲ得可シト雖モ財團ト財團トノ間ニ在テハ全ク  
 之ヲ例外ニ置キ以テ其權利ヲ行フコトヲ得ストスルナリ抑此例外ヲ  
 設ケタル所以ノモノハ若シ普通ノ手續ニ從フトキハ此連帶義務者ヲ  
 シテ同一ノ負債ニ對シ數度ノ辨濟ヲ爲サシムルカ如キ不正ナル結果  
 ヲ生シ爲メニ平等分配ノ原則ヲ破壞スルニ至ルニ因ルナリ何トナレ  
 ハ債權者ハ甲(債務者)ニ對シテ一萬圓ノ請求ヲ爲シタルヲ以テ破産管  
 財人ハ之ニ因リ配當案ヲ作り則チ甲ノ財團ヨリ其半額五千圓ヲ支拂

フ可キ割合トナリタル場合ニ於テ若シ乙(保證人)ハ該債權者ニ對シテ  
 自ラ殘半額ノ代償ヲ爲シタリトテ甲ノ財團ニ對シ更ニ五千圓ノ請求  
 ヲ爲スコトヲ得ルトセハ甲ニ在テハ一萬圓ノ負債ニ對シテ一萬五千  
 圓ノ請求ヲ受クルコト、ナリ即チ五千圓ニ付テハ全ク二重ノ請求ト  
 ナリテ他ノ債權者ヲシテ爲メニ平等ノ權利ヲ行フコトヲ得サルニ至  
 ラシムルヲ以テナリ

前ニ例示セシ如ク甲乙ノ財團ヨリ受取ル可キ金額カ債權ノ額ニ超過  
 スルトキハ債權者ハ不當ノ利得ヲ受クルニ至ル可キヲ以テ此場合ニ  
 於テハ其超過額ヲシテ之ヲ財團ニ歸セシムルヲ得ヘキモノトス例ハ  
 ハ一萬圓ニ對スル二人ノ連帶義務者中甲財團ヨリ七千圓乙財團ヨリ  
 四千圓ヲ得タルトキハ則チ一千圓ノ超過トナルヲ以テ此超過額ハ他  
 ノ共同義務者ニ對シテ償還請求權ヲ有スル者即チ甲ノ財團ニ歸スル

モノトスルカ如シ但主タルモノ從タルモノトハ要スルニ元金及ヒ利  
子ト云フニ異ナルコトナキナリ

第一千三十二條 左ニ掲クル債權ハ届出及ヒ確定ニ關スル規定ニ從フコ  
トヲ要セス

第一 裁判費用、管理費用其他破産手續上ノ費用

第二 公ノ手数料及ヒ諸税

第三 管財人カ財團ノ爲メニ負擔シタル義務ヨリ生スル債權

右債權ハ破産主任官ノ指圖ニ從ヒ通常ノ方法ヲ以テ財團ノ現額ヨリ  
之ヲ支拂フ

〔義解〕 本條ハ破産手續ニ付キ二個ノ例外ヲ規定シタルモノナリ則チ  
第一ハ届出及ヒ確定ニ關スル規定ニ從フヲ要セサルコト第二ハ通常  
ノ方法ヲ以テ財團ノ現額ヨリ支拂フコト是ナリ  
届出及ヒ確定ニ關スル規定トハ則チ前節ニ規定シタル手續ヲ謂フ夫  
レ普通ノ債權ハ其届出期間ニ届出ヲ爲サ、ルニ於テハ第一千二十五條

及ヒ第一千二十九條ノ制裁ヲ受クルコト免レヌ加旃該債權ノ實否ヲ調  
査スル爲メ特ニ第一千二十六條ノ手續ヲ履行セサルヲ得スト雖モ本條  
ニ列記シタル第一號乃至第三號ノ債權ニ付テハ總テ此ノ如キ規定ニ  
從フコトヲ要セス唯之ヲ管財人ノ調査ニ一任スルニ過キサルモノト  
セリ是蓋第一號及第三號ノ債權ハ破産宣告後ニ生ジ第二號ノ債權ハ  
法律若クハ規則上ノ結果ニ依リ生シタルモノニシテ管財人及ヒ破産  
主任官ニ於テ既ニ之ヲ熟知セルモノナレハ敢テ普通ノ手續ニ從フノ  
必要ナキニ因ルナリ

管財人ハ代理人ト同一ノ責任ヲ有スルモノナレハ(第一千十條)常ニ財團ノ  
利益ヲ保護セサル可ラス故ニ右ニ謂フ如ク管財人ニ於テハ本條ノ規  
定ニ拘ハラズ自ラ進メテ債權ノ調査ヲ爲サ、ルヲ得ス而シテ之カ不  
都合アリト認メタル場合ニ於テハ其旨ヲ破産主任官ニ申立テ以テ其

決定ニ任ス可キモノナリ但此決定ニ依リ除斥セラレタル債權者ハ普通ノ手續ニ從ヒ管財人ニ係リテ起訴スルヲ得ヘキモノトス  
 通常ノ方法ヲ以テ云々トハ破産手續上ノ方法ニ從ハサルトノ謂ニシテ則チ破産財團ニ對スル債權者ハ其債權額ノ割合ニ從ヒ配當スルニ足ル可キ財團ノ生スル毎ニ同時ニ平等ノ配當ヲ受ク可キモノナリト雖モ(第千四十五條及第千四十六條)本條ニ掲ケタル債權者ニ在テハ右ノ規定ニ從フコトヲ要セス則チ他ノ債權者ニ在テハ未タ何等ノ配當ヲ受ケサルニ拘ハラズ先ツ其財團ノ現額中ヨリ自己ノ有スル債權ノ全額ヲ受取ルコトヲ得ヘキモノトスルナリ  
 本條ニ於テ注意ス可キハ第一號乃至第三號ニ列記シタル債權ノ順序ハ則チ先取ノ順序ヲ指定シタルモノニシテ若シ破産財團ヲ以テ第一號ノ債權ヲ完済スル能ハサルトキハ第二號以下ノ債權ハ一モ其配當

ヲ受クルコトヲ得ス則チ第一號ノ債權ヲ完済シタル後第二號ニ及ハ第二號ヲ完済シタル後第三號ニ及フ可シトノ旨趣タルコト是ナリ然レモ同一號中ニ記載シタル各種ノ債權ニ付テハ其記載ノ順序ニ拘ハラス之ヲ平等ニ分配ス可キモノタルコト敢テ疑フ可キコアラサルナリ

第千三十三條 破産手續ニ加ハリタルニ因リテ債權者ニ生シタル費用ハ財團ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得ス

〔義解〕 本條ハ財團ニ對シテハ破産宣告ノ日ヨリ利息ヲ生スルコトヲ止ムルノ規定(第百九十八條)ト同一ノ理由ニ出タルモノニシテ時々増加ス可キ費用ヲ算入スルニ於テハ殆ソト債權ノ總額ヲ一定スル時期ナク爲メニ配當額ヲ定ムルニ由ナキニ至ル可シ故ニ財團ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得スト謂ヒ唯之ヲ破産者ニ對シテノミ求ムルコトヲ得ヘキモノトスルナリ



草案ニ於テハ破産者ニ科シタル罰金ヲモ本條ニ列記シ以テ之ヲ財團ニ求ムルヲ得サル旨ヲ明示セリ今ヤ之ヲ本條ヨリ削除シ單ニ費用ニノミ止メタルヲ以テ讀者或ハ罰金ニ付テハ財團ニ對シテ請求スルヲ得ヘキモノトシ爲メニ迷路ニ陥ルノ虞ナシトセス然レモ爰ニ之ヲ取除キタル所以ノモノハ抑罰金ハ債權者トシテ之ヲ請求スル者ナク唯其完納期限ヲ定メ置キ若シ其期限内ニ完納セサルニ於テハ直チニ之ヲ輕禁錮ニ換フ可キモノナレハ(刑法第二十七條)之ヲ財團ニ求ムル場合ハ到底生ス可キモノニ非ストセルニ因ルナリ

第三十四條 (削除)

[論說] 本條ハ既ニ削除ニ係リタルモノナレハ今更之カ義解ヲ付スルノ要ナシト雖モ元來此法文ハ如何ナル規定ニ係リタルヤ且其削除ハ如何ナル理由ニ出タルヤ爰ニ之ヲ説明スルハ蓋無用ノ業ニ非サル可

シ則チ法文ニハ婦ハ其夫ノ財團ニ對シテハ法律、明約又ハ疑ナキ慣例ニ依リ婦ノ特有ニ歸スル所有權ヨリ生スル債權ノミヲ主張スルコトヲ得トアリ抑此規定ノ必要ナル所以ハ夫カ破産シタル場合ニ於テ其婦ノ特有ニ屬スル財産ヲ以テ之ヲ財團ニ組入レラレタルトキハ第一千五百條ノ規定ニ從ヒ婦ハ其所有權アルコトヲ證明シ以テ之カ取戻ヲ求ムルヲ得ヘキコト毫モ他人ニ異ナルナシト雖モ普通ノ債權ニ基キ請求ヲ爲ス場合ニ在テハ宜ク之カ範圍ヲ定メ以テ各債權者ノ利益ヲ保護セサル可ラサルニ因ルモノニシテ之ヲ要スルニ婦タルモノハ通常自己ノ財産ヲ特有セス且道義上并ニ法律上ノ理由ニ依リ其夫ト運命ヲ共ニシ夫カ破産ニ因リテ被フル可キ不幸ハ其婦ニ於テモ共ニ之ヲ負擔ス可キモノナレハ夫ノ財團ニ對シテ請求ヲ爲スコトヲ得ヘキ範圍ハ成ル丈ク之ヲ狭少ニス可キ理由アルノミナラス諸外國ノ實例

ニ依ルモ夫ニシテ破産ノ處分ヲ受ケタルトキハ其婦ハ巧ニ債權者ヲ欺罔シ以テ財産ヲ隱匿シ依然奢侈ナル生活ヲ爲シ世人ヲシテ轉々憤怒ニ堪ヘサラシムルノ弊害アルヲ以テ法律ノ規定ニ依リ真正ナル債權者ノ利益ヲ保護セノコトヲ欲スルニ在ルナリ佛帝那破烈翁第一世ハ當時既ニ此ノ如キ弊害アルヲ諒知シ千八百八年同國參議院ニ於テ商法ヲ討議スルニ當リ力ヲ極メテ該弊害ヲ芟除セントシ日用必需ノ物品ヲ除ク外ハ婦ノ財産ト雖モ盡ク之ヲ財團ニ組入ル可キ旨ヲ論セリ凡ソ此等ノ事情ヲ察知スル者ハ蓋本條ヲ設クルノ必要ナル所以ヲ知ル可シ然ルニ今ノ立法者ハ故サラニ之ヲ抹殺セリ而シテ之ヲ抹殺セシハ實ニ貴族院特別委員會ノ意見ニ基キタルモノナリ該委員長ノ報告ニ曰ク第千三十四條ノ削除ニ附キマシテハ色々論說モコサイマシタ併シ到底議論ノ歸スル所ヲ考ヘテ見マサルト婦カ夫ノ財産ニ向

ツテ争フハ婦タルノ徳義ニ背クコトヲアル此ノ如キコトヲ法典ニ掲クルハ我邦ノ風俗ヲ紊ルノ階梯ヲハナイカト云フ道德論カラ削ラレマシタト夫レ道德論ハ吾人固ヨリ之ヲ嘉ミス然レモ人事繁雜ノ時節現ニ事實ノ此ノ如キモノアルニ於テハ裁判官タルモノ如何ニ之ヲ處分ス可キ歟委員會ノ意見ニ依レハ婦カ夫ノ財産ニ向ツテ争フハ婦タル徳義ニ背クトノ理由ニ依リ直ニ之ヲ却下セサルヲ得サル可シ抑事實ノ未タ發生セサル可キ時代ニ於テ豫メ法律ヲ設クルハ余其早計ニ失スルヲ知ル然レモ本法實施ト共ニ當然事實ノ生スルヲ免レサル時ニ當リ之ニ對シテ適用ス可キ法律ナク即チ故サラニ之ヲ削除スルカ如キハ余ノ第一同意スルヲ得サル所ナリ加之委員會ハ本條ノ規定ヲ以テ婦カ夫ニ向テ争フモノトセシト雖モ余ノ見ル所ニ依レハ寧ロ之ヲ他人ニ向テ争フモノト謂ハサルヲ得ス何トナンハ夫ニシテ破産ノ

こやく

宣告ヲ受ケタル以上ハ其財産ハ忽チ一ノ財團トナリ而シテ其將ニ他人ニ配當セラレントスルニ當リ婦ハ其財團ニ對シテ取戻ヲ求ムルモノナルノミナラス其結果ニヨリ之ヲ論スルモ此争訟ニ依リ或ハ他人ノ損害トナルコトアルモ自然其夫ノ不利ヲ讓サ、ル可キヲ以テナリ然ハ則チ立法者ハ實際ノ利害如何ヲ顧ミス且其法文上明ニ「財團ニ對シテ」トアリテ其被告ハ破産管財人(第九百八十五條)タルニ拘ハラス唯婦ヲ起訴者タルヲ欲セサルトス一點ニ依リ以テ本條ヲ削除セシハ惜ミテモ猶ホ餘アリト謂フ可シ

### 第三節 債權者集會

第三十五條 債權者集會ハ破産主任官之ヲ招集シ及ヒ之ヲ指揮ス其招集ハ會議ノ事項ヲ明示スル公告ヲ以テ之ヲ爲ス  
其集會ハ管財人債權ノ確定シタル債權者及ヒ第九百二十八條ニ依リテ参加スルコトヲ得ヘキ債權者ヨリ成立ス然レトモ優先權ノ確定シタ

ル債權者ハ其優先權ヲ拋棄シタル限度又ハ優先權ヲ行フニ當リ不足アル可シト推定セラレル限度ニ於テノミ参加ス

債權者ハ代理人ヲ差出スコトヲ得

破産者ハ之ヲ集會ニ呼出スコトヲ得

〔義解〕 債權者集會ハ法律ノ規定ニ於テハ僅ニ一回ニ過キス即チ第一ハ破産決定ト共ニ豫メ期日ヲ定ム可キモノ(第九百八十五條第六號)ニシテ其會議ノ事項ハ主トシテ第三十七條ニ規定シタルモノニ係リ且兼テ協諧契約ノ議決ヲ目的トスルモノナリ(第三十八條第二項)而シテ第二ニハ終局ノ計算ヲ爲シ及ヒ破産手續ノ終結ヲ決定スル爲メ最終ニ開ク可キモノ(第四十條)ナリトス然レモ管財人若クハ債權者ノ申立ニ依リ又ハ破産主任官ノ職權ヲ以テ臨時ニ之ヲ開クコトナシトセス本條ノ規定ハ則チ右二種ノ集會ニ付テ共ニ之ヲ適用ス可キモノナリ但或ル國ノ法律(獨破法第八十條)ニ於テハ管財人又ハ債權者總代又ハ五名以上ノ債權者ヨリ債

權者集會ヲ請求スルトキハ裁判所ハ必ス之ヲ許可セサル可ラサルモ  
 ノトナセリト雖モ本法ニ於テハ其許否ヲ決スルハ專ラ破産主任官ノ  
 權内ニ屬スルヲ以テ枉クテ請求ニ從フノ義務ナキモノトス  
 第一集會ニ付テハ所謂破産決定ト共ニ其期日ヲ定メ且之ヲ公告スル  
 モノナンハ本條第一項ノ公告ニ係ル規定ハ唯臨時集會及ヒ最終ノ集  
 會ニ付テノミ之ヲ適用ス可キモノナリ而シテ第千二十三條ニ於テハ  
 所在ノ知レタル債權者ニハ公告ノ外別ニ書面ヲ以テ通知ス可シトノ  
 規定アリト雖モ本條ニ於テハ單ニ公告ヲ以テ之ヲ爲ストノミアルカ  
 故ニ必スシモ此ノ如キ特別通知ヲ要セサルモノト知ル可シロイスン  
 ル氏ハ漫ニ佛國ノ學說ヲ引用シ本條ノ場合ニ於テモ第千二十三條ノ  
 規定ニ從フ可キモノナリトノ說ヲ立タンニ是蓋妥當ノ見解ナリト謂  
 フテ得サル可キナリ

本條第二項ハ集會ニ列席スルヲ得ヘキ資格ヲ定メタルモノニシテ其  
 議決ノ方法ニ付テハ第千三十六條ニ於テ別ニ之ヲ定ム  
 債權者ハ代理人ヲ出スヲ得ヘク且其代理人ハ必スシモ辯護士タルヲ  
 要セス(民事訴訟法第六十三條)ト雖モ管財人ヲ以テ代理人トスルカ如キハ當然之  
 ヲ許スコトヲ得サルモノトス又一人ニシテ數名ノ代理人トナルトキ  
 ハ一面ハ甲委任者ノ資格ヲ以テ原案ヲ賛成シ一面ハ乙委任者ノ資格  
 ヲ以テ更ニ反駁ヲ爲スカ如キ奇觀ヲ呈スルコトナキニアラサルヘキ  
 モ必スシモ之ヲ爲スコトヲ妨ケサルナリ  
 破産者ハ呼出ニ依リ集會ニ出ツ可キ義務アルモノニシテ若シ此義務  
 ニ背クトキハ少クモ協諾契約ノ申立ヲ爲スコトヲ得サルモノトス(第  
三十八條)白法ノ如キハ此義務ニ背クモノヲ以テ直チニ過怠破産ノ刑ニ處  
 ス可キモノトセリ又以テ此義務ノ重要ナルヲ知ル可シ